
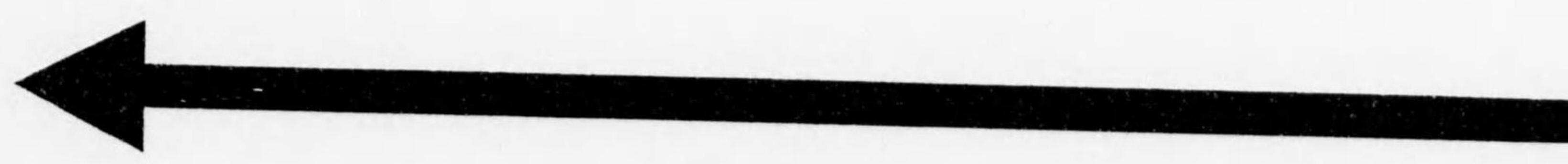


188.93
1012

188.93-Ko12ウ

1200500728456



始



188.93
No 12



小林一郎著

安國論通釋



東京 慈念會 版

其志念堅固
有大忍辱力



壬子四月二十日瑞法光院日榮大比丘尼弟二
十二回竹印忌辰子常りてを私と瑞法光院
日榮大比丘尼の印懸るがる竹葉詢を交付殊

蹟筆御下貌淨日・蹟筆御下貌榮日

本年四月二十二日は瑞法光院日榮大比丘尼第二十三回の御忌辰に當ります。私は瑞法光院日榮大比丘尼の御懇到なる御薫陶を受け殊にその御後を嗣がせて頂きまして常に御慈恩の厚いことを感銘し、また學徳共に足らぬ身で此の大任を全うし得ぬことを慚愧してゐるのみで御座います。此の頃小林先生の立正安國論通釋が御脱稿であるといふことを伺ひましたので之を私共の手で世に公にしたならば瑞法光院日榮大比丘尼の御忌辰を記念するのに最も適しいことではないかと考へまして先生の御承諾を得た次第で御座います。今日の時勢に最も適切なる此の書を御精讀になる方が一人でも多いやうに私は誠心を以て念願いたします。

昭和十七年三月

村 雲 日 淨

例言

- 一、立正安國論の原文は漢文で、中に引用されてある經文等も勿論漢文であります。すが、読み易からしむるために、盡く假字交りに書き改めました。
- 二、本文並に引用せられた經文等の中の故事及び難解と思はるゝ語に、極めて簡単な説明を加へ、然る後に各段の大意を解釋することにいたしました。
- 三、本文にも又引用せられた經文等の中にも多くの人名が出て居ますが、其の必要のあるものに限つて、其の事蹟の概略を述べて置きました。
- 四、文永六年十二月に書かれた『後記』は、本文を解釋するのに缺くべからざる参考でありますから、之を併せて收むることにいたしました。
- 五、古來此の立正安國論に就いての研究を發表された方々が尠くありません。本書を刊するに當つて多くの益を得ましたことを其等の方々に謹んで御禮申し上げます。

目次

一、兩尼公御照影
一、兩尼公御筆蹟
一、序文及例言
一、序 說 一
一、立正安國論 五
一、立正安國論後記 三〇八
一、收 結 三二三

立正安國論通釋

小林 二郎 著



序 說

立正安國論は日蓮聖人の御歳三十九の時、即ち文應元年七月十六日に、前執權たる北條時頼の許へ提出されたものであります。此の文應元年は龜山天皇の御宇で、今より六百八十二年前に當ります。立正とは正法を立つること、安國とは國家を安んずることであります。國家を安んずるのには、必ず正法を立てなければなりません。吾が日本帝國は神の御開きになつた國であります。此の神の御開きになつた國を護つて益々之を發展せしむることが、實に吾々國民の身に負ふところの務めであります。明治天皇の御製には、

ちはやぶる神の開きし道をまた

ひらくは人のちからなりけり

と仰せられてあります。神の御開きになつた此の國を益々盛んにするには人の力が最も大切であります。國民が協力一致して此の國を盛んにするために努めますならば、國は何處までも發展して行くに疑ひはありません。國民が協力一致するには各自の私を捨てなければならぬのであります。各自の私を捨てさせるのには之に正しい教へを與へることが大切なので、崇神天皇の詔には

民を導くの本は教化に在り。

と仰せられてあります。教化を盛んにするには勿論多くの人の協力を要しますが、一國の政治を統率すべき地位に在る人の責任が最も重いと考へなければなりません。それで日蓮聖人は此の立正安國論を前執權たる北條時頼へ差出されたのであります。

北條氏は源氏の臣下で、朝廷からは陪臣なのであります。その當時は北條氏が政權を一手に握つて居りました。源頼朝が鎌倉に幕府を開いたのは元暦元年のことです。承久元年

正月に實朝が死ぬまで、凡そ三十五年間源氏の天下が続いたわけですが、實は正治元年正月に頼朝が死んでから、將軍といふものは名儀ばかりのものになつて、實權は北條氏の手に移つてしまひました。此の時から元弘三年に北條氏が亡ぶるまで百三十餘年の間、北條氏は陪臣でありながら執權と稱して、兵權と政權とを併せて其の手に收めて居たのであります。随つて國家の大事は北條執權の意見次第で盡く決定されるといふ有様でありました。

初めて執權となつたのは北條時政であります。日蓮聖人が立正安國論を書かれた頃の執權は北條長時でありました。然るに聖人が此の長時を措いて前執權の時頼に立正安國論を差出されたのは理由のあることであります。此の時頼は北條義時の曾孫で五代目の執權でありましたが少しも其の勢力を恃みとせず、人民を惠むことにのみ心を盡して居たので、非常に人望があつたのであります。何分にも病身であつて劇しい職に堪へられなくなつたので、三十歳の時に其の職を辭して、最明寺に入つて出家いたしました。その時に嗣子の時宗はまだ六歳の幼年でありましたので此の時宗の成長するまで同族の長時が假に執權となつて居たのであります。それで時頼は出家をいたしましたけれども、大切な政務に就いてはいつも裁決を與へて居りましたから、日蓮聖人は

此の日本の國を安んずべき根本に關して魂を打込んで書かれた、此の立正安國論を宿屋左衛門光則といふ人を通じて時頼の所へ差出して、其の反省を促されたのであります。

日蓮聖人の御一代に書かれた御書は夥しくありますが、此の立正安國論は特に魂を打込んで書かれたものと考へられるのであります。聖人が御歳六十一の十月に武藏國池上で御入滅になる時に、御弟子達を御集めになつて、此の立正安國論の大意をお説きなりましたのを以て見ましても、此の御書が御一代の多くの御書の中で殊に重要なものであることは明かであります。抑々此の立正安國といふことは日蓮聖人の御一代を一貫したる、最も大切なる御主張でありまして、聖人の御生涯は立正安國のために捧げられたものであると申しても決して過言ではありません。聖人は吾が日本國が世界萬國に冠絶したる、最も尊い國であるといふことを確信して居られました、『神國王御書』の中に於ては、

我が日本國は一閻浮提の内、月氏漢土にもすぐれ、八萬の國にも越えたる國ぞかし。

と斷言せられました。一閻浮提といふのは全世界のことでありまして、その頃は全世界に八萬の國があると考へられて居たのでありますが、聖人は此の八萬の國の中で日本が最も勝れた國である

と信じて居られたのであります。また月氏漢土といふのは印度と支那とのことでありまして、佛法は印度に興り、支那を通して吾が國へ傳はつたものでありますから、吾が國に於て佛法を信ずる者の中には、印度や支那を先進國として重んじ、自ら卑しんで後進國であると思つて居るやうな人が少くなかつたのであります。其の中に於て獨り日蓮聖人が日本の國體の萬國に冠絶して居ることを明かにせらるゝと共に、他日大乘の教へといふものは吾が日本を中心として全世界に弘まるべきであるといふことを確信せられ、『月氏漢土よりもすぐれた國』と斷定せられたのは實に感佩すべきことであります。

聖人は此の國を思ふ念が非常に強いので、此の國に正しい教へが行はれぬために、此の國の貴い本質を充分に發揮することの出来ぬことを殊に深く悼まれました、其の至情が凝つて『立正安國論』となつたのであります。これは日本國民全體に對する聖人の誠心から出たる訓誡であります。聖人が之を北條氏の許へ差出されたのは、その當時の實情から考へて、日本國民を動かすには先づ武士階級を動かさなければならなかつたからであります。武士といふものは元來地位の卑いものでありますでしたが次第に勢力を得まして、平清盛が太政大臣となつて政權を握つてから

は、何事でも武士の力で決定されるやうになりました。清盛が太政大臣になつた時から此の立正安國論の書かれた時までには既に九十四年を経て居ります。此の間に於て平家が亡びて源氏が之に代り、源氏が亡びて北條氏が政權を握るやうになりましたが、武士階級全體の勢力といふものは益々強くなるばかりでありました。また實際武士といふものが國民の指導者であつたのであります。當時の百姓町人といふものは殆んど何等の教養もなく、たゞ各自の業を營んで毎日を送つて居るだけで、國の盛衰などに意を注ぐものは全くありませんでした。武士は天下の政治を掌つて居ると共に、其の武力を以て國を護るといふ大責任をも負うて居るのでありますから、眞に國民を指導するだけの覺悟をもつた者は、此の武士階級の中にのみ見出されたのであります。それでありますから何事でも皆盡く武士の意嚮次第で決定されたのでありまして、武士の信仰が正しくなりさへすれば、隨つて日本國民の信仰が皆正しくなることは疑ひがなかつたのであります。

此の武士全體を率ゐて行く者が北條氏でありました。勿論北條氏は鎌倉の將軍の下に屬するもので、朝廷に對しては陪臣でありましたが、天下を動かす所の實權は北條氏が握つて居りました。源氏が亡びて後も名義上は將軍といふものが置いてありまして、北條氏は將軍の下に屬する

執權職でありましたが、實際北條氏が日本國中の武士を支配して居たのであります。それ故に日蓮聖人は日本全國民を正しい信仰に入れるには先づ北條氏を覺醒させなければならぬと御決心になつたのであります。今日では日本國民全體の力で此の國を護り、又此の國を發展せしめなければならぬので、國民各自も皆それだけの自覺をもつて居りますから、若し日蓮聖人が今日に出た立正安國論をお書きになるならば、之を國民全體に對して御發表になつたに違ひないと思はれます。されば此の立正安國論は北條時頼に御示しになつたものでありますけれども、今日の吾々は之を直接に吾々に對して與へられたる御教訓と心得て讀まなければならぬわけでありまして、

さて此の立正安國論を書かれるまでに日蓮聖人の經て來られた道程を一通り考へて見ますと、聖人が此の書をお書きになつた動機といふものがまことに明かになると思はれます。聖人は十二歳の時に安房の清澄寺に入つて道善房の弟子となり、十六歳の時に受戒して僧となり、十七歳の時に鎌倉へ出て諸宗の學者に就いて教へを受けられたのを始めとして、三十二歳の春まで深き研究を積まれたのであります。後に至つて聖人は當時のことを回顧して、

日蓮は日本國安房國と申す國に生れて候ひしが、民の家より出で、頭を剃り袈裟を着たり。此

度いかにもして佛種をも種る、生死を離るゝ身とならんと思ひて候ひし程に、皆人の願はせ給ふ事なれば阿彌陀佛を頼み奉り、幼少より名號を唱へ候ひし程に、いさゝかの事ありて此事を疑ひし故に一の願を起す。日本國に渡れる處の佛經並に菩薩の論と人師の釋とを習ひ見候はゞや。また俱舍宗・成實宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・眞言宗・法華天台宗と申す宗どもあまた有りと聞く上に、禪宗・淨土宗と申す宗も候なり。此等の宗々枝葉をば細かに習はずとも、所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、隨分走りまはり、二十六年の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の國々寺々、あらあら習ひ回り候ひしほどに——妙法尼御返事

といつて居られます。實に此の二十年間に亘つての研究が後年に於ける不惜身命の御活動の根柢を作つたものであります。

聖人の出家せられた清澄寺は台密の寺でありました。台密といふのは天台宗でありながら密教即ち眞言宗の教義を殊に重んじたものであります。吾が國に於て初めて天台宗の教義を弘められたのは傳教大師でありまして、大師は二十二歳の時即ち延暦七年に叡山に一乘止觀院（後に延暦

寺と改稱せられて今日に至つて居りますが）を建てられてから、弘仁十三年に五十六歳で御入滅になるまで、此の教義を弘むることに全力を注がれたのであります。天台宗といふものは天台大師を開祖とするので、支那の陳の代に興り隋を経て唐に至つて益々盛んになりました。大師は研究の上にも研究を重ねた末に、釋尊の御精神は法華經一部の中に説き悉されてあることを見極め、此の法華經を依經として天台宗を御立てになつたのでありますから、佛教の中に流派はいろいろありまして、眞に佛意に合するものとしては此の宗の外にないわけでありまして。此の天台大師の御入滅後百九十年を経て吾が國に天台宗を弘むるために起られたのが傳教大師であります。

傳教大師は學徳共に一代に秀でた方であり、其の上に桓武天皇の御信用が極めて厚かつたものでありますから、叡山は益々榮えたのであります。平城天皇の大同年に至つて、三年前から支那に留學して居た弘法大師が歸朝して眞言宗を傳へました。尤も弘法大師は傳教大師よりは後輩でありまして、また傳教大師を常に先輩として尊敬して居たものでありますから、傳教大師の御在世中はあまり活動もしなかつたのであります。傳教大師御入滅以後は弘法大師に匹敵する

ほどの人物が居なかつたので、弘法大師は上下萬民の歸依を一身に集むるといふやうなことになりました。随つて眞言宗といふものが非常な勢ひをもつて弘まるやうになつたのであります。それで叡山の方でも之と對立して傳教大師以來の勢力を維持するためには、矢張り眞言宗の教義を採り入れるより外はないといふ考へが次第に勢力を有することになりました。傳教大師の御精神に背いて眞言宗の教義を學ぶものばかりとなつたのであります。

此の眞言宗といふのは大日經、金剛頂經、蘇悉地經といふ三つの經典を依經として立てられたものであります。此の三つの經典は何れも大日如來の説かれたものであつて、釋尊とか阿彌陀佛とかいふのは何れも此の大日如來の分身に過ぎないのであるから、大日如來の説かれた所は他の佛の説かれたものよりは遙かに勝れて居るといふのが眞言宗の主張であります。それで眞言宗では自ら密教と稱し、他の諸宗を盡く顯教と申すので、密とは深いといふこと、顯とは浅いといふことであります。傳教大師御入滅後の叡山では此の密教を學ぶことになつたのであります。併し眞言宗の教義を其の儘に信するのでなく、大日如來と釋尊との關係に就て多少解釋のちがひがあります。それで東密と台密といふ區別が立てらるゝやうになりました。眞言宗の方では弘法

大師が嵯峨天皇より賜はつた京都の東寺を中心として教へを弘めましたから之を東密といひ、叡山は天台宗であつて密教を學ぶのであります。眞言宗の方では大日經等の三部の經典のみを讀誦し、法華經などは決して讀みませぬが、叡山に於ては法華經をも併せて讀んだのであります。斯くして叡山が台密の寺となりましたから、全國の天台宗の寺が皆之に同ずることになりました。清澄寺も亦台密の寺であつたわけであります。

ところが又不思議なことには、此の台密の寺に於て阿彌陀佛の名號を唱ふるといふことも行はれて居たのであります。阿彌陀佛の信仰は唐代に於て盛んになつたものであります。吾が國でも唐との交通が頻繁になると共に自然と此の信仰が傳はり、朱雀天皇の天慶元年に空也上人が京都の町に立つて念佛を勧めたのを最初として、念佛を唱ふるものが次第に多くなりました。然るに高倉天皇の安元元年に至つて法然上人が出て、専修念佛を唱へてから此の念佛の勢力といふものが著しく盛んになりました。殆んど日本全國を風靡するまでになつたのであります。日蓮聖人が御出家になつたのは法然上人が出てから六十年ばかり後でありまして、阿彌陀佛の名號を唱ふるといふことは何れの宗の寺にも普及して居たので、前に引いた御書にもあります通り、清澄寺

に於ても皆同様に唱名を勵んで居たのであります。佛の數がいかにも多くても、自分の信仰の對象となるものは何れかの一佛でなければならず、又經典の數がいかにも多くても、其の中に於て最勝の經と認めらるゝものがなければならぬ筈であります。然るに大日如來を拜んで法華經を讀誦し、また阿彌陀佛の名號を唱へて往生極樂を願ふといふことでは、其の信仰に全く統一がないわけ、斯ういふことは斷じて許さるべき事ではありませぬ。

併しながら久しい間の習はしで誰も怪しむ者はなく、斯ういふ事が續けられて來たのであります。獨り日蓮聖人はまだ若年ながら之に對して不審を懷かれたのであります。御書の中に『いさゝかの事ありて此事を疑ひし故に』とあるのは即ち此の疑問であります。頭を剃り袈裟を着た者は皆法師たる覺悟がなければならぬので、法師は世を導き人を救ふべき大責任をもつた者であります。然るに自分の信仰が確立しないでは、世を導くことも人を救ふことも出來やう筈はありませぬ。それでありながら法師の名を冒して居るのは、佛に對しても、また世間の人に對してもまことに濟まぬ事と申さなければなりません。それ故に聖人は是非とも此の疑問を解決しなければならぬといふ決心をされたのであります。

聖人は更に深入りして、同じ佛教の中に諸宗の對立して居ることに就て疑ひを懷かれました。聖人の御出家になつた頃には吾が國に十宗が弘まつて居たのであります。吾が國に佛教が傳はつてから聖德太子の御時までには別に『宗』といふものはありませんでしたが、太子が御薨去になつてから三年後に高麗から慧觀といふ僧が來て三論宗を弘めました。これが吾が國の佛教に宗といふものゝ立つた始めであります。其の次には孝德天皇の白雉四年に、前から支那に留學して居た道昭が歸朝して法相宗を弘めました。之に續いては聖武天皇の天平七年に、道璿といふ唐僧が來朝して華嚴宗を弘めました。その次には孝謙天皇の天平勝寶六年に、鑒眞といふ唐僧が來朝して律宗を弘めました。また俱舍宗と成實宗との二宗は獨立して弘まつたものではありませんが、奈良朝に入つてから諸宗の人々が之を兼學いたしました。それで奈良朝の末までに六宗の教義が傳はつたわけで、之を『南都の六宗』と申すのであります。また平安朝に入つて天台宗と眞言宗の弘まつたことは前に申した通りであります。

其の後法然上人が専修念佛を唱へたことも前に申した通りであります。此の人が吾が國に於ける淨土宗の開祖であります。又此の人の門下から親鸞上人が出て、後堀河天皇の元仁元年（日

蓮聖人の三歳の時)に淨土眞宗を開きましたが、此の淨土眞宗に就て日蓮聖人は何事も仰せられたことはありませぬ。恐らく其の頃此の宗は全く勢力のないものであつたのでありませう。また前に申した道璿が華嚴宗と共に禪宗の教義をも傳へたのでありますが、殆んど弘まらないうで終りました。その後鎌倉時代の始めに平景清の叔父の大日房といふ人が禪宗の復興を企て、稍々世間の注意を惹くやうになりましたが、後鳥羽天皇の建仁二年に榮西禪師が支那から歸つて臨濟宗を傳へ、後堀河天皇の安貞元年に道元禪師が支那から歸つて曹洞宗を傳へてから禪といふものが盛んに行はれるやうになりました。又その頃の支那は宋代の末でありまして、北方から興つた蒙古が支那の領土の大半を奪ひ、宋は殆んど滅亡の状態でありましたので、蒙古に膝を屈することを屑しとせぬ高僧等が續々と吾が國へ來朝して禪を弘めまして、北條執權をはじめ多くの武士が之に歸依いたしました。されば日蓮聖人の御出家になつた頃には吾が國に十宗といふものが弘まつて居たわけであります。

此の十宗の對立といふことが聖人に取つては大なる疑問でありました。諸宗が開けたのには皆然るべき理由があるのであらうが、抑々佛教といふものは唯一人の釋尊が御創めになつたもので

あるから、釋尊の御本意に叶つたものが幾つもある筈はない。眞に釋尊の御精神を誤りなく傳へたものを佛教の正系としなければならぬ。此の正系と見らるべきものは十宗の中の何れか一つでなければならぬ。或はまた吾が國に弘まつて居る十宗が皆正系と見らるべきものでなくて、他にあるのかも知れない。何れにしても眞に正系と見らるべきものを知つて之を世に弘むるために力を盡したいと、聖人は思ひ定められたのであります。法師といふものゝ貴いことを法華經の法師品には、

是の人は佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷擔せらるゝことを爲ん。其の所至の方には應に隨ひて向ひ禮すべし。

と申してあります。法師は此の如くに貴い者でありますから、自分の信仰が確立して居ないで、法師の名を冒すことの出来るものではありません。

佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するといふやうな貴い職分を果すのには、先づ深く佛教の全體に亘つての研究を積んで、佛の御精神を正しく解することに力を盡さなければならぬので、聖人は『日本國に渡れる處の佛經並に菩薩の論と人師の釋とを習ひ見候はゞや』といふ願を立てられたので

あります。經典を研究しなければならぬのは勿論のことですが、その他に多くの論と釋といふものもあります。論といふのは釋尊の御入滅以後に印度に出た、龍樹とか世親とかいふやうな人々の作つたもので、『大智度論』とか『法華論』とか種々あります。此等の人々は何れも學徳共に秀でた人で、佛教の流布に大なる功勞があつたのでありますから、之を尊稱して菩薩と申します。また釋といふのは支那及び吾が國に出た所の法師の作つたもので、天台大師とか傳教大師とかの著作も無論此の中に含まれて居ります。印度で論を作つた人々を論師と申すので、之と區別するために、支那や吾が國で其の著作を公にした人々を人師と申すのであります。今日『大藏經』とか『一切經』とか稱せられて居るものの中には經典のみならず、此の論と釋とが皆含まれて居るわけであります。又既に十宗といふものが分れて居ります以上は、各宗にそれらの教義といふものがあつて、之を一々研究して見なければ、其の宗の特色といふものは明かにわかりませぬ。それで日蓮聖人は先づ經と論と釋とを研究し、又十宗の教義の大體をも研究しようといふ志を立てられたのであります。

更に今一つの大きな疑問がありました。それは吾が國に佛教が盛んに流布して居ながら、何故

に吾が國が安らかに治まつて居ないのかといふことであります。佛教の流布して居る國は人の心が皆正しくなるから、必ず大に發展するといふことは多くの經典の中に説かれてあることで、吾が國に於て聖徳太子が佛教の興隆に力を御盡しになつたのも、佛教に斯る力のあることを御信じになつたからであります。その後御歴代の皇室に於かせられて佛教に御保護を御加へになつたのも、全く佛教が人の心を正しくし、國運發展の基礎を固くする力のあるものであることを御認めになつた爲であると考へなければなりません。鎌倉時代に入つても佛教は益々盛んでありまして、日本全國の津々浦々までも寺のない所は一つもないといふ有様でありましたが、國は更に盛んになりませんでした。日蓮聖人は此の事に就て深き疑惑を懷かれたのであります。殊に聖人の御誕生になつた前年には吾が國の歴史上に全く比類のない、不祥の出來事がありました。それは所謂承久の亂でありまして、陪臣たる北條義時の計らひに依つて後鳥羽、土御門、順徳の三上皇が遠國へ御遷りになつたのであります。義時の大逆無道は申すまでもありませんが、此の時誰一人として義時を諫めた者がなかつたといふことは、日本國中に大義名分を辨へて居る者が一人もなかつたことを證するものと申さなければなりません。

聖人が此の事を非常に御憤慨になつたことは、種々の御書の中に現はれて居りますが、殊に『秋元殿御書』の中に、

日本國に代始まつてより已に謀叛の者二十六人。第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時なり。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ山野に屍を曝す。二人は王位を傾け奉り國中を手に拳る。王法既に盡きぬ。

と極言して居られますのは、吾々の深く注意しなければならぬことであります。義時を謀叛人と申されたのは少しも不思議ではありませんが、頼朝を謀叛人の中に數へられたのは深い仔細がなければなりません。頼朝が鎌倉に幕府を開いて後は久しい間の戦亂も鎮まり、萬民その堵に安んずるやうになりましたので、北畠親房の『神皇正統記』の中にも、

白河鳥羽の御代のころより政道のふるきすがたやうく衰へ、後白河の御時兵革おこりて姦臣世をみだり、天下の民ほとく塗炭におちにき。頼朝一臂をふるひて其の亂をたひらげたり。

王室はふるきにかへるまでは無かりしかど、九重の塵もをさまり萬民の肩もやすまりぬ。

と其の功を稱揚してあります。此の點は日蓮聖人も認められて、頼朝の功を稱せられた語は御書

の中にも度々見えて居ります。併し其の功がいかに大きくても、罪は罪として飽くまで糾弾されなければならぬのであります。

頼朝が幕府を京都に置かないで鎌倉に置いたのは平氏の失敗に鑑みたからで、まことに賢明な處置であつたといはれて居ります。平氏は京都で榮華の生活を續けて居た爲に、一門が盡く懦弱な風に染まつて、武士らしい武士が殆んどなくなつて、清盛の遺した覇業を守るだけの氣力のあつた者がないので源氏のために亡ぼされたのであります。源氏が之に代つて覇權を握つたのは頼朝一人の力ではなく、關東武士が皆力を合せて之を輔けたからであります。此の關東武士といふものは質實剛健の氣風を具へ、恩誼に報ゆるためには喜んで生命を捨てるといふ美風を其の特色として居りました。頼朝は勿論此の事をよく知つて居りましたので、若し幕府を京都に開いて、有力な武士が皆京都に住むやうになつたならば、やがて平氏の失敗を繰返すことになるであらうといふことを深く恐れました。それ故に京都から百餘里を隔てた鎌倉に幕府を開き、自ら率先して簡易質素な生活の範を示し、其の部下の將士が華美な風に染まることを厳しく戒めました。之に依つて所謂鎌倉武士といふもの、特色が永く保てたのは、大なる成功と申すべきであります。

す。併しながら帝都と對立して鎌倉に幕府を開き、政治の中心を關東に移したことは、全く日本の國體を無視するものと申さなければならぬのであります。

皇居の在る所が即ち帝都で、政治の中心は必ず帝都に在るのが固より當然のことであります。此の事は建國以來少しも變りませんでした。藤原氏が盛んな時には随分横暴なこともありましたが、京都に在つて政治を執つて居ましたので、いかに横暴な事をして、『天皇を輔けて國政を執り行ふ』といふ體面は確かに保つて居ました。平氏とても同様であります。然るに頼朝は藤原氏や平氏ほどに横暴なこともせず、また官は右近衛大將にすぎませんでしたけれども、幕府を鎌倉に開いて京都と對立の形を取り、全國に守護地頭を置いて、自分は六十六國總追捕使と稱し、その上に征夷大將軍に任ぜられて、政權と兵權とを盡く一手に收めたのでありますから、客かも此の國の中心が京都と關東との二つに分れたやうな有様になりました。されば神皇正統記にも、

それより天下のこと東方のまゝになりなき。

と申してあります。これは大義名分を亂るものと申さなければなりません。

頼朝は決して朝廷を蔑ろにするつもりでは無かつたのでありませうが、大義名分の重んずべきことを辨へなかつた爲に斯ういふ大きな罪を犯してしまつたのであります。鎌倉の幕府が開かれてから慶應三年に徳川慶喜が政權を奉還したまでに六百七十八年を経て居りますが、此の久しい間吾が國が統一を失つて居たのは、實に頼朝が其の緒を開いたものといはなければなりません。北條義時が大逆無道の振舞ひをしたのも鎌倉に在つて政權を握つて居たからであります。頼朝が鎌倉に幕府を開かなかつたら、日本の歴史に最も大きな汚點を遺した、此の不祥事は起らずに済んだ筈であります。日蓮聖人が義時と併せて頼朝をも謀叛人と御斷定になつたのはまことに徹底したる御考へと申さなければなりません。

聖人は斯ういふやうに物事を徹底的に御考へになる性質の方でありましたから、吾が國に佛教が盛んに流布して居ながら、大義名分を辨ふる者が全くないといふことに就て、まだ御若年の時から最も深い不審を懷いて居られたのであります。また其の頃は種々の災難が絶えずあつて、人民の困難は一方ならぬ有様でありました。例へば寛喜三年（日蓮聖人十歳の時）九月には京都の窮民が一揆を起して、處々の家を打毀して薪としたので、朝廷から嚴しい禁令を出されて、やう

やく之を取り鎮められたことがありました。これは唯だ一例ではありますが、斯ういふ出来事は幾度となく起つたのであります。佛教の廢れた國に多くの災難が起るといふことは多くの經典に見えて居りますが、佛教の盛んな吾が國に斯ういふ出来事の多いのを見ると、『佛教が盛んなやうに見えては居るが、今行はれて居る佛教が實は佛の御心に叶はぬものなのではあるまいか』といふ疑問が起らなければならぬわけであります。

そこで日蓮聖人は二つの重大な疑問を是非とも解決しなければならぬといふことを思ひ立たれたのであります。其の一つは『釋尊の御精神を正しく傳へた教へは何であるか』といふこと。其の一つは『眞に日本國の發展の基礎となるべき教へは何であるか』といふこと。此の二つの重大なる疑問を解決するために、聖人の三十二歳までの研究が續けられたのであります。清澄の山の頂には虚空藏菩薩の廟がありまして、此の菩薩に祈れば智慧が授かるといふことが昔から傳へられて居りました。それで聖人は此の廟に參籠して『日本第一の智者となさしめたまへ』といふ祈願を凝し、熱心のあまりに血を咯かれたといふことであります。日本第一の智者となることを望んだのは全く自身のためではなく、日本國民全體に正しい信仰を興へたいと思はれたからであり

ます。自分の信仰が確立しないで人を教へることの出来るものではない。自分の實行し得ぬことを人に説いても、人は決して動かない。自己を完成することが即ち世のため人のためなのであります。まだ十六歳の少年でありながら日蓮聖人は是れだけの覺悟をもつて、虚空藏菩薩の廟に參籠して、日本第一の智者となるべき祈願を凝されたのであります。

さて此の二つの重大な疑問を解決するには有らゆる經論釋等を讀破し、また諸宗の教義を研究しなければならぬのですが、清澄寺は安房の片隅に在つて經典等も甚だ乏しく、また其の研究に就て指導を受くべき人もなかつたので、日蓮聖人は十七歳の時から鎌倉へ出て諸宗の學者の説を聴き、又諸寺に藏せらるゝ經典等を熱心に讀まれました。併しながら疑問は少しも解けませんでしたが、そこで此の上は叡山を中心として各地の寺々を巡つて研究を重ねるといふ決心をされまして、三十二歳の春までは全く研究に渾身の力を注がれたのであります。聖人は台密の寺で出家されたのでありますが、其等の關係は一切棄て、全く白紙の状態となつて研究を積まれたのであります。主として叡山に居られたのも昔から諸宗の教義が此處で最も深く究められ、吾が國に於ける學問の淵藪とも稱せらるべき所であつたからであります。研究となれば決して一宗一派に

偏すべきものではありませんから聖人は叡山とか三井寺とかいふ天台宗の寺のみならず、紀州の高野山とか大阪の天王寺とか京都の泉涌寺とかいふやうな、諸宗の寺々をも巡つて、出来るだけ博く又深く其の研究を重ねられました。又此の間に於て獨り佛教の教義のみならず、國學に就ても、儒教に就ても深く學ばれたことは、今日に遺つて居る多くの御書を拜讀して見ると明かにかるのであります。

日蓮聖人が日本第一の智者となるといふ理想を以て積まれた努力は空しからず、二つの重大な問題はスツカリ解決されました。先づ第一に釋尊の御精神は法華經の中に説き盡されてあるといふことが、多くの經論を讀み比べ、また諸宗の教義を究め盡した結果として明かになりました。即ち、

一切の諸の經法の中に於て最も爲れ第一なり。……諸經の中の王なり。——藥王品

とあるのは疑ひの無い所であるといふ確信が得られたのであります。諸經は何れも佛の御説きになつたものでありますから、一として貴くないものはありませんが、此の法華經の説かれる前のは皆盡く方便の教へであつたといふことで、法華經のすぐ前に説かれた無量義經には釋尊御自身

に、

諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説きにき。種々に法を説くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯はさず。

と仰せられました。此の無量義經に次いで法華經を説かるゝに當つては、方便品に、
我今喜びて畏れなし。諸の菩薩の中に於て、正直に方便を捨て、但だ無上道を説く。

と仰せられました。無上道とは佛の自ら覺られたところの絶對の理であります。されば此の法華經を精讀することに依つて初めて佛の御精神が明かに知り得らるゝわけであります。

又法師品に至つても此の法華經が諸經の中で第一であるといふことを仰せられて、
藥王今汝に告ぐ、我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり。

とあり、之に續いて、

我が所説の經典無量千萬億にして已に説き、今説き、當に説かん、而も其の中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり。

とあります。已に説きとあるのは此の靈鷲山で御説法までの四十餘年間に説かれた一切の經のこ

と。今説きとあるのは此の靈鷲山で説かれた無量義經及び法華經のこと。當に説かんとあるのは此より御入滅までの間に説かるべき一切の經のことでありまして、要するに釋尊御一代の間に説かるゝ一切の經の中に於て、此の法華經より以上のものはないと申すことであります。難信難解とは最も深遠であるといふ意味で、佛が特に御心を籠めて説かれたものであるから此の經は最も深遠な教へが内容となつて居るわけでありまして。釋尊は是れほどに魂を打込んで此の法華經を説かれたのでありますから、諸經の中に於て特に此の經を永く後世に流布せしめたいと思召されまして、寶塔品に於ては、

誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん。今正しく是れ時なり。如來は久しからずして當に涅槃に入るべし。佛此の妙法華經を以て付屬して、在ることあらしめんと欲す。

と仰せられました。涅槃に入るとは御入滅になることであります。釋尊は御入滅の後に於て是非とも此の法華經が普く世間に弘まつて、永く一切衆生を救ふことを御期待になりました、之を弘むるために特に力を盡すことを諸弟子に命ぜられたのであります。

此の法華經は聖德太子の御時から吾が國に弘まつて、奈良朝より平安朝を経て武家時代に於て

も重んぜられて居たものであります。日蓮聖人は有らゆる經論等を読み比べて、此の法華經が最勝の經であるといふ確信を得られたのでありますから、其の御信仰には實に動かすべからざる根柢があるわけでありまして。

先づ此の如くにして第一の疑問は解けたのであります。此の日本國の發展の基礎となるべき教へは何であるかといふ疑問も、同時に解決が出來ました。それは同じく此の法華經より外にはないのであります。法華經の中に説かれてあることは至て深遠であります。之を一言で申せば『娑婆即寂光土』といふことが説かれて居るのであります。今吾々の住んで居る所は娑婆世界であります。娑婆とは『堪忍』といふことであります。此の世界には種々の苦が充滿して居て、之に堪へなければ一日も生きて居られませんか、此處を娑婆世界と名けられてあります。又佛の住みたまふ所は寂光土であると申すのであります。寂とは變化のないことで、佛の住みたまふ所は常に光明に充ちて、永遠に何の變化もないのであります。淨土といふのも同じ意義であります。吾々は此の苦に充ちた娑婆世界に住んで居ますから、此の苦境を脱して淨土に住みたいといふ望みを起すのであります。一切の苦は皆吾々の心を塞いで居るところの煩惱が作るのであ

りますから、此の煩惱が除かれぬ限りは、何處にも淨土の見出されるものではありません。たとひ淨土に住むことが出来ても、心に煩惱が多ければ、その淨土は忽ち穢土に變つてしまふでありませう。それ故に吾々は淨土を西方にも東方にも求むるには及ばず、自分の心から一切の煩惱を掃ひ去ることに依つて、此の娑婆世界を淨土に變化せしむるやうに力を盡すべきであります。

此の世が種々の苦に充ちて居るのは、煩惱の多い者同士が對立して居て、絶えず争ひあひ闘ひあつて居るからであります。法華經の譬諭品に、

深く苦の因（おぼえ）に著（おぼ）して暫（しば）くも捨（す）つること能（あた）はず。

とあり、また、

諸苦（しよく）の所因（しよいん）は貪欲（どんよく）爲（な）れ本（もと）なり。若（も）し貪欲（どんよく）を滅（めつ）すれば依止（えし）する所（ところ）なし。

とあるのは、まことに凡夫の生活状態を能く悉したる語であります。或は利を貪り、或は名を貪り、或は地位とか勢力とかいふものを貪つて互ひに争ひあふのでありますが、此の貪るといふ念には必ず惜むといふ念が相伴つて居るものであります。未だ得ざるものを貪り求むると共に、已に得たるものは之を惜んで人に與へやうとはしないので、其の争ひが益々烈しくなるのみであり

ます。此の貪ると惜むとの念を去ることが出来れば世間の何物にも執著はなくなるので、依止する所がないといふのは即ち執著のなくなったことを申すのであります。煩惱といふものは限りなく増長して來るもので、瞋恚とか嫉妬とかいふやうな種々の煩惱が積り重つて起るのでありますが、其の根本は名利等の欲に執著することでありませう。

然らば如何にして此の執著を除くことが出来るかといへば、正しい教への力に依るより外はありませぬ。吾々の心の中に如何に多くの煩惱が充滿して居ても、人として本來具へて居る佛性が全く亡び盡すといふことはないで、正しい教へを學べば此の佛性がだん／＼に伸びて來ます。

涅槃經の中には、

一切衆生悉く佛性有り。

と説かれて居ります。佛性とは一切自己の利害損得を超越し、人の喜びを共に喜び、人の憂ひを共に憂ひとする心であります。人は皆生れながらにして此の佛性を具へて居るのであります。全く何の教育も受けない母親でも、其の子が乳を飲んで笑つて居るのを見ると自分も心から満足して、一日の勞苦を忘れて居ます。此の心持が養はれて大きくなれば、一切衆生を吾が子と視て

之に教へを興へて倦むことを知らぬ、佛の大慈悲の御心と一致するまでになるのであります。誰でも此の佛性といふものを具へて居るのでありますが、之を育て、大きくして行く道を知らぬために、煩惱ばかりが日に日に増長して来て、自分でも多くの苦しみを受け、世間にも多くの累ひを及ぼして居るのであります。若し吾々の心が煩惱ばかりで充されて居るのならば致し方もないのであります。切角に貴い佛性を具へて居ながら之を空しくして居るのは如何にも惜しいことではありませぬか。

此の佛性を育て、大きくするのは、良き教への力に依るより外はありませぬが、多くの教への中で最も勝れたものは佛教であります。聖徳太子が憲法の第二條に、

人尤だ悪きは鮮し、能く教ゆれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん。

と仰せられた通り、誰でも之を教へ導くのに其の道を以てすれば、曲つた心が眞直ぐになるのであります。多くの教へのある中で佛教より勝れたものは無いのでありますから、國中の人の心を盡く正しくするには佛教の興隆に力を盡すより外はありませぬ。太子が四十九年間攝政の任

に在らせられて佛教を盛んにすることに全力を御注ぎなつたのは之が爲と存ぜられます。太子は朝廷の百官のために維摩經、勝鬘經及び法華經の三部を自ら講ぜられ、また此の三部の經の義疏といふものを作つて後世に御遺しになりました。これは三部の經の註釋でありまして何れも皆貴いものであります。今日これを拜讀いたして見ますと、太子が殊に法華經を重んぜられたことはまことに明かであります。

此の法華經が凡ての人に信ぜられ、凡ての人が此の娑婆世界を淨土にするために力を盡すことを心から悦んで、銘々の業に魂を打込むやうになりますれば、國は何處までも發展して行くに違ひないのであります。殊に吾が國は神の御裔たる天皇の御稜威の下に永く榮えて行くべき國で、世界の何れの國も到底及ばぬところの貴い國體なのでありますから、斯ういふ國に釋尊の御心を打込んでお説きになつた法華經が弘まりさへすれば、一切の不祥な事がなくなつて、淨土が此處に實現せらるゝことは疑ひのない所であります。譬へば美しい花を開くべき櫻の樹でも、日の光りも碌々あたらす、水も足らぬやうな所に植ゑられて居ては美しい花を開くことは出来ませぬ。之を日當りのよい所へ移して清い水を之に注ぐことを怠りませぬと、必ず美しい花が春毎に開き

ます。吾が國のやうな世界無比の貴い國にいろく不祥な出來事が多かつたのは、此の國の國民全體に良い教へが與へられないで、此の貴い國を護つて行くべき覺悟が足りなかつたからであります。それは周圍の事情が悪くて櫻が美しい花を開かなかつたのと同様の事なのであります。荆棘はいかに力を盡して之を培養しても、櫻のやうに美しい花は咲きませぬ。國に依つては大に發展すべき見込みのない國もありません。吾が國は本來貴い國なのでありますから、良い教へが此の國に普く弘まりさへすれば、必ず世界の有らゆる國を指導して行くまでに發展する筈であります。國と教へとは必ず相應すべきものであります。日蓮聖人は二十年に亘つての御研究の結果として法華經が諸經の王たる、最勝の經であることを明かにせらるゝと共に、此の日本國が世界萬邦に冠絶する最勝の國たることを明かにし、此の最勝の經は必ず此の最勝の國に弘まるべきことの確信を得られたので、後年に至つて、

日本國は一向に大乘の國なり、大乘の中にも法華經の國たる可きなり。……例せば崑崙山に石無く、蓬萊山に毒無きが如し。——教機時國鈔

といはれたのは、此の確信を告白されたものなのであります。

二十年に亘つて命を打込んでの御研究の結果として、法華經が弘まりさへすれば釋尊の世に出て教へを御説きになつた御本意も達せられ、また此の日本國の大に發展すべき基礎も定まるといふことが明かになつたのでありますから、日蓮聖人の御満足は申すばかりもなかつたのであります。但し此に至つて問題となるのは、誰が此の法華經を此の國に弘むる魁を爲すべき人であるかといふことであります。如何に良い教へがあつても、之を弘むることに力を盡す人がなければ弘まりませぬ。釋尊が此の法華經を弘むるために力を盡す人の功德をお述べになつて、

我が滅度の後に、能く竊かに一人の爲にも、法華經の乃至一句を説かん。當に知るべし、是人は則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行するなり。——法師品

と仰せられたのも、此の經を弘むる人の努力の殊に貴いことを説いて、末法の世に生れた人を獎まさうといふ御趣意に外ならぬのであります。吾が國に於ては聖德太子御出現の後に至つて傳教大師が叡山を開いて、法華の道場とせられ、

法華一乘の機今正しく是れ其の時なり。——守護國界章

といふ意氣組みで此の經の弘通に力を御盡しになりましたので、此の經が諸經の王であることは

誰も疑ひ得ぬやうになりました。其の後久しく經つて、愈々末法の世に入り所謂鬪諍堅固の世相が明かに現はれて來たのでありますから、此の法華經を生命にかけて弘むる人が是非とも此の叡山から出なければならぬ筈なのであります。

大師は法華經の弘通に一生を捧げられたのみならず、其の志を繼ぐべき弟子の養成にも大に力を盡され、其の御遺誡の中にも、

我が爲に佛を作ること勿れ、我が爲に經を寫すこと勿れ。我が志を述べよ。

と仰せられました。師の追福のために其の弟子たる者が佛像を作るとか、或は經典を寫すとかいふことが一般に行はれて居たのでありますが、大師は一切さういふことをするには及ばぬ、唯だ吾が志を繼いで法華經の弘通に力を盡しさへすれば、それで自分は満足であると御遺言になりました。また、

佛法を紹隆して以て國恩に答ふべし。

ともありますが、法華經の弘通に力を盡すことが即ち眞に佛法を紹隆する道なのであります。傳教大師の志とせらるゝ所は此の通りでありましたが、その後此の御精神は殆んど失はれてしまつ

て、前にも申しました通り密教の信仰が主となつたので、法華經は讀誦されても唯だ形式に過ぎぬといふ有様でありました。叡山でさへ斯ういふ有様でありますから他の諸寺は猶更のことで、法華經を讀誦する人は多くても、之を諸經の王として貴び、心身一切の力を打込んで此の經の弘通に努めようといふやうな人は日本國中の何處にも見出されさうにもありませんでした。

此の事に思ひ到つて日蓮聖人はまた深き疑惑の底に沈んでしまはれました。釋尊は末法の世のために此の法華經を説くのである、此の經は必ず末法の世に至つて廣宣流布しなければならぬと繰返して仰せられた。然るに既に末法の世に入りながら此の法華經の弘通に力を盡す人の影さへ見えぬのである。即ち佛の豫言が全く外れたのである。佛は三世を諦かに觀るところの智力を具へて居らるゝ筈である。若し其の豫言せられた所が外れるならば、釋尊は佛智を具へた方とはいはれぬことになる。殊に此の法華經は釋尊が自ら最勝の經である、諸經の中に於て最第一であると仰せられた經である。此の經の中に於て豫言せられたことが外れるやうでは、釋尊は歸依するに足らぬ方と申さなければならぬ。歸依するに足らぬ釋尊の遺された教へを研究する爲に二十年の心血を濺いだのは、あまりに愚かなことではないか。斯う思ひ詰めて聖人は全く思案に暮れて



しまはれたのであります。併しながら一切衆生を皆佛にしようと御心を碎かれた釋尊の大慈悲は、此の法華經の全體に充ち溢れて居て、

世尊は大恩まします、希有の事を以て、憐愍教化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。

といつた迦葉等の言はいかにも尤もに思はれてならぬのであります。此の大慈大悲の釋尊の仰せられたことに疑惑を懐くといふのは、何としても相濟まぬ事と申さなければならぬ。けれども此の經の中の豫言の外れたことは事實である。此の事實をどう解釋したら宜いのであるか。

斯く様々に思ひ惑うた末に聖人は、此の法華經を弘通する人を他に求めたのが誤りであつた、自分が此の大任に當らなければならぬのであると決心されたのであります。日本國中に於て此の經が諸經の中に於て最第一であることを深く信じたものは自分一人である。自分が此の確信を得たのは、此の經の弘通に魁せよといふ佛命が自分に與へられたものと解釋しなければならぬ。

當に知るべし是人は則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行するなり。——法師品とあるのは自分の事であると信じなければならぬのである。今こゝで自分が奮ひ起つて此の經を

弘めて、此の經が弘まりさへすれば、釋尊の豫言は之に依つて的中するのである。今こゝで自分が奮ひ起たぬために、此の經がいつ迄も弘まらなければ、釋尊の豫言は空に歸してしまふのである。釋尊の豫言を空しくするかせぬかは自分の決心一つで定まるのである。自分が此の決心をしないで、釋尊の仰せられたことに疑惑を懐いて居たのは我ながら愚かな事であつた。斯う思ひ定むると共に聖人はまことに晴れ晴れとした心持になりました。

此の決心をすると共に思ひ出されたのは勸持品の中に『法華經の弘道に魁する者の一身に集り來るべき迫害』が數へ上げられてあることであります。勸持品には此の經を末法の世に弘むる人に對して惡口罵詈する者があり、刀杖を加ふる者があると申してあります。又國王大臣等に讒言する者があると申してあります。尙ほまた、

數々擯出せられて塔寺を遠離せん。

とあつて、幾度も住む土地を追ひ拂はれることもあるといふのであります。即ち世間に有りと有らゆる迫害が皆一身に集まるものと覺悟しなければならぬといふことであります。若し此等の迫害に堪へられなければ折角此の經を弘めようとしても弘まらずして終るより外はないのであります。

すから、先づ自分が果して此等の迫害に堪へ得るか得ぬかをよく考へて見て、その覺悟を定めなければならぬのであります。若し半途で挫折するくらゐなら、最初から止める方が宜いわけでありませぬ。それで日蓮聖人は自分が果して此等の迫害に堪へられるであらうかとよく考へて見られたのでありますが、信仰の力さへシツカリして居れば必ず堪へられるといふことが勸持品の本文にいつてあります。即ち、

我等佛を敬ふが故に、悉く是の諸惡を忍ばん。

ともあります。

我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ所無し。

ともあります。聖人は此等の語を思ひ合せて、自分が佛の使であるといふ確信さへあれば必ず一切の難に堪へて行かれるものであるといふことを知られました。

また涅槃經の中には、苟くも佛弟子たる者は佛の正法を信ぜぬものを覺醒せしむるために、全力を注ぐべき大責任があるといふことが説かれてあります。若し佛の正法を信ぜぬ者があれば或は之に呵責を加へ、或は之を排斥して世間に身を立てられぬやうにしてなりとも、有らゆる方法

を用ゐて之に反省を促し、其の過を改めさせなければならぬ。若し其の人が之に依つて自ら反省して其の過を改むれば、其の一生が救はれるのである。これだけの手を盡さないで、其の多くの罪を犯し過を重ねるのを捨て、置くのは慈悲の心の足らぬのであります。たとひ日々の行ひに於て非難すべき點もなく、よく佛の御定めになつた戒律を守つて居ても、慈悲の心の足らぬものは眞の佛弟子ではない。寧ろ佛法の流布に妨げを爲すものといふべきであります。それ故に釋尊は當に知るべし是の人は佛法の中の怨なり。

と仰せになりました。日蓮聖人は此の語を思ひ出して、今末法の世に入つて法華經が必ず流布しなければならぬ時であることを知らず、佛の方便の教へのみを信じて居る者を眼前に見ながら、之に呵責を加へずして其の儘に捨て置くのは『佛法の中の怨』といふ佛の御叱りを免れぬものである。たとひ種々の迫害が一身に集まらうとも、自分は生命にかけて此の法華經を弘めて、佛の御叱りを受けぬだけの働きをしなければならぬと思ひ定められました。

既に是れだけの覺悟の定まつた以上は、一日をも空しくすべきではありません。聖人は直ちに叡山を去つて故郷の安房へ歸られました。聖人が其の法華經弘通の第一聲を揚ぐべき地とし

て故郷の安房を擇まれたのには深い子細があるのであります。『豫言者は故郷に容れられぬ』といふことを耶蘇なども申して居りますが、たとひ偉大な人物でも、その人の幼年の時の事をよく知つて居る者は、兎角之を輕んずるやうな心持を起しがちであります。されば聖人が法華經弘通の御門出の地として故郷を擇まれたのは甚だ不得策のやうに見えますが、聖人は父母の恩と師の恩とを片時もお忘れにならなかつたので、末法の初めに法華經の弘まる發祥の地として、特に故郷を擇まれたものと思はれます。佛教に於ては報恩といふことを殊に大切にされるので、

恩を知る者は大悲の本なり、善業を聞くの初門なり。——智度論

といふやうにも教へられてあります。傳教大師も御兩親が叡山の下に庵を結んで、良い子を得るやうに日枝神社に祈請を籠められたかひがあつて御生れになつたので、報恩の御志から特に叡山の上に法華の道場を御建立になつたのであると申すことであります。日蓮聖人も同じ御心で態々故郷の安房へ御歸りになりました。

二十年に亘る御研究の結果を收められて清澄寺へ歸られた聖人は、一山の人々に非常なる喜びを以て迎へられました。斯くて建長五年四月二十八日の曉天に聖人は清澄山の最高峰に立ち、折

しも東の海よりさし昇る旭日に向つて合掌し、御聲朗らかに『南無妙法蓮華經』とお唱へになりました。是れこそ全世界に響き渡るべき題目の第一聲であります。聖人は此の日に清澄寺一山の僧徒と檀信徒の重なる者を集めて、末法の世を救ふものは法華經より外にないといふことを熱誠を籠めてお説きになりました。ところが偶然にも此の日に地頭の東條左衛門景信といふ者が此の清澄寺へ參詣に来て居りました。地頭といふものは各地の領主を管轄するために鎌倉幕府から派遣されて居たものなので、其の威勢はまことに隆々たる有様なのであります。殊に此の東條景信は時の執權北條時宗の大叔父たる重時と親しい仲でありましたから、重時の勢力を笠に着て、此の近邊に威を振つて居りました。而も景信は平生阿彌陀佛を信じて居る人でありましたから、日蓮聖人が末法の世は法華經でなければ斷じて救はれぬとお説きになるのを聞いて、烈火の如くに憤りまして、『彼は阿彌陀佛の御敵である。速かに彼を引き出して斬つてしまへ』といふ烈しい命令を下しました。

師の道善房其の他の人々が言葉を盡して景信を宥めたので、其の場はやうやく濟みましたが、日蓮聖人は清澄寺に身を置くことが出来なくなり、其の日のうちに山を降られました。此の危難

にあつて聖人は『佛の御説きになつた所に少しの誤りもない。法華經弘通の第一日に、勸持品の中にある通りの事が自分の身に實現したのである。自分が此の經を弘むる大任を負うて此の國に生れたものであるといふことは、之に依つてまことに明かになつた。有難い事である』といたく感激せられ、『益々信心を勵まなければならぬ』と心に堅く誓はれました。此の日を始めとして此より聖人の御身には大小幾多の難が打續いて加はつたのでありますが、それは皆勸持品の中に數へ擧げられてある所でありますから、聖人に難にあふ毎に、自分が『如來の使』として此の國に送られた者であるといふ自覺を強くせらるゝのみでありました。

さて清澄を去られた日蓮聖人は直ちに海を渡つて相模につき、鎌倉の松葉ヶ谷にさゝやかな庵を結んで、此より毎日鎌倉の街頭に立つて、往來の人に向つて法華經の信仰を勧められました。世に所謂『辻説法』であります。其の頃新に教へを弘めようとする人は、誰か有力な武家に便りを求め、其の援助の下に信徒を作るといふ習はしでありました。例へば良觀が京から下つて鎌倉で律宗を弘めた時には北條時頼の保護を受けました。又支那から來て禪宗を弘めた道隆等の人々は何れも北條執權に保護せられて手厚い待遇を受けたものであります。然るに獨り日蓮聖人は何

人の力にも頼らず、まだ三十二歳の青年の身として日々街頭に立つて、最も大膽にまた率直に御自身の信仰を説かれたのであります。外から見たならば、如何にも無法な事のやうに見えたでありませうが、聖人は其の努力が決して空に歸するものではないといふ自信をもつて居られました。『此の經は佛が自ら諸經の王と定められた經である。今の時は佛が法華經の廣宣流布すべき時と定められたる末法の世の初めである。此の時に當つて命に懸けて此の經を弘めて弘まらぬといふ筈はない』といふ自信を以て聖人は日々に街頭に立たれました。勿論聖人の説かるゝ所に眞面目に耳を傾くる者は殆んどなく、笑ふもの嘲るもの、悪口罵詈する者のみでありました。或は石瓦を擲けつける者もありました。併し聖人は勸持品にある通りの事が實現するのであると思つて少しも屈することなく、日毎の説法は愈々熱心の加はるのみでありました。其の熱心が加はるに伴つて迫害も益々強くなりました。

聖人は斯く勸持品に擧げられたる迫害の數々を體驗して居らるゝ間に、法師品や安樂行品に出た豫言も漸く實現せらるゝ運びになりました。即ち有力な御弟子も出來、また頼もしい信者も出來たのであります。法師品には末法の世に出て此の經を弘むる功德の洪大なることを盡して

説かれた末に、

若し我が滅度の後に能く此の經を説かん者には、我化の四衆、比丘比丘尼、及び清信士女を遣はして法師を供養せしめ、諸の衆生を引導して之を集めて法を聽かしめん。若し人惡刀杖及び瓦石を加へんと欲せば、則ち變化の人を遣はして之が爲に衛護と作さん。

とあります。比丘比丘尼といふのは出家の弟子。清信士女といふのは在家の信者で即ち優婆塞と優婆夷であります。此の文に依りますと、法華經を弘むる法師には必ず之を供養すべき弟子も信者も、だん／＼に出来るといふことであります。又種々の迫害が加はつて來ても、此の迫害を防ぐために一身を擲つて力を盡す者も必ずある。此等は何れも此の法師のために佛の御遣はしになつたものと見るべきであります。

また勸持品の次の安樂行品には此の法華經を弘むる者に、天の護りが必ず加はるといふことが説かれてありまして、

諸天晝夜に常に法の爲の故に而も之を衛護す。

とあり、又重ねて、

天の諸の童子以て給使を爲さん。刀杖も加へず毒も害すること能は

とあります。法華經を弘むる法師に忠實に仕ふる者は天より遣はされたる童子と見るべきであります。又刀杖も加へずとあるのは、たとひ刀杖を加ふる者があつても、之が爲に法華經弘通の聖業が妨げらるゝことはないといふ意味に解すべきであります。若し勸持品に數へ擧げられたやうな種々の迫害が集つて來ても、之が爲に少しも屈することなく、『我は是れ世尊の使』といふ覺悟を持ち續けて行けば、其の努力は決して空に歸することなく、佛菩薩や諸天の加護に依つて、所謂廣宣流布の機運が必ず開けて來べきものであります。

果して此等の經文は一として空文ではありませんでした。聖人が松葉ヶ谷に庵を結ばれてから程もなく御弟子となつたのは日昭で、この人は御門下に於て最も有力な人の一人でありました。此の人は日蓮聖人より一歳の年長で、夙に叡山に學んで博學多識を以て知られて居りましたが、聖人が叡山を去られてから間もなく、聖人の尊海といふ先輩に語られたことの大體を聞いて『其人こそは自分の師として仰ぐべき人である』と感じ、直ちに聖人の後を慕うて安房まで行きましたが、既に聖人が清澄寺を立ち去られた後であつたので、いろ／＼苦心を重ねて松葉ヶ谷の御

庵室を尋ね當て、御弟子になることを懇請してお許しを得たのであります。聖人の御弟子の中で殊に優れて居たのが所謂六老僧でありますが、此の日昭は六老僧中で第一の先輩で、聖人も此の人を特に頼もしい人と思召して居られました。法華經弘通の門出から間もなく斯ういふ有力な御弟子を得られたことは、聖人として何よりの御満足であつたであらう。日朗とか日興とかいふ人々が御弟子となつたのは、何れも此より數年の後であります。

また此から程もなく下總の人で富木常忍といふ歸依者を得られたことも、聖人に取つては大なる悦びでありました。此の人は聖人よりは二歳の年長で、聖人の御兩親と前から親しい仲でありまして、聖人の御遊學中は學資を貢いで、他日聖人の大成せらるゝのを楽しんで居りました。ところが聖人が清澄寺へ歸つて法華經の信仰を語り、淨土宗や禪宗を非難されたといふことを傳へ聞いて、『まことに不都合な者に後援をして居た』と後悔して居ながら一年あまり過ぎました。然るに建長六年に入つてから、或る時鎌倉への船の中で圖らずも聖人に出あひ、嚴しく其の不心得を責めましたので、聖人は懇々と其の二十年に亘つての御研究の結果を説いて、法華經に歸依することを御勧めになりました。常忍は元來正直な人で、殊に儒佛の學にも深かつたので、聖人の

御言葉を聽いて非常に感激し、直ぐに願つて檀家となり、法華經の弘通に出来るだけの御力添へをすることを誓ひました。此の富木常忍が歸依してから二年の後に至つて鎌倉の四條金吾をはじめとして、進士、工藤、荏原、池上等の人々が歸依し、その翌年には南部實長、それより三年を経て曾谷、秋元、大田等の人々が歸依して、鎌倉と房總とが法華經弘通の二大根據地となりましたが、富木常忍は聖人の檀家の魁を爲した人と稱せらるべきものであります。

元來此の法華經の中には最も大切な豫言が三つあります。其の一は此の法華經が末法の世に入つて普く世界に弘まるべきこと。其の二は此の法華の弘通に魁する人の一身に種々の難の集り來るべきこと。其の三は此の法華經の弘通に魁する人には必ず佛菩薩や諸天の加護があつて、だんだんに歸依者の數も多くなつて來るといふことであります。然るに僅かに數年の間に、此の三つの豫言の中の二つが事實となつて現はれたのでありますから、今一つの豫言たる、此の經が普く世界に弘まるといふことも必ず實現せらるゝに違ひないので、此の確信を得られた聖人は愈々勇氣を増されたのであります。

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へ傳ふるなり。未來も

また然るべし。……剩へ廣宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし。——諸法實相鈔

とは後に至つて佐渡で御書きになつた御消息の一節であります。此の御確信は既に鎌倉に於て定まつて居たものと存ぜられます。

斯くして法華經に歸依する者は年々に多くなつたのでありますが、執權たる北條氏は禪宗に歸依して居まして、法華經に歸依せよといふ日蓮聖人の御言葉には耳を傾けやうともしませんでした。ところが聖人が北條氏に對して諫曉を與へられなければならぬ時節が愈々到來いたしました。それは正嘉元年に至つて大地震の起つたことでもあります。勿論此の立正安國論の劈頭に、

近年より近日に至るまで、天變地天飢饉疫癘遍く天下に滿ち廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充ちり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざるの族敢て一人も無し。

とあります通り、連年種々の天災が続いたのでありますが、殊に此の正嘉元年（日蓮聖人三十六歳）に入つては、夏から秋へかけて早魃が続いた爲に恐ろしい飢饉となり、その上に關東地方では五月と八月と二回の大地震がありました。日蓮聖人は是れ全く日本國の上下萬人に對して天よ

り與へらるゝ所の嚴しい警告であるといふことを直感されました。正しい教への廢れた國には必ず種々の天災が続いて起る、これは皆天に依つて與へらるゝ警告であるといふことは金光明經、大集經、藥師經、仁王經等の中に説かれてある事であります。若しまた地震とか洪水とか、飢饉とか疫病とかいふ事が頻りに起つても、爲政者を始めとして一般國民が更に覺醒せぬ時には或は内亂が起り、或は外國から侵掠を受けて、その國が滅亡に瀕するであらうといふことが、此等の諸經の中には何れも切言してあるのであります。聖人は此の事に就て前年から深く注意して居られたのでありますが、此の正嘉元年の大地震によつて『愈々國難が迫つて來た。これは躊躇すべき場合ではない。奮つて爲政者に忠告を與へなければならぬ』といふ決心を固められました。是れが即ち立正安國論を作られた動機なのであります。

聖人は斯う御決心になつたのでありますが、武家の棟梁たる北條氏に忠告を與へらるゝのでありますから、慎重の上にも慎重にしなければならぬと御考へになりました。既に二十年に亘つての御研究の間に一切の經論を讀破されたのでありますから、決して誤りのあらう筈はないけれども、今一應委しく調べなければならぬといふので、聖人は翌正嘉二年の正月から岩本實相寺の經

藏に入つて、再び一切の經論を御讀みになりました。此の實相寺は富士山の南麓にある天台宗の寺で、此の寺の經藏には智證大師が支那から携へて歸られた一切經が藏せられてありましたが、聖人は此の經藏に籠つて一々の經論を御精讀になり、御自身の所信に少しも誤りのないことを確かめられました。此の寺の學頭は智海といふ人でありましたが、此の人が日蓮聖人に心服して、後年に至つて御弟子となり、名をも日源と改めました。これが縁となつて實相寺は日蓮宗となつて今日に及んで居るのであります。

聖人は此の實相寺に於て研究を重ねて、愈々御自身の所信に少しの誤りもないことを確められました。立正安國論を御起草になつたのであります。なほ字句の上に不穩當な所があつてはならぬといふ御考へで、檀家の中でも殊に學者として知られて居た大學三郎に之を添削せしめて、文應元年七月を以て之を前執權たる北條時頼の所へ提出せられたのであります。以上が此の立正安國論の御撰述までの大體の事情であります。此の書は實に日本國民全體に對する聖人の誠心より出たる御訓戒でありますから、之を輕々しく思つてはならぬのであります。之を前執權たる北條時頼に御提出になつたのは、時頼が實際上日本全國の武士を動かすべき力をもつて居たからで

あります。又當時に於て武士といふものが國民全體を指導すべき地位に在つたことは前に申した通りでありますから、聖人が武士に覺醒を興へようと御苦心になつたのは即ち日本國民全體の信仰を正しくしようといふ御精神に出たものであります。後年に至つて佐渡でお書きになりました開目鈔に、

我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等と誓ひし願破るべからず。

とありますが、立正安國論の御撰述は實に此の御精神の發露に外ならぬのであります。聖人が其の内容にも形式にも充分の注意を拂はれたのは少しも不思議ではありません。

聖人は此の立正安國論を此の如き慎重なる用意の下に御提出になりましたが、之に依つて北條氏が直ちに法華經の信者になることを期待して居られたのではなく、實は北條氏の命令の下に諸宗の僧等との對論が開かれることを期待して居られたのであります。釋尊御一人の開かれた佛教が統一を失つて、後に至つては多くの宗派が對立するやうになつた爲に、一般國民は何れに歸依して宜いか判断がつかなくなつてしまひました。例へば天台宗では法華經より尊い經はないとい

ひ、眞言宗では密教の三部經より尊い經はないといひ、淨土宗では淨土三部經より尊い經はないといふのですが、一般國民はそれらの業に力を盡さなければならぬので、多くの經論を比較して其の勝劣を自ら決定するといふ暇は固より無いのであります。尤も末世に至つて多くの宗派が對立して、人々が困惑するであらうといふことを、釋尊は豫め御洞察になりまして涅槃經の中に於て、

法に依りて人に依らざれ。

といふ大方針を御示しになりました。末世になると世間の有力者の意を迎へ、その勢力を利用して自分の宗派を盛んにすることを謀るやうな僧侶も多く出るから、其の人の歸依者が多いか少いかといふことを考慮して居てはならぬ。其の説く所の教への内容をよく調べて、其の最も正しいものに歸依しなければならぬといふのであります。併しながら諸宗の僧侶の説くことの内容を比較して其の正邪を判するといふことは、世間の人の力及ばぬ所であります。

それで諸宗の代表的の僧侶が對論を行ふといふことが必要になるのであります。若し諸宗を代表すべき人々が集つて、それらの宗の教義を語りあつて、互ひに不審な點を少しも遠慮なく質

しあふといふことが行はれますならば、之に依つて其の中の何れが最も正しいか、何れが佛意に合つて居るかといふことは自ら明かになるわけでありませう。世間的にどれ程勢力のある人でも、その人の奉ずる教義が正しくなければ對論に敗れてしまひますし、世間的に全く勢力のない人でも、その人の奉ずる教義が最も勝れたものであれば、對論に於て勝利を得ることが出来るのでありますから、是れほど公平な事はないわけでありませう。それ故に一國の爲政者が諸宗の代表的の僧侶を召し集めて對論を開かせ、其の結果を普く國中に發表すれば、國民が何れも其の信仰を正しく決定することが出来て、涅槃經に示された釋尊の御趣意も立つのであります。此の對論といふ事は日蓮聖人が新に思ひつかれた事ではなく、和漢ともに其の前例があります。

支那では天台大師が陳の宣帝といふ天子の許しを得て諸宗の僧侶と對論して、盡く之を屈服せしめました。其の頃の支那には、南方に三派と、北方に七派と、凡て十派の佛教が對立して居まして、天台大師が法華經を弘められたのに對して頻りに非難を加へましたので、大師は宣帝の保護の下に對論を開いて十派の人々を盡く論破し、彼等をして法華經が最勝の經であることを承認せしめられたのであります。また吾が國では傳教大師が法華經を弘められたのに對して奈良の七

大寺の僧侶が競うて非難を加へましたので、大師は桓武天皇の勅許を得られて、延暦二十一年正月に京都の高雄寺で、奈良七大寺を代表する所の十四人の學者と對論して盡く之を屈服せしめ、法華經が最勝の經であることを承認せしめられました。此等の人々から朝廷へ差出した謝表には、

一 妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の學衆初めて至極を悟る。

とあり、また、

今より而後悉く妙圓の船に載せられて早く彼岸に濟ることを得ん。

とも申してあります。日蓮聖人は此等の前例を思ひ合せて、諸宗の僧侶との對論を實行することを北條氏に向つて要求せられたのであります。まことに是れは正々堂々たる御態度と申さなければなりません。

此の如くに日蓮聖人が誠心を打込まれた立正安國論の提出に對して北條氏からは何の應答もなく、數年が過ぎたのであります。此の數年間に聖人の御身には種々の迫害がありました。即ち此の立正安國論を提出せられた文應元年の八月には、諸宗の僧等に煽動された暴徒が松葉ヶ谷

の御草庵を焼打ちして、聖人はやうやく身を以て御脱れになりました。又其の次の年の弘長元年五月には北條氏が諸宗の者の讒言を容れて聖人を伊豆の伊東に流し、聖人は配所に在ること三年に亘り、弘長三年二月に赦されて鎌倉へ御歸りになりました。其の翌年の文永元年の八月には御母君の御病氣のために安房へ御歸郷になりましたが、此の十月に聖人が東條の小松原を通りかゝられた時、兼て遺恨を懷いて居た東條景信が聖人を襲撃し、御弟子の鏡忍房と天津の城主工藤吉隆とは戦死しましたが、聖人はたゞ疵を負はれたのみで御脱れになりました。此等の御法難は盡く勸持品に豫言せられたことが實現したもので、聖人は平生から御覺悟の事でありましたから、小松原御法難の後に於て南條七郎への御消息の中に、

いよいよ法華經こそ信心まさり候へ。……日本國の持經者は未だ此の經文にあはせ給はず、唯日蓮一人こそ讀みはべれ。我不愛身命但惜無上道是れなり。

と仰せられた通り、難に値うて唯だ勇氣を増さるゝのみでありました。

彼此れして居る間に立正安國論御撰述の時から八年を経て、文永五年となりましたが、此の年の正月に立正安國論の中に於て聖人の豫言して置かれたことが實現すべき機勢が現はれました。

それは蒙古から吾が國の降服を勸むる國書が到來したことであります。此の蒙古は支那の北方の未開國に過ぎなかつたのでありますが、鐵木眞といふ君主の時から非常に強大になり、鐵木眞は宋の寧宗の時に自ら稱して成吉思汗じんぎすかんといひました。これは吾が土御門天皇の御宇で、源實朝が將軍、北條義時が執權の時でありました。此の成吉思汗から四代目の君主忽必烈の時に至つて支那の全部を占領して國號を元と改めたのであります。尤も此の文永五年は蒙古が支那全部を領土とした時より十一年前でありますが、此の時には前から支那に侵入して居た遼とか金とか夏とかいふ國々を盡く打破り、また高麗をも屬國としまして、非常な勢ひになりましたので、忽必烈は高麗王に命じて其の國書を吾が國へ送らせただけであります。高麗國の使者が蒙古の國書を携へて太宰府へ來たのは文永五年の正月で、太宰府からは直ぐに之を鎌倉の幕府へ送つて來たので、幕府からは之を朝廷へ上りました。

此の國書は『國交を修むることを求むる國書』として高麗の使者に依つて取次がれたのであります。其の内容は『速かに吾が國の屬國となることを承諾せよ。若し不承知ならば直ちに討伐の軍を差し向くるぞ』といふ脅迫的のものであります。

無論朝廷に於ては『斯様な無禮極まる勸めに應ずべきものではない』と御決定になり、之に對して拒絶的の返書を御遣はしにならうといふので、此の年の三月から執權の職に就いた北條時宗の意見を徵せられました。時宗はまた一層の強硬論者でありまして『斯ういふ無法な國書に對しては返書を御遣はしになるに及ばぬ。直ちに開戦の準備をすべきである』といふ意見を奏上いたしました。日蓮聖人は此等の事を聞かれて『前年自分の豫言して置いた事が的中した上は、改めて爲政者に警告を與へて國難を救はなければならぬ』と思ひ定められまして、四月の初めに先づ法鑿房へ警告の御書を御遣はしになりました。此の人は當時北條氏の家司であつた平左衛門の父で、出家はして居ても隠然勢力のあつた人であります。これは聖人と前々から交際のあつた人です。此の人を通じて北條氏の覺醒を促さうといふ御考へであつたものと思はれます。然るに之に對して何等の反應もありませんでした。

そこで聖人は同じ年の八月に宿屋入道に御書を御遣はしになりました。此の人は北條時頼の近侍であつて、聖人が前年立正安國論を提出された時に之を取次いだ人であります。時頼は弘長三年（此の蒙古の國書の來た時より五年前）に死にましたが、宿屋入道は時宗執權の近侍になつて

居ましたから、前年からの縁に依つて聖人は此の人に對して、
經文の如くんば彼の國より此の國を責めん事必定なり。而るに日本國の中には日蓮一人當に彼
の西戎を調伏するの人たる可しと兼て之を知る。論文に之を勘ふ。君の爲め國の爲め神の爲め
佛の爲めに内奏を經らる可き歟。

と申し送られたのであります。然るに之に對して何の沙汰もなかつたので、同じ十月に至つて直
接に執權たる北條時宗に書を送つて、諸宗の僧侶との對論を至急に實行することを求められまし
た。此の御書には先づ、

諫臣國に在れば其の國正しく、爭子家に在れば其の家直し。國家の安危は政道の直否に在り、
佛法の邪正は經文の明鏡に依る。

と時宗の反省を促し、國難の起るのは國中に正法が行はれぬためであることを述べられて、
日蓮が申す事御用無くんば定めて後悔之有るべし。日蓮は法華經の御使なり。經に云く、則
ち如來の使、如來の所遣として如來の事を行すと。三世諸佛の事とは法華經なり。此の由方々
へ之を驚かし奉る、一所に集めて御評議有りて御報に預る可く候。所詮萬祈を抛て、諸宗

を御前に召し合せ、佛法の邪正を決し給へ。

と對論の必要を力説せられ、

敢て日蓮が私曲に非ず、只偏に大忠を懷くが故に身の爲めに之を申さず、神の爲め君の爲め一
切衆生の爲めに言上せしむる所なり。

といふを以て之を結ばれました。

聖人は之と同時に宿屋入道と平左衛門にも、對論の事を至急に取運ぶやうにといふ督促の書
面を遣はされ、また建長寺、極樂寺等凡て七ヶ寺に對しても書面を以て、『前年自分が最明寺時頼
に出した立正安國論の中で豫言して置いたことが愈々事實に現はれたに就て、改めて諸宗との對
論を要求して置いた』といふことを申し送つて其の用意を促されました。其の中で建長寺の道隆
への御書の結尾は、

敢て日蓮が私曲の義に非ず、只經論の文に任すの處なり。具には紙面に載せ難し、併ながら對
決の時を期す。書は言を盡さず、言は心を盡さず。

といふのでありますが、他の諸寺への御書も之と大同小異でありました。さて此の如くに嚴しい

要求をするに就ては、執權を始め幕府の人々の怒りに觸れて何等かの迫害を加へらるゝことも勿論覺悟して居なければならぬので、聖人は弟子檀那の人々へも御書を御與へになつて、必死の覺悟を定むべきことを御諭しになりました。其の御書は。

大蒙古國の簡牒到來に就て十一通の書狀を以て方々へ申さしめ候。定めて日蓮弟子檀那流罪死罪一定ならんのみ。少しも之に驚くこと莫かれ。方々への強言申すに及ばず、是れ併ながら強毒の故なり。日蓮が庶幾せしむる所に候。各々用心有る可し。少しも妻子眷族を臆ふこと莫かれ、權威を恐るゝこと莫かれ。今度生死の縛を切て佛果を遂げしめ給へ。

といふのであります。此の御書の中に『強毒』とあるのは天台大師の語に『強いて之を毒す』とあるのに基かれたので、毒すといふのは人の過を責めて之を改めさせることであります。即ち『折伏』といふのと同じ意味であります。日蓮聖人が日本國中の人の信仰が誤つて居るといふことを説いて、彼等を覺醒せしむるために力を盡されたのは即ち『強毒』を實行されたので、之が爲に種々の迫害にあふことは固より覺悟して居られた所であります。

聖人は是れだけの覺悟を定めて居られました。此の時には格別の迫害もありませんでした。

併しながら聖人の要求せられた諸宗との對論は終に實行せられませんでした。聖人は諸宗に對して強いて法華經を信することを求められたのではなく、『互ひに其の宗の教義を語りあつた上で、若し法華經に勝る經のあることが明かになつたならば、自分はいつでも法華經の信仰を捨てよう。若し法華經が最勝の經であるといふことが明かになつたならば、諸宗の人々は直ちにそれぞれの教義を捨て、法華經に歸依すべきである』といふのでありまして、是れほど公明正大な主張はないのであります。されば諸宗の僧侶が眞に確乎とした信仰をもつて居るならば、喜んで此の要求に應じて對論を開かなければならぬ筈であります。諸宗の僧侶の中には北條執權の歸依を得て居た人もあつたのでありますから、其等の人から日蓮聖人と對論したいといふことを申し出たなら、北條氏も必ず之を許可したのでありませう。然るに其の實行が出来なかつたといふのは、畢竟諸宗の人々が極めて卑怯であつた爲であると斷定するより外はないと思はれます。

諸宗の僧侶の中に其の教義を對論して日蓮聖人を屈服せしむる自信のある人はなかつたので、何か他の方法を以て聖人を除かうと種々に工夫を凝した末に、北條氏の奥向きへ聖人を讒奏し、其の結果として文永八年九月十二日夜に於ける龍ノ口の御法難があり、續いて佐渡配流といふこ

とになりました。其の時の委しい事情は、他日佐渡で御書きになつた御著作の解釋を公にする時に申し述べたいと思ひますが、聖人は此の九月十二日に幕府へ召喚せられて平左衛門に面會せられ、御草庵へ戻られてから直ぐに立正安國論を使ひに持たせて平左衛門へ送られました。此の時に添へられた御書には、

法を知り國を思ふの志、尤も賞せらる可きの處、邪法邪教の輩が讒奏讒言するの間、久しく大忠を懷いて而も未だ微望を達せず、剩へ不快の見參に入ること、偏に難治の次第を愁ふる者なり。伏して惟れば泰山に昇らざれば天の高きことを知らず、深谷に入らざれば地の厚きことを知らず。仍て御存知の爲め立正安國論一卷之を進覽す。勘へ載する所の文は九牛の一毛なり、未だ微志を盡さざるのみ。抑々貴邊は當時天下の棟梁なり。何ぞ國中の良材を損せんや。早く賢慮を回らして須らく異敵を退くべし。世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す。是れ偏に身の爲めに之を述べず、君の爲め佛の爲め神の爲め一切衆生の爲めに言上せしむる所なり。

とあります。之に依つて見ても、聖人が如何に此の立正安國といふことを重んぜられたかを知

べきであります。

此の立正安國論といふものは日蓮聖人の御撰述以外にはありませんが、立正安國といふ主義は聖徳太子以來吾が國の佛教を一貫したる大精神であると見なければならぬのであります。此の事に就ては立正安國論の本文に就ての説明を終つてから、別に申し述べたいと存じます。

立正安國論

旅客來りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天變地天飢饉疫癘遍く天下に満ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざる族敢て一人も無し。然る間或は利劍卽是の文を專として西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃んで東方如來の經を誦し、或は病卽消滅不老不死の詞を仰いで法華眞實の妙文を崇め、或は七難卽滅七福卽生の句を信じて百座百講の儀を調へ、有は祕密眞言の教に因つて五瓶の水を灑ぎ、有は坐禪入定の儀を全うして空觀の月を澄し、若くは七鬼神の號を書して千門に押し、若くは五大力の形を圖して萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して四角四界の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀んで國主國宰の徳政を行ふ。然りと雖も唯だ肝膽を摧くのみにし

て彌よ飢疫に逼る。乞客目に溢れ死人眼に滿てり。屍を臥せて觀と爲し、尸を並べて橋と作す。觀れば夫れ二離壁を合せ五緯珠を連ね、三寶世に在し百王未だ窮まらざるに、此の世早く衰へ其の法何ぞ廢れたる。是れ何なる禍に依り、是れ何なる誤りに由るか。

○利劍卽是の文 唐の善導といふ人の著した般舟讚といふものの中に『利劍は卽ち是れ彌陀の號』といふことがあります。劍を以て一切の物を切ることが出来るやうに、阿彌陀佛の力に頼れば如何なる苦惱も盡く除かれるといふ意であります。○西土教主の名 阿彌陀佛は西方極樂淨土の教主でありますから、念佛の信者は阿彌陀佛の名號を唱へて、此の災難を免れることを念じて居るのであります。○衆病悉除の願 藥師經の中に藥師如來が十二の誓願を立てられたといふことがありますが、其の第七の願に『若し諸の有情、衆病逼迫して救無く歸無く、醫無く藥無く、親無く家無く、貧窮多苦ならんに、我が名號一たび其の耳を経んに衆病愈く除かりて身心安樂ならん』とあります。有情とは人のことであります。○東方如來 藥師如來は東

方淨瑠璃世界の教主でありますから、此の佛を信仰する者は前に出した第七願の文に基き、此の佛の名號を唱へて災難を免れんことを祈るのであります。○病卽消滅不老不死 法華經の藥王菩薩本事品に『此の經は則ちこれ閻浮提の人の病の良藥なり。若し人病有らんに是の經を聞くことを得ば病卽ち消滅して不老不死ならん』とあります。閻浮提の人といふのは世界中の人といふことであります。○七難卽滅七福卽生 仁王經の受持品に『般若波羅蜜を講讀せば七難卽ち滅して七福卽ち生じ、萬姓安樂にして帝王歡喜せん』とあります。○百座百講の儀 同じ仁王經の護國品に、若し國に災難がある時には百の講座を設けて此の經を讀誦すれば、その功德に依つて災難が除かれるといふことが説いてあるので、此の講讀の式を名けて仁王會と申すのであります。○秘密眞言の教 眞言宗では自宗の教義を名けて密教といひ、他の宗の教義を盡く顯教といつて居ります。密教とは深い教といふこと、顯教とは浅い教といふ意味であります。○五瓶の水を灑ぎ 眞言宗で災難を攘ふために祈禱をする時には、五つの瓶を壇の上に置き、これに金銀等の五種の寶、米麥等の五種の穀物、人參茯苓等の五種の藥、沈香白檀等五種の香を盛り、之に淨らかな水を灑ぎ、また種々の花を挿して修法を行ふのであります。○坐禪

入定の儀 禪宗の方では坐禪して心を静めて、世間一切の事のために累ひを受けぬやうに工夫を凝すのであります。○空觀の月 空觀とは世間の吉凶とか苦樂とかいふことを一切超越する工夫を凝すことで、此の修行が出来さへすれば、心は澄み渡つた月のやうになつて少しも亂れることは無いと申して居ます。○七鬼神の名 眞言宗の修法の中に七人の鬼神の名をかけた紙を門に貼つて置けば種々の災難を除くことが出来るといふことがあつたさうですが、今は明かに傳はつて居りませぬ。○五大力の形 仁王經の受持品に、金剛吼等の五人の菩薩は非常に力が強くて有らゆる難を攘ふものであるから、其の姿を畫いて之に供養せよといふことがあります。○四角四堺の祭祀 京都の四方の境と其の四隅とに神官が立つて、疫病を攘ふことを天地の神々に祈る儀式であります。○徳政を行ふ 仁政を行ふことであります。貸借を取消させるのを『徳政』と名けたこともありますが、此處では其の事を申して居るではありません。○觀と爲し 觀とは物見の臺のことではありますが、死骸の多いことを形容したゞけであります。○二離壁を合せ 離とは明かなことをいふので、最も明かなものは日月であります。日月が天に懸つて輝いて居ることを壁にたとへたのであります。○五緯珠を連ね 天上の星の中で動か

ぬものを經といひ、動く星を緯といひます。動く星の主要なものが五つあつて木星火星金星水星及び土星であります。何れも光りが強いので之を珠にたとへたのであります。○三寶世に在し 佛法僧を三寶といひます。三寶が世に在すといふのは此の國に佛教が榮えて居ることです。○百王未だ窮まらざる 百王とは御歴代の皇室を申すので、百といふのは唯だ多いといふ意味に過ぎませぬ。即ち皇室の永く御榮えになつてあらせらるゝことであります。

立正安國論は一人の旅客が日蓮聖人の庵を訪うて、近年種々の災難が打續いて起る有様を述べ、其の原因に就て聖人の意見を求むるといふことに端を發し、此より數段の問答の進むに隨つて、國土の安穩を望むならば是非とも正法を立つることに全力を注がなければならぬといふことが明かになるといふ組織なのであります。先づ其の第一段の問答に依つて、此の國に正しい教への行はれて居ないのが、災難の打續く原因であるといふことが示されて居るのであります。

此の連年の天災地變に就て日本國中の人々が盡く皆心を惱まし、有らゆる神佛に對して絶えず祈禱の行はれて居たことは、此處に委しく記された通りであります。少しの效驗も見えませんでした。是れは固より當然の事と申さなければなりません。吾々の禍福吉凶は盡く皆自ら之を招

くものでありまして、自ら身を慎しむことを心懸けないで神佛の加護を願うても、其の願ひの達せられやうわけはないのであります。されば涅槃經の中には、善惡の報は影の形に従ふが如し。三世の因果循環して失はず。此の生空しく過ぎて後に悔ゆるも及ぶこと無し。

と教へられてあります。善い行ひには必ず善報があり、悪い行ひには必ず惡報があるので、此の因果の關係は過去より現世に亘り、また現世より來世に亘つて相連るものであるから、現世に於て其の行ひを慎しまなければ必ず來世に至つて其の報を受くるので、その時に後悔しても追ひつくものではないといふ訓戒であります。吾々に取つて最も大切なのは現世に於ける行ひであります。現世に於て如何に多くの罪を犯しても、阿彌陀佛の御慈悲に頼りさへすれば、來世は必ず極樂淨土に往生することが出来るといふやうなことを信じて居る人も隨分あるやうであります。極樂淨土のことを殊に委しく説かれた無量壽經の中に、天地の間には五道分明にして恢廓窳窳浩々茫茫たり。善惡の應報として禍福相承接、身自ら之に當り誰も代る者なし。

とあります。身を慎しまずに唯だ佛の御慈悲を頼むといふのは、まことに不心得の至と申さなければなりません。

吾々が信心を勵まなければならぬといふのは、信心の力に依つて心の中の一の煩惱が除かれて、身も心も共に淨らかになり、淺ましい凡夫の境界を脱することが出来るからであります。法華經の提婆品には文殊菩薩が龍王の女のために法華經を説かれたといふことがありますが、龍王の女は文殊菩薩の教へを受けて一切の煩惱を除き、非常に勝れた徳を與ふる身となられたので、文殊菩薩は之を稱めて、

慈悲仁讓志意和雅にして能く菩提に至れり。

と仰せられました。龍王の女は御心が淨らかで優しく、慈悲の念に富み、佛と同様の智慧を具ふるやうにおなりになつたと申すことでもあります。吾々は容易に此の龍王の女のやうにはなれませぬけれども、信心を怠らなければ、次第に心の中の煩惱が除かれて、凡夫の境界を離れて行くことが出来るに疑ひはありません。一切の苦は煩惱から起るのであるといふことは、多くの經の中に教へられてある所であります。心に種々の煩惱が群り起つて居れば、どんな境遇に身を置いて

も決して幸福の得らるゝものではありません。吾々は佛に向つて自分の心の煩惱を除くべき力をお與へになるやうに祈るべきであります。自分の心を淨くすることに氣がつかないで、唯だ災難を除くことを祈つても、そんな祈りに效驗のあらう筈は萬々ないと考えなければなりません。此の立正安國論の一番初めに、其の頃の世間の人の祈禱に少しも効驗がなかつたことが示されてゐるのは、今日の吾々に取つても、まことに貴い御教訓であると申すべきであります。

主人曰く、獨り此の事を愁ひて胸臆に憤悻す。客來りて共に嘆く、屢談話を致さん。夫れ出家して道に入る者は法に依つて佛を期するなり。而るに今神術を協はず佛威も驗無し。具に當世の躰を觀るに、愚にして後生の疑ひを起す。然れば則ち圓覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して、慮を深うす。倩ら微管を傾け、聊か經文を披きたるに、世皆正に背き人悉く惡に歸す。故に善神は國を捨て、相去り、聖人は所を辭して還らず。是を以て魔來り鬼來つて、災起り難起る。言はずんばある可からず、恐れずんばある可からず。

○胸臆に憤悻す 憤とは心の中で深く歎いて居ること。悻とは言葉に出さうとしても容易に出せぬほどに感慨を催して居ることであります。○法に依つて佛を期する 佛法を學んで修行を重ね、結局は佛に成ることを目的として居るのであります。○後生の疑ひを起す 現世に於て佛を祈つても神を頼んでも救はれぬやうでは、來世も到底救はれまいと思つて深く悲觀して居るといふのであります。○圓覆を仰いで 天は圓くして萬物を覆ふものでありますから、圓覆を仰ぐとは即ち天を仰いで歎くことを申すのであります。○方載に俯して 地は方にして萬物を載するものでありますから、方載に俯すとは即ち地に俯して悲しむことであります。○微管を傾け 管の中から天を覗くといふのは自分の考への足らぬことを謙遜して申すのであります。

空の最初の間に對して日蓮聖人は『世皆正に皆き人悉く惡に歸す』といふ有様になつたことが種々の災難の起る原因であるといふ答へを御與へになるのであります。それに就いて『現世に神佛の御利益のないのを見て、後生の疑ひを起した』とあるのは殊に味ふべき御言葉であります。固より吾々の生命が現世だけで終るものでなく、永く未來までも續くものであるといふこと

は、苟くも佛教を奉ずる者の共に信じなければならぬ所でありませんが、さりとて現世の生活を軽く見るのも、間違つた考へと申さなければなりません。人間の一生は夢のやうなものであるとか、現世の事に一切執著してはならないとかいふことが、佛に依つて屢々説かれて居りますけれども、これは多くの人が専ら世間の名利に執著して争ひあひ闘ひあひ、自分で自分を苦しめ、又世間にも種々の累ひを及ぼして居るのを戒むるために御與へになつた、所謂方便の教へでありまして、法華經をはじめ多くの大乘の經典の中に説かれた所に依りますと、現世の生活といふものは決して輕んずべきものではありません。吾々の心の中の煩惱がなくなつて、佛のやうな淨い心をもつて世に立てば、日々の行ひが皆淨土を此の世に實現するためのお役に立つのであります、斯くして過ぐる一日は、たとひ一日でも非常な價值をもつものであります。

我淨ければ施度も亦淨し。施度淨きが故に願も亦淨し。願淨きが故に菩提も亦淨し。菩提淨きが故に一切の法亦淨し。

とは大集經の中に教へられてあることでありますが、心の淨い者は其の周圍を淨めるところの大なる働きが出来るのであります。

斯ういふ善根を積むことの出来るものは、來世にも其の淨らかな心が續いて益々多くの善根を積み、結局は佛の境界に到達することも必ず出来るのであります。若し現世を軽く視て、現世に於て人らしい働きも出来ず、世間に何等の貢獻も出来ぬならば、その人は來世に於ても亦同様に無意味な生活を續けて行くより外はないでせう。現世に限られた生命でなければこそ、現世の生活が殊に大切なのであります。吾々は現世の短い生活の中に於て、來世に於ける永遠の幸福の基礎を作つて置かなければなりません。されば世間に正しい佛教が行はれて居ますならば、誰も現世の生活を輕んずるもの無く、互ひに皆善根を積むことを念として、日々の生活を出來るだけ有意義にするやうに努めて居るに違ひないのであります。然るに其の心掛けをもつて居る人が少くて、唯だ眼前の災難を除くために神佛に祈禱をして居るのみであるといふのは、要するに世間に正しい教への行はれて居ない爲であると思なければなりません。斯ういふことでは、たとひ國中に寺の數がどれ程多くあつても、又僧侶がいかに世間で重んぜられて居ても、正しい意味でいへば『佛法の衰微して居る時代』と申さなければならぬのであります。斯ういふ時代に生れて、此の時代の弊を脱れることが出来ず、正しい信仰とは如何なるものであるかを辨ふることも出来ぬ

人は、たとひ來世に於て淨土に生を受くることを望んでも、その望みは到底叶ひますまい。

法華經の藥師論品には佛の正法を聽き得た者の幸福を説かれまして、

是の諸の衆生是の法を聞き已りて、現世安穩にして後に善處に生じ、道を以て樂を受く。

とあります。即ち現世に於て正しい教へを受けることの出來たものは、現世の生活をして居るうちから既に其の心が安穩でありまして、來世に於ては更に其の修行が續けられて行くといふことなのであります。現世の利益のみを求むる者は固より正しい信仰を知らぬものでありますが、來世の幸福のみを求めて、現世に於て其の幸福の因を作ること知らぬ者も亦甚しい誤りに陥つたものと申さなければなりません。吾々は現世から來世に亘つて一貫したる利益を受けらるゝやうな、正しい教へを求めなければならぬわけであります。日蓮聖人が法華經を御弘めになつたのは勿論此の御趣意なのであります。たとひ日夜法華經を讀誦して居ても、此の御趣意をよく辨へなければ、眞に法華經を讀誦する者とは申されぬのでありますから、お互ひに間違ひのないやうに致したいものであります。

客曰く、天下の災國中の難、余獨り嘆くのみにあらず、衆皆悲めり。今蘭室に入りて初めて芳詞を承はるに、神聖去り辭し災難起るとは、何れの經に出たるや。其の證據を聞かん。

○蘭室に入りて 蘭の花の咲いて居る室に入れば自分の身にも良い匂ひが移るので、之を良い教へを受けることに喩へたのであります。○何れの經に出たるや 世間が皆正に背き惡に歸したといふのは容易ならぬことであります。經文に確とした證據がなければ輕々しく信ずることは出來ませぬ。

此より第二段の問答に入りまして、客が『正法の行はれぬ國に種々の災難が起るといふ證據は何の經にあるか』と問ふたのに對して、日蓮聖人が金光明經、大集經、仁王經、藥師經等の文を引いて、其の明かな證據を御示しになるのであります。此の客の言に『何れの經に出たるや、其の證據を聞かん』とあるのは、まことに大切なる語と申すべきで、苟くも佛敎を奉ずるものは、何事でも佛意に基いて之を定めなければならぬのであります。時としては自身の智慧才覺を恃ん

で佛の御心に合はぬことを唱へ出し、巧みに世間の人を説き惑はして、大なる勢力を作るやうなこともありすが、さういふ者が永く榮えやう筈はありません。日蓮聖人は開目鈔の中に於て、

宗々互に權を諍ふ。予此をあらそはず、但經に任すべし。

と其の御態度を明かに示して居られます。聖人が法華經以前の諸經を盡く方便の經であると斷じ、法華經のみが眞實を説かれたものであると認められたのは無量義經の中に、

四十餘年には未だ眞實を顯はさず。

とあり、法華經の方便品に、

正直に方便を捨て、但だ無上道を説く。

とあるに基いたので、此等は何れも釋尊の仰せられた所であります。日蓮聖人は少しも私意を以て定められたものではありません。

又聖人が此の法華經の上に立つべき經は斷じて無いと定められたのも法華經の法師品に、

已に説き今説き當に説かん、而も其の中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり。

とあるに基いたので、これも釋尊が御自身に仰せられた所であります。勿論此等の事は既に天台

大師や傳教大師も説かれたことでありますが、聖人は天台傳教等の方々が何れも立派な學者であるから其の説に従はれたのではなく、其の説が佛説と能く一致して居るので之に従はれたのであります。如何なる學者の説でも其の佛意に合はぬものには、斷じて従はれません。但したとひ經典の文に基いて居ても、その經文を後世の者が勝手に曲解して、私意を混じて説くことになると、全く佛の御精神とは合はなくなるので、斯ういふ説には決して従つてはならないので、聖人は此等の點に就いても充分に意を用ゐて居られました。

後の世になると、大切な經典の中に世間の間違つた説を混入して説いて、正しい佛敎の流布を妨げるやうな者が必ず出て來るといふことを釋尊は豫め御察しになつて、斯ういふ者に惑はされぬやうに、涅槃經の中に細々と戒められてあります。斯ういふ者を釋尊は「惡人」と仰せになりました。その經文には、

是の諸の惡人は復た是の如き經典を讀誦すと雖も、如來の深密の要義を滅除して、世間の莊嚴の文飾、無義の語を安置す。前を抄して後に著け後を抄して前に著け、前後を中に著け、中を前後に著く。當に知るべし是の如き諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり。

とあります。日蓮聖人は開目鈔の中に此の涅槃經の文を引かれまして、斯ういふやうに私意を混じて佛説を解釋する者に惑はされぬやうにといつて厳しく戒めて居られますが、吾々も深く意を此の點に用ゐなければなりません。世間には種々の説が流行しますが、其等のものに惑はされず、何處までも佛の御精神に違はぬやうにすべきで、若し此處に心得違ひがあれば、佛教を信奉するものとは申せないわけでありませう。

主人曰く、其の文繁多にして其の證廣博なり。金光明經に云く、其の國土に於て此の經有りと雖も未だ嘗て流布せず。捨離の心を生じて聽聞せんことを樂はず。亦供養し尊重し讚嘆せず。四部の衆の持經の人を見ても、亦復尊重し乃至供養せず。遂に我等及び餘の眷屬、無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き正法の流を失ひ、威光及び勢力有ること無からしめ、惡趣を增長し人天を損滅し、生死の河に墜ち涅槃の路に乖かん。世尊、我等四王并に諸

の眷屬及び藥叉等斯の如き事を見て、其の國土を捨て擁護の心無けん。但だ我等のみ是の王を捨棄するにあらず、必ず無量の守護國土の諸大善神有らんも皆悉く捨去せん。既に捨離し已りなば、其の國は當に種々の災禍有りて國位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無く唯だ繫縛殺害瞋諍のみ有りて互に相讒誣し、枉げて無辜に及ぼさん。疫病流行して彗星數出で、兩の日並び現じ薄蝕恒無く、黑白の二の虹不祥の相を表はし、星流れ地動きて井の内より聲を發さん。暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭うて苗實も成らず、多く佗方の怨賊有りて國內を侵掠し、人民諸の苦惱を受け土地所樂の處有ること無けん。

○金光明經 委しくいへば金光明最勝王經といふので、十卷あります。金光明とは佛の教への尊いことを黄金の光りの四方を照すのに喩へたのでありまして、佛の教へに基いて國の政治を行ふ王は最も徳の勝れた人でありませうから、之を最勝王と申すのであります。此の經は佛の教へが行はれる國は必ず永久に榮え、佛の教への行はれぬ國は必ず衰へて行くといふことを徹

底的に説かれたものであります。○捨離の心を生じ 國王や大臣などが佛の尊い教へを捨て、守らぬやうな心になつてしまふことであります。○四部の衆 出家して佛敎を學ぶ男子を比丘といひ、出家して佛敎を學ぶ婦人を比丘尼といひ、在家で佛敎を信する男子を優婆塞といひ、在家で佛敎を信する婦人を優婆夷といひ、此の四種の人を併せて四部といふのであります。○我等 四天王が自ら稱して『我等』といふのでありまして、此處の文は四天王が佛に對して『自分達は佛敎の行はれぬ國は決して護りませぬ』といふことを申上げて居る言葉であります。帝釋天の下に屬して四方の國々を護ることを掌つて居るのが此の四天王であります。其の東方を護るものを持國天といひ、南方を護るものを增長天といひ、西方を護るものを廣目天といひ、北方を護るものを多聞天といふのであります。○威光及び勢力有ること無からしめ 天上界の善神も皆佛敎を常に聽聞して居るので、威光も勢力も具はつて居るのであります。久しく佛敎を聽聞せず居れば威光も減じ、勢力も無くなつてしまひます。○惡趣を増長し 地獄界と餓鬼界と畜生界と及び修羅界とを名けて四惡趣と申します。惡業を多く重ねたものは皆其の報として、此等の四界の何れかへ趣くものでありますから、惡趣といふ名がつけられてあ

るわけでありませぬ。其の國に佛敎が廢れて居れば、國民の心が皆邪まになつて惡業のみを重ねますから、多くは此等の惡道の何れかへ墮つるのであります。○人天を損滅し 人間界若くは天上界に在つて正しい行ひをして居る者は、唯だ減少するばかりであります。○生死の河に墜ち 人生の有らゆる變化を總稱して生死といふのであります。佛敎を信することを知らぬものは、周圍の變化のためにいつも累ひを受けて、其の心は片時と雖も安穩ではありませぬ。斯ういふ人々のことを生死の河に墜ちたものと申すのであります。○涅槃の道に乖かん 一切の迷ひを離れ、一切の苦を離れたのを涅槃といふのであります。佛敎を信じなければ決して涅槃を得ることの出来るものではありません。

○藥叉等 四天王の下に屬して國を護るところの鬼神であります。○唯だ繫縛殺害瞋諍のみ 人民が互ひに争ひあふことであります。其の争ひに負けたものは或は縛られたり、或は殺されたりします。又互ひに争ひあふ以上は、勿論瞋恚の念を心に懷いて敵對して居るのであります。○枉げて無辜に及ぼさん 其の争ひが甚しくなれば、何の罪も無い者にまで累ひを及ぼすやうになるのであります。○薄蝕 日月の光りが薄くなつたり、或は日蝕や月蝕が起つたりす

るのであります。○苗實 五穀が熟せずして飢饉となるのであります。○佗方の怨賊 他國の兵が襲撃して來るのであります。○所樂の處 人民が其の身を安んずべき地が無くなるのであります。此の立正安國論の書かれた時の吾が國には、以上數へ上げられた天變地天等が盡く實現しますして、唯だ最後に出て居る外敵の來襲だけがまだ實現しなかつたのであります。

日蓮聖人は諸經の文を引いて、種々の天變地變が皆天によつて與へらるゝ警告であるといふことを證せられました。第一に引かれたのは金光明經の四天王護國品の文であります。凡て天世界の諸善神は佛教の行はれて居る國を護るものと考へられて居るのであります。佛教のまだ興らぬ前には婆羅門教が行はれて居たのであります。其の時代から帝釋天をはじめ天界の多くの神が崇拜されて居りました。此の人間界には種々の苦があるけれども、天界には少しも苦がなく、天界に生を享くる者は至て安穩平和な毎日を送ることが出來ると信じられて居ました。で、來世に於て天界に生を享くるのが一般の人の理想でありました。それで婆羅門の學者なども『來世に於て天界に生れたいと思ふならば、現世に於て有らゆる苦を忍んで、多くの善事を行はなければならぬ』といつて世間の人々を教へて居たものであります。然るに佛教が興るに

及んでは、人間界の者も天上界の者も共に皆正しい教へを學ばなければならぬといふことになつたのであります。

釋尊の御精神に依りますと、たゞ毎日を安穩無事に送るのは決して望ましいことではありません。人間界はまことに多事で、種々の苦勞の絶え間がないから、誰でも安穩無事を望んで、天界の生活を羨むやうにもなりますけれども、何の苦勞もなく、唯だ安穩に毎日が送れるやうになると却つて其のあまりに無事なのに厭きて毎日の生活が全く無意味なものに感じられて來るのであります。凡て生命を有する者は皆動くべき本性をもつて居るのでありますから、生きるかひのあるだけの働きをしなければ、決して眞の満足の得らるゝものではありません。さればたとひ天界に生を享けても、其の平穩無事なのに狎れてしまへば、少しも幸福は感じられなくなり、却つて倦怠の念のみが募つて來るのであります。吾々は決して天界に生を享けることなどを理想とせず、自分の努力が何等かの役に立つて、生きて居るかひがあるといふ自覺の得らるゝやうな生活を求めなければならぬので、此の事を徹底的に教へらるゝものが即ち佛教なのであります。それ故に佛教には人間界の者は勿論、天上界の者も皆歸依しなければならぬので、天上界に於

て最も高い地位を占めて居らるゝ帝釋天も佛教に歸依し、佛教の普く世に弘まるやうに常に力を添へて居らるゝといふことが多くの經の中に見えて居ります。四天王は何れも此の帝釋天の下に屬して世間を護ることを其の任務としますから、勿論佛教の行はれて居る國を護るために力を盡す筈であります。吾が國でも佛教が弘まると共に、四天王の保護を祈るといふことが隨分行はれまして、四天王寺といふ寺なども現に建つて居ります。併し四天王は正しい信仰の立つて居る國を護るといふのでありますから、佛の正法を信ぜず、其の身の行ひの修まらぬやうな人が如何に祈つても、四天王は決して之を護られぬでありませう。心の淨くない人の祈りは何の效驗もないといふことを忘れてはなりません。

又此の四天王が正しい佛教の行はれぬ國に種々の天災地變の起ることを説くに當つて、其の國に於ては人民の多數が善心を失つてしまつて、風俗が亂れ果つるといふことを申して居るのは、特に注意すべき所であります。人の心が正しくなれば一切の行ひが正しくなり、子として親に對すれば即ち孝を盡し、臣として君に對すれば即ち忠を盡し、人と交はれば信義を全うするやうになるのであります。佛教は其の心の根本を正すべき力を與ふるものであります。人倫を離れて

佛教を考ふることは決して出来ぬのであります。若し人倫を離れた佛教といふものがあれば、それは之を説き弘むる者が私意を混じたものであつて、佛の御心に叶つたものではありません。若し世間が亂れて來て何人も其の處に安んじ得ぬやうになれば、天より之に警告を與ふるために種々の災禍を降すのでありますから、其の國の爲政者をはじめ國民全體が自ら反省して其の過を改めなければならぬので、若し此の反省がなくて、如何に禍を除くために祈禱をしても、其の祈禱に效き目のないのは當然のことであります。

大集經に云く、佛法實に隱沒せば鬚髮爪皆長く、諸法も亦忘失せん。當時に虚空の中より大なる聲ありて地に震ひ、一切皆遍動せんこと猶ほ水上輪の如くならん。城壁破れ落ち下り、屋宇悉く圯れ折け、樹木の根枝葉、華葉菓藥盡さん。唯だ淨居天を除きて欲界の一切處の七味三精氣損減して餘有ること無く、解脱の諸の善論當時に一切盡さん。所生の華菓の味希少にして亦美からず。諸有の井泉池も一切盡く枯涸し、土地悉く鹹鹵し敵裂して丘澗と成らん。諸山は皆焦燃して天龍も

雨を降さず。苗稼皆枯死し、生ふる者皆死に盡し、餘草更に生ぜず。土を雨して皆昏闇に日月も明を現げず。四方皆亢旱し、數諸の惡瑞を現はし、十不善業道、貪瞋癡倍増し、衆生父母に於て之を觀ること獐鹿の如くならん。衆生及び壽命色力威樂減じ、人天の樂を遠離して皆悉く惡道に墮せん。是の如き不善業の惡王と惡比丘と、我が正法を毀壞して天人の道を損減せん。諸天善神王の衆生を悲愍せん者も此の濁惡の國を棄て皆悉く餘方に向はん。

○大集經 委しくいへば大方等大集經といふので、六十卷あります。大方等とは即ち大乘の教へのごとであります。十方の佛菩薩等を多く集めて説かれたものでありますから、大集といふ名がつけられてあるのであります。○隱沒せば 世に佛教が行はれなくなつたことであり、また○鬚髮爪皆長く 僧侶の姿の亂れた有様であります。姿の亂れたのは即ち其の信仰の無くなつたことを證するものと見るべきであります。○水上輪の如く 地上の凡ての物が水車のやうに動くといふのであります。○華葉 花瓣のことを申すのであります。○淨居天 色界の上

の方にある所であります。吾々人類や其の他の動物のやうに、肉體があり又種々の欲望のあるものが住んで居る所を欲界といひ、肉體はあつても一切の欲望のない者の住んで居る所を色界といふのであります。此の色界の上の方に居るものは一切の欲望がなくなつて、其の心が極めて清淨でありますから、之を名けて淨居天といふのであります。○七味三精氣 七味とは甘草酸酢苦鹹淡をいふので、即ち一切の物の味ひであります。三精氣とは大地精氣と衆生精氣、及び正法精氣であります。大地精氣といふのは大地の草木等を養ふ力のことであり、衆生精氣といふのは吾々人類の身心の力のことであり、正法精氣とは吾々の道を求め教へを學ぶ力をいふのであります。○解脱の諸の善論 解脱とは一切の苦を脱することであり、吾の心に種々の煩惱があるので苦を生ずるのでありますから、苦を脱するためには一切の煩惱を除かなければなりません。それ故に解脱を教ゆるといふのは即ち煩惱を除くことを教ゆるのであります。解脱の善論が盡きるといふのは佛教が全く廢れ果てしまふことでもあります。○鹹鹵し敵裂し 草木の生ぜぬ荒地になつたり、或は大地が裂けて役に立たなくなることでもあります。○丘澗と成らん 或は高くなり或は低くなつて、平地がなくなつてしまふのであります。

す。○諸山は皆焦燃 水分が無くなつてしまつて、山が皆焼けた土のやうになつてしまふのであります。○四方皆亢旱 甚しい旱魃で草木等が皆枯れてしまふことでもあります。

○十不善業道 また十悪といふのでありますが第一が殺生、第二が偷盜、第三が邪淫であります。邪淫といふのは正當の夫婦以外の男女の關係を申すのであります。以上の三つが身に犯すところの悪行であります。第四は妄語で、虚偽を語ることに。第五は綺語で、人を挑發するやうなことを語ることに。第六は惡口で、人を罵詈訾非難することに。第七は兩舌で、人の中を離間するやうなことを語り散すことでもあります。此の四つが口に犯す所の罪であります。第八は貪欲。第九は瞋恚。第十は愚痴でありまして、此の三つは心に犯すところの罪であります。○貪瞋癡倍増し 以上十不善業の根本となつて居るものは貪瞋癡の三つであります。心に斯ういふ煩惱が盛んに起つて居れば身に行ふことも口にいふことも皆盡く道に背くやうになります。貪とは即ち貪欲で、自己の欲望を恣にするために如何なる方法手段をも擇まぬことでもあります。瞋とは即ち瞋恚で、自分の氣に入らぬ者を盡く敵にすることでもあります。痴とは即ち愚痴で、何事に就いても正しく分別することの出來ぬことでもあります。此の三つを三毒と申しまして、

是れが有らゆる惡行の本となるのであります。○獐鹿の如く 獐とは大きい鹿、鹿とは小さい鹿のことですが、鹿といふものは自分の勝手ばかりして居て、其の群の者を更に顧みないので、子として全く父母の爲に心を盡さぬのに喩へたのであります。○衆生及び壽命色力威樂減じ 衆生が減ずるといふのは人口が減少すること。壽命が減ずるといふのは一般に短命になること。色力が減ずるといふのは一般に體力が衰へて虚弱な者ばかり多くなることでもあります。威樂が減ずるといふのは自信力がなくなり、又人生に對する不安の念のみが多くなることでもあります。○惡道に墮せん 前にいつた地獄界とか餓鬼界とか畜生界とかに墮つるやうな惡業のみを重ねて居るのであります。○衆生を悲愍せん者 一般人民を哀愍して常に之に保護を與へて居たことでもあります。

第二に引かれたのは大集經法滅盡品の文でありまして、これも歸する所は前に引かれた金光明經の文と同じ意味であります。但し此の文の最初のところに僧侶の風儀の亂れたさまを擧げてあるのは、特に注意すべきことでもあります。僧侶たる者が髮も髯も長くなり、爪も長くなつたのを剪りもせず、亂れ果てた姿をして平氣で居るといふのは、其の心に佛の與へられたる戒律を守ら

うといふ念がないからであります。其の心が自ら其の姿に現はれるのでありますから、其の姿の亂れたのは其の心の正しからぬことを證するものであります。固より出家の人が人の目を惹くやうな、華美な姿をするのは慎むべきこととありますが、尊い佛の教へを説くには其の姿を端正にするといふ心得がなければならぬので、其の心得の足らぬ者は佛を敬ふ念のない者と申さなければならぬのであります。後世になりますと、大乘の教へを世に弘むることに力を盡すものは、戒律などを守るには及ばぬといふやうな説を爲す者もありますけれども、それは非常な誤りであります。戒律といふものは吾々の心を正しくするために、佛に依つて定められたものでありまして、梵網經には、

中に於て一々に犯すること微塵許の如くもすべからず。

と厳しく戒めてあります。其の日常の行ひが亂れて居れば自ら心が亂れて來ます。心の亂れた者が大乘の教へを弘むるなどいふ大任を果すことの出來やう筈はありません。

天台大師が法華經の弘通に最も功のあつた人であることは誰も能く知る所ではありますが、大師は特に戒律を重んぜられまして、常に其の諸弟子が戒律を厳しく守ることを奨められたのみなら

ず、梵網經の註釋を作つて後世に遺されました。其の中に、

若し戒を受けざる者をば有識と名けず。畜生と異ること無く、常に三寶の海を離る。菩薩にあらずして是れ邪見外道なり。

といふ語もあります。日蓮聖人が律宗の者を排斥して之を『國賊』とまで仰せられましたのは、彼等がたゞ形式的に戒を守つて居るだけで、少しも慈悲の念がなく、心と形と全く相背いて居るのを排斥されたのでありまして、戒を破つても宜いといふ御趣意ではないのであります。此處に誤解があつてはなりません。口に佛の大慈悲を説きながら、心に佛の戒を守らうといふ念のないのは、世を欺き人を欺くもので、實に大なる罪を犯して居るものと申さなければならぬのであります。

又佛の正法の廢れた國の有様を説かれてある中に『衆生父母に於て之を觀ること獐鹿の如くならん』とありますが、まことに孝道の廢れたのは、其の國の亂れはつる本であります。親子の關係が凡ての人倫關係の本でありますから、子として其の親を重んぜぬやうな者が、其の國の爲に力を盡すことの出來やう筈はありません。されば多くの經典の中に孝の重んずべきことが繰返し

て教へられてあるので、例へば忍辱經の中には、善の極は孝より大なるは無く、惡の極は不孝なり。

とあり、雜寶藏經の中には、但だ今日慈孝を讚歎するのみにあらず、無量劫に於て常に亦讚歎す。

とあります。また末羅末經には、地より珍寶を積みて上二十八天に至り、悉く以て人に施すとも、父母に供養するには如かず。

とまで説かれてあります。儒教の方でも『忠臣を求むるには孝子の門に於てす』と教へられて居ますが、實際孝子であつて初めて一切の善行を果すことが出来るものと考へらるべきであります。

仁王經に云く、國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るゝが故に萬民亂る。賊來りて國を劫し百姓亡喪し、臣君太子王子百官共に是非を生じ、天地怪異し二十八

宿星道日月、時を失ひ度を失ひ、多く賊の起ること有らん。

亦云く、我今五眼をもて明かに三世を見るに、一切の國王は皆過去の世に五百の佛に侍へしに由りて帝王主と爲ることを得たり。是を爲て一切の聖人羅漢而も爲に彼の國土の中に來生して大利益を作さん。若し王の福盡きん時は一切の聖人皆爲て捨去せん。若し一切の聖人去る時は七難必ず起らん。

○仁王經 委しくいへば仁王般若波羅蜜經といふので、二卷あります。仁王といふのは仁政を行ふ王のこと。般若波羅蜜といふのは正しい智慧のことです。善い王は佛教を學ぶことに依つて正しい智慧を具へて、其の國に仁政を行ふのであります。此の經にも前に引かれた金光明經と同じやうに、佛教の行はれて居る國は必ず永く榮え、佛教の廢れた國には種々の災難の起ることが説かれてあります。○鬼神亂る 其の國を守護する所の鬼神の心が亂れて惡魔のやうになり、却つて國に害をなすやうになるのであります。○賊來りて 外國の兵が襲來することを申すのであります。○是非を生じ 其の意見が一致しないで相争ふことであり

ます。斯うなれば其の國の政治に統一が失はれて來るのは申すまでもありません。○二十八宿宿といふのは星座のことで、東西南北の四方に主要な星座が七つ宛ありまして、併せて二十八になるのであります。○時を失ひ度を失ひ 星の運行が狂ふことでもあります。星の運行は時節に依つて定まつて居るのが、狂つて其の時節に合はぬやうになるのであります。○賊の起ること 内亂が起ることを申すのであります。

○五眼をもて 五眼といふのは一に肉眼、これは凡ての人の皆もつて居る眼であります。二には天眼、これは普通の人に見えぬことまでも見極めるところの力を申します。三には慧眼、これは世間の迷ひを離れて眞實の道を見定めるところの力を申します。四には法眼、これは一切衆生を救ふべき道を見定めるところの力を申します。五には佛眼、以上の力を盡く具へられたる佛の御心のことであります。佛眼を以て御覽になれば何事でも明かにならぬものはありません。○羅漢 阿羅漢といふのを略したので、殺賊といふ意味であります。賊とは即ち煩惱のこと、一切の煩惱を除き盡した人を羅漢といふのであります。○七難必ず起らん 此の七難の事は後に引かれた文の中に一々擧げてあります。

第三には仁王經の文が二ヶ所引かれてありますが、最初のは護國品の文、次のは受記品の文であります。最初の文の中に、正しい教への行はれぬ國に於ては其の國の王とか王子とか、百官とかいふ人々の間に争ひが起るとありますが、國內が斯ういふやうに不和であれば、外國の侵掠も必ず加はつて來る筈であります。聖徳太子が憲法の第一條に於て、
和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。

と御教へになつた通り、國の發展する根本は國民の協和一致といふことでもあります。然らば如何にして協和一致の實を擧ぐることが出来るかといへば、各自に私心を去るといふのが根本なのであります。私心といふのは即ち煩惱であります。銘々が一身の利害損得にのみ執著して居れば、協和も一致も出來ないことになります。君臣上下の一致といふことは各自に其の執著をすて、他の人の幸福を考へ、また他の人の價値を認めてやること、其の土臺となるのであります。臣としては其の君に事ふることを何より大切としなければなりません。君としては其の臣の努力の貴さを認めてやらなければなりません。國民は皆其の國のために自己を犠牲とするといふ覺悟をもたなければなりません。國家の重要な地位に居る人は常に其の國民の生活を安定せしむるや

うに力を盡さなければなりません。正しい佛教の行はれて居らぬ國では、斯ういふ覺悟をもつた人が少いものでありますから、君臣上下の間に協和を缺きまして、他國の侮りを受け、他國の侵掠を蒙るといふやうにもなるのであります。

次に帝王の地位を得るものは、前世に於て多くの善根を積んだものであるといふことが説かれてありますが、此の業報の關係といふものが徹底的に理解されなければならぬのであります。業と報との關係は即ち因果の關係でありまして、此の因果關係は少しも狂はぬものであります。而して此の報といふものに正報と依報との二種があることを知らなければなりません。

業——報
正報——身心
依報——境遇

正報といふのは自分の身と心との一切の状態を申すのであります。多くの善い事をした人は、其の報として身も健かに、心もまた健かになるので、是れが即ち正報であります。それから依報といふのは其の境遇のことでありまして、善い事をした人は其の境遇がよくなり、罪を犯し過を重ねた人は其の境遇が悪くなるものと考へなければなりません。

そこで過去に多くの善い事をした報として善い境遇に生れたものでも、その境遇の善いのに誇りを感じて其の行ひを慎しまなければ、其の報としてまた悪い境遇に落ちなければなりません。又過去に悪い行ひを續けた報として悪い境遇に生れたものでも、其の心を改めて多くの善行を積むならば、其の報として善い境遇に生れるに違ひないのであります。要するに誰でも其の心に弛みがあつてはなりません。

父不善を作すとも子代りて受けず、子不善を作すとも父また受けず。善あれば自ら福を得、惡あれば自ら殃を受く。——泥洹經

といふのは決して誤りのないことでありまして、銘々に深く戒むる所がなければならぬのであります。近頃では其の境遇に咎を負はせることが多く行はれまして、種々の罪を犯しながら『これは自分の境遇が悪かつた爲である』といふやうな辨解をする人が少くないのであります。斯ういふことでは世間の風紀の正しくなることは殆んど望まれません。互ひに悪い境遇に生れたのは過去に於ける惡業の報であるから、努めて善事を行つて過去の罪を償ひ、此の悪い境遇を脱しなければならぬといふ、最も堅實なる覺悟を定めなければならぬのであります。因果の關係は少し

も狂はぬものでありますから、互ひに信心を勵み善根を積んで、其の報の來るのを待つより外はありませぬ。此の因果の關係を無視する人は、要するに永久に救はれぬ人なのであります。

藥師經に云く、若し刹帝利灌頂王等の災難起らん時には、所謂人衆疾疫の難、他國侵逼の難、自界叛逆の難、星宿變怪の難、日月薄蝕の難、非時風雨の難、過時不雨の難あらん。

○藥師經 委しくは藥師如來本願經といふので、一卷であります。藥師如來が國を護るために十二の願を立てられたことが説いてあります。○刹帝利灌頂王等の災難 刹帝利といふのは武士階級で、此の中から王も出たものであります。又國王が即位の式を擧げる時には其の四方の國境の水を取つて來て王の頭に注ぐので、これは要するに國中の者が盡く王に歸服するといふ心を現はすのであります。これを灌頂の式と申します。それで國王のことを灌頂王と申すのであります。此の國王と武士とが力を協せて守護して行く國に正しい教へが廢れてしまへば種々の災難が起るのであります。○人數疾疫の難 疫病に罹る人が多く出るのであります。○他

國侵逼の難 他國の軍隊に襲はれて土地を多く取られることであります。○自界叛逆の難 國內に謀叛を起すものが出ることです。○星宿變怪の難 星の運行がくるふことであります。○日月薄蝕の難 日月の光りが薄くなつたり、或は日蝕や月蝕の起ることです。○非時風雨の難 風雨があまり度に過ぎることです。風雨も適度であれば動植物の生活に缺くべからざるものであります。その度に過ぎれば大なる害を爲します。○過時不雨の難 雨量が足りなくて旱魃の續くことであります。以上を藥師經の七難といふのであります。此の立正安國論の書かれる前までに其の中の五つが既に現はれて、内亂と外敵とがまだ現はれなかつたのであります。

次に引かれたのは藥師經の文であります。此の藥師經といふのは僅かに一卷で、至て簡単な經であります。傳教大師は叡山に於ける根本中堂の本尊として藥師如來の尊像を安置せられ、其の後に於ても藥師如來の信仰は吾が國に普及して居りますから、『藥師』といふことの意義を簡単に説明して置きたいと思ひます。藥師とは一切の重病を醫すべき良藥を與ふる者といふことであります。それは要するに一切衆生の心の迷ひを除くべき教へを與へられたのに譬へたのであり

ます。身體の健全な者には藥の要はありませぬ。また重い病に罹つて死んでしまつた者は、藥を服しても何の役にも立ちませぬ。然るに重い病に罹つて未だ死なぬものは良い藥を得れば助かりし、良い藥を得なければ死ぬより外はないのでありますから、良藥が何よりも大切なのであります。吾々と佛教との關係も亦その通りであります。吾々の心に何の迷ひもなければ教へを求めるとは及びませぬ。又吾々の心が煩惱のみで充されて居るならば、如何なる教へでも到底效き目のあらう筈はありませぬ。然るに吾々の心の中には種々の煩惱が群り起つて居りますけれども、また貴い佛性といふものも全く亡び盡したわけではありませぬ。それ故に良い教へを求むる必要があるのであります。

要するに吾々は精神的の病者でありまして、良い教へが與へられさへすれば心身共に健全になりますし、良い教へが與へられなければ決して心の悩みは除かれぬのであります。それで此の精神的の良藥を與ふることを念願とせられたのが藥師如來でありまして、藥師如來の十二誓願といふのは、一切衆生を救ふに就いて特に心を用ゐらるゝ點を十二に分けて説かれたものであります。吾々が藥師如來を崇めるといふことは、良い教へを學んで精神的の重病を除きたいといふ趣

意に外ならぬのであります。釋尊の説かれた一切の教への中で法華經は最高至上のものでありますから、法華經の藥王品に、

病に醫を得たるが如く、暗に燈を得たるが如し。

と申してあるのであります。吾々は良藥を服用するやうに此の尊い教へを信じて、心の病を根本的に除かなければなりません。

仁王經に云く、大王、吾が今化する所は百億の須彌、百億の日月あり。一々の須彌に四天下有り。其の南閻浮提に十六の大國、五百の中國、十千の小國有り。其の國土の中に七の畏る可き難有らん。一切の國王是を難と爲すが故に。云何なるをか難と爲す。日月度を失ひ、時節返逆し、或は赤日出で黒日出で、二三四五の日出で、或は日輪一重二三四五重輪に現ざるを一の難と爲すなり。二十八宿度を失ひ、金星彗星輪星鬼星火星水星風星刁星、南斗北斗五鎮の大星、一切の國主星三公星、百官星、是の如き諸星各々に變現するを二の難と爲すなり。大火國を燒き萬姓燒け盡さ、

或は鬼火龍火天火、山神火人火樹木火賊火、是の如く變怪するを三の難と爲すなり。大水百姓を漂没し、時節返逆し冬雨ふり夏雪ふり、冬の時に雷電霹靂し、六月氷霜雹を雨し、赤水黒水青水を雨し、土山石山を雨し、砂礫石を雨し、江河逆に流れ山を浮べ石を流す。是の如く變ずる時を四の難と爲すなり。大風萬姓を吹殺し、國土山河樹木一時に滅没せん。非時の大風黒風赤風青風天風地風火風水風、是の如く變ずるを五の難と爲すなり。天地國土亢陽し、炎火洞然として百草亢旱し五穀も登らず、土地赫然として萬姓滅盡せん。是の如く變ずる時を六の難と爲すなり。四方の賊來りて國を侵し内外の賊起らん。火賊水賊風賊鬼賊ありて百姓荒亂し、刀兵劫起らん。是の如く怪する時を七の難と爲すなり。

○大王 舍衛國の王たる波斯匿王に對して釋尊の御告げになつた言葉であります。○吾が今化する所 吾といふのは即ち釋尊のことで、釋尊の御教化を受けるところは非常に廣いものであ

ります。○百億の須彌、百億の日月 佛の御教化を受ける所の全體は三千大千世界であると申すことでもあります。先づ中央に須彌山といふ山があつて其の四方に四つの洲があり、洲の間は海でありまして、その外を鐵圍山といふ山が取り巻いて居ます。これが一つの世界であります。斯ういふ世界が千集つたのを小千世界といひます。此の小千世界が千集つたのが大千世界。中千世界がまた千集つたのが大千世界であります。此の大千世界は千を三乗したものでありますから、之を三千大千世界と申すのであります。これだけの世界が一佛の御教化を受けるところであるといふことでもあります。四天下といふのは即ち須彌山のまはりにある四洲のことでありまして、その南方にある洲を南閻浮提といふのであります。○南閻浮提に十六の大國閻浮提といふのは大きな樹の名であります。須彌山の南方の洲には此の樹が多く茂つて居るといふので南閻浮提と名けられてあります。吾々の今住んで居ますのは此の洲でありますから、一閻浮提といへば全世界といふ意味になるのであります。此の南閻浮提にある大小幾多の國の数がこゝに擧げられて居るのであります。○七の畏るべき難 佛教が行はれないで人の心が邪まになると七つの難が起つて來るのであります。○時節返逆し 冬になつて暑かつたり、

夏になつて寒かつたりするやうなことであります。○五鎮の大星 火水木金土の五大星のうちで、土星が其の中央にあつて他の星を支配して居るやうに見えるので之を五鎮の星といふのであります。○天地國土亢陽し 陽が過ぎるといふのは早魃が続いて全く雨の降らぬことであります。○萬姓滅盡せん 凡ての生命のあるものゝことを萬姓といふのであります。○内外の賊 外國から攻められて國內が騒動して居るのに乗じて内亂を起すものも現はれて來るのであります。○刀兵劫 劫といふのは非常に長い歲月のことでありますが、平和の歲月が長く續けば必ず亂れて來るので、其の中で戦争が起つて世界中の亂となるのを刀兵劫といふのであります。

此に至つて所謂七難が説かれて居るのでありますが、釋尊は其の教化を與へらるべき有らゆる國に於て、其の國民の心得が間違つて居れば、此等の種々の難が必ず起つて來ると仰せられたのであります。要するに佛が如何に吾々を救つて下さる御精神であつても、吾々の誠心が足りなければ救はれぬのであります。法華經の壽量品に、良醫が其の子の毒に中つたのを救ふために非常に良い藥を調劑して之に與へたといふことがあります、其の時の良醫の言葉には、

是の好き良藥を今留めて此に在く。汝等取つて服す可し。差えずと憂ふること勿れ。

とあります。良藥は父の調劑したものであるが、其の子は之を取つて自ら之を飲まなければならぬので、如何に良藥があつても之を飲まなければ其の病を除くことは出來ませぬ。何よりも大切なのは堅固なる信心であります。

日蓮聖人が松野殿といふ信者に與へられた御書の中に、堅固なる信心を持ち續けなければならぬといふことを説かれて、

魚の子は多けれども魚となるは少く、菴羅樹の花は多くさけども葉になるは少し。人もまた此の如し。菩提心を發す人は多けれども、退せずして實の道に入る人は少し。都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたばらかされ、事にふれて移りやすきものなり。

と仰せられました。良い教へを聞いた時には、必ず之を實行しようといふ念を起しますけれども、世間の種々様な出來事に出逢ふと、忽ち心が之に惹かれて、切角起した信仰が忽ちにして弛んでしまふのであります。其の信仰を貫くことが出來なければ、最初から信仰心を起さぬのと同じことでもあります。されば佛遺教經の中に之を戒められて、

若し行者の心、數々懈り廢すれば、譬へば火を鑽りて未だ熟せずして息むが如し。火を得んと欲すと雖も火を得べきこと難し。

とあります。何事でも中途で止めては何の役にも立ちませぬが、信心に於ては殊にさうであります。懈怠といふことはお互ひに特に戒めなければならぬ事であります。

大集經に云く、若し國王有りて無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば、是の如く種ゆる所の無量の善根も悉く皆滅失して、其の國に當に三不祥の事有るべし。一には殺責、二には兵革、三には疫病なり。一切の善神も悉く之を捨離せん。其の王教令すれども人隨從せず、常に隣國の爲に侵焼せられん。暴火横に起りて惡風雨多く、暴水増長して人民を吹漂し、内外の親戚其れ共に謀叛せん。其の王久しからずして當に重病に遇ふべし。壽終るの後は大地獄の中に生ぜん。乃至、王の如く夫人太子大臣城主村主、將帥郡守宰官も

亦復是の如くならん。

夫れ四經の文明かなり、萬人誰か疑はん。而るに盲瞽の人妄りに邪説を信じて正教を辨へず。故に天下世上諸佛衆經に於て捨離の人を生じて擁護の志無し。仍て善神聖人國を捨て所を去る。是を以て惡鬼外道災を成し難を致す。

○施戒慧を修すとも 菩薩として必ず實行しなければならぬことが六つあつて、之を六度といふのでありますが、その中の最も大切なものが此の三つであります。施とは即ち布施で、恩を與へ恵みを施すことを一切いふのであります。戒とは即ち持戒で、佛の定められたる戒を能く守つて違はぬことであります。慧とは即ち智慧で、佛の教へに基いて智慧を磨くことであります。此等の修行を常に勵んで怠らぬものを菩薩と稱せらるるのであります。○穀貴 飢饉で米の價が非常に貴くなることであります。○兵革 其の國に内亂の起ることでもあります。○侵燒 せられん 燒とは惱まざるゝことで、外兵の侵入に依つて國民が皆惱まざるゝのであります。○内外の親戚 父方の親戚を内といひ、母方の親戚を外といふのであります。○宰官 宮中の

事務を執る役人のことであります。

○四經の文 以上に引用したところの金光明經、大集經、仁王經、藥師經の文を見ると國に正しい教への行はれぬ時には必ず種々の災難が起るといふのは疑ひのない事であります。○盲瞽の人 教への正邪を見分ける力のない人のことでもあります。○天下世上 世間一般の人のことでもあります。上に立つ人が教への正邪を見分ける力がないと、世間一般の人も佛を重んじた

り、大乘の經典を尊んだりする心が無くなつてしまふのは當然の事でもあります。○惡鬼外道 本來は佛教以外の教へを皆外道といふのでありますが、その意味が轉じて、佛教の敵となつて居る惡魔のやうな者を盡く外道と呼ぶやうになつたのであります。

また重ねて大集經の文が引いてあるので、正法の廢れた國に起るべき災難の數々が漏るゝ所なく示されてあります。此處で特に注意しなければならぬのは、國王の心の用ゐ方が足らぬと、夫人太子以下諸臣が盡く道を失ふやうになるといふことであります。實際多くの人の上に立つ者は、其の責任の極めて重大であることを常によく考へて居なければなりません。人の上に立つのは下の人に對して誇るためではなく、下の人を教へ導くためでありますから、自分の地位が高く

なるほど、自分の責任は重くなるのであるといふことを心得なければなりません。宋の范希文といふ人の語に、

天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂に後れて樂む。

といふことがあります。多くの人の先に立つて苦勞し、多くの人が安樂になつてから自分も身を安らかにするといふことで、是れだけの覺悟がなくては人の上に立つて、之を導いて行くことの出来るものではありません。水戸の光圀公が其の邸内の庭に後樂園と名けられたのも此の語に基いたものだといふことであります。

自分の下に屬する者が多ければ多いほど、自分の責任が重くなるものと考へなければなりません。百人の上に立つ人が其の道を失へば百人が迷惑し、千人の上に立つ人が其の道を失へば千人が迷惑するわけで、自分の地位が高くなるほど責任が多くなり苦勞が多くなると思はなければなりません。仁徳天皇が三年の間一切の租税を御免除になつて、人民の生活の安らかになるやうになされたといふ事は誰もよく知る所ですが、天皇は其の御趣意を皇后に御物語りになつて、

其れ天の君を立つるは是れ百姓の爲なり。然れば則ち君は百姓を以て本と爲す。是を以て古の聖王は一人も飢え寒ゆれば顧みて身を責む。今百姓の貧しきは則ち朕が貧しきなり。百姓富めば則ち朕が富めるなり。

と仰せられたと傳へられて居ります。上に此の如き聖天子があれば、自ら其の御感化が下に及びますから、人民が皆それらの業を勵んで、國が自然と裕かになるのであります。吾々のやうな民間の者でも皆斯ういふ御事蹟を仰いで御手本として、互ひに身を以て人を率ゐるといふ心掛けでなければならぬと存じます。

客色を作して曰く、後漢の明帝は金人の夢を悟りて白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成しぬ。爾りしより來一人より下萬民に至るまで、佛像を崇め經卷を專にす。然れば則ち叡山南都園城東寺、四海一州五畿七道、佛經は星のごとく羅り堂宇は雲のごとく布けり。鷲子の族は則ち鷲頭の月を觀、鶴勒の流は亦鷄足の風を傳ふ。誰をか一代の教を編し三寶の跡を廢すと謂はんや。若

し其の證有らば委しく其の故を聞かん。

○後漢の明帝 此の王の十年に（吾が垂仁天皇の御宇）佛教が初めて支那に傳はつたのであります。○金人の夢 金色の光りを放つ人の姿を夢に見て佛教を求むる志を起し、蔡愔等の臣下を印度へ遣つたのであります。○白馬の教 蔡愔等は途中で印度から支那へ佛教を傳ふるために來た人々に出逢ひ、相伴つて歸りました。其の時に佛像や經典を白馬に乗せて歸りましたので、初めて佛像を安置するために建立した寺を白馬寺と名けました。此の時の佛像は釋尊の御像であつたのであります。○上宮太子 聖德太子の御事であります。御父の用明天皇が殊に大切になされて、宮中の上手の方の室にのみ置いてお育てになつたので上宮太子といふ御名がついたのであります。○守屋の逆 物部守屋は佛教の弘まる妨げをいたしたのみならず、竊かに謀叛を企てましたので、太子は御歳十五の時に諸將を集めて守屋を誅戮せられたのであります。○叡山 叡山には傳教大師の開かれた天台宗の延暦寺があるのであります。○南都 奈良には七大寺がありまして、六宗の教義が信奉せられて居たのであります。○園城 三井寺のこ

とであります。元來天武天皇の御時に出來た寺でありますが、智證大師が支那から歸つて暫くこゝに居られてから天台宗になりました。○東寺 桓武天皇の御時に出來た寺であります。後に至つて弘法大師に賜はりましてから眞言宗の道場となりました。○四海一洲 日本全國といふことでもあります。○鷲子の族 鷲子といふのは舍利弗のことでもあります。此の人は佛の大弟子の中で智慧第一と稱せられた人でもありますから、多くの經典を研究して智慧を磨く人々のことを鷲子の族といつたのであります。○鷲頭の月 靈鷲山の上に出た月といふことでもあります。此の山で釋尊は法華經その他を御説きになつたのでありますから、大切な經典を研究することを鷲頭の月を觀るといつたのであります。○鶴勒の流 鶴勒那といふのを略したので、これは中印度に出て大乘の教へを弘めた人でもあります。鶴勒の流といふのも智慧の勝れた僧侶のことを申したのであります。○鷄足の風 迦葉が鷄足山といふ所で入滅したので、鷄足の風とは迦葉の遺風といふことでもあります。此の人は極めて簡易質素な生活に安んずることに於て殊に模範的人として貴ばれて居りました。

此より第三段の問答に入るので、即ち客の問に依りまして日蓮聖人が佛教の盛衰といふ事の眞

の意義を御説明になるのであります。先づ客の中す所では國中に建立せられた寺の數も多く、また其の寺に住して居る僧侶の數も多ければ、佛教の盛んな時代であると考へて宜いといふのであります。これは根本から間違つた考へであります。寺といふものは正しい教へを世に弘むことが目的で建てられたものでありますから、正しい教へが弘まらなければ、寺を建てたかひは全く無いのであります。又僧といふものは世間の人を教へ導くべき任務をもつて居るのであります。若し自分の身が修まらなければ決して人を教へ導くことの出來るものではありません。人を教へ導くことの出來ぬやうな僧が如何に多く居ても、何の役にも立つものではありません。それ故に、

百の佛寺を作るは一人を活すに如かず。十方天下の人を活すは意を守ること一日なるに如かず。——罵意經

といふやうな嚴しい戒めが説かれてあるのであります。寺といふものは人を救ふためなのでありますから、人を救ふ役に立たぬやうな寺を多く建てるよりも、一人でも人を救つた方が宜いわけです。又人を救ふためには先づ自分の身を修めなければならぬのでありますから、唯だ多

くの人を救はうといつて居るよりも、自分の身を慎しんで、多くの人の手本となるだけの行ひをしなければならぬといふ意味であります。出家の人は此の戒めを片時も忘れてはなりません。

今日寺と申すのは即ち釋尊御在世の時の精舎であります。其の頃釋尊に歸依した人々が、釋尊の御教へをお説きになるために精舎を建立しましたので、例へば祇園精舎とか竹林精舎とかいふ名は今日までも傳はつて居ります。精舎には必ず講堂と僧房とがありました。講堂といふのは即ち釋尊が教へをお説きになる所で、若し釋尊の御不在の時には御弟子の中で殊に徳の高い人が、之に代つて教へを説いたのであります。僧房といふのは御弟子達の共に住んで居る所であります。之を總稱して精舎といひますのは『精心の人の集る所』といふ意味であります。精心とは一切の利害得失を離れて専ら道を求むる心を申すのであります。教へを説く人も唯だ教へを説くことより外には何の求むる所もなく、教へを聴く人も其の教へを聴くことの悦びより外に何も望むことは無いので互ひに精心を以て相對するから之を精舎と申すのであります。後世になつても寺といふものは此の精舎の心持で維持されなければならぬのであります。名利を求むる念の強い者が寺に住するのは、其の寺を汚すものと申さなければなりません。一身一家の福をのみ祈る心

で寺に詣る者も、矢張り寺を汚すものと申さなければなりません。吾々は釋尊を距ること三千年の後に生れて居りますが、釋尊の御生前に精舎に集つて親しく其の御教へを受けた弟子檀那の人々と同じやうな、清淨な心持で寺を維持して行かなければならぬので、互ひに此の事を片時も忘れぬやうにいたしたいものであります。

主人諭して曰く、佛閣薨を連ね經藏軒を並ぶ。僧は竹葦の如く侶は稻麻に似たり。崇重歳舊り尊責日に新なり。但し法師は謠曲にして人倫を迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辨ずること無し。仁王經に云く、諸の惡比丘多く名利を求め、國王太子王子の前に於て自ら破佛法の因縁、破國の因縁を説かん。其の王辨へずして其の語を信聽し、横に法制を作りて佛戒に依らざらん。是を破佛法破國の因縁と爲す。

○竹葦稻麻 此等の物は皆澤山に植え並べてあるので、僧侶の數の多いことを形容したのであります。○謠曲にして 世間の人の意を迎ふるために、正しい道理を曲げて種々の邪説を唱ふ

ることを申すのであります。○人倫を迷惑し 人倫とは多くの人といふ意であります。邪説は多くの人を惑はすものであるから恐るべきであります。○多く名利を求め 出家の人は名譽と利益とかいふものを求めてはならぬのであります。若し名利を求むることを主とする者は佛の御心にかなはぬものでありますから惡比丘といはれても致し方はありませぬ。○破佛法の因縁 佛の御心に合はぬやうな事を説けば、それが佛法を破壊する原因となるのであります。師子心中の蟲といふのはこの事でありませぬ。○破國の因縁 邪法が行はれて國民の心が皆邪曲に傾いて行けば、其の國は必ず衰へます。それ故に邪教を唱ふるものは國を破るといふ大罪を犯すものといふべきであります。○横に法制を作り 正しい道に合はぬやうな法律制度を作ることであります。法律制度が正しくなければ國民が皆多くの苦みを受けなければなりません。

此より仁王經、涅槃經、法華經等の文を引いて、如何に寺が多くて、佛教が盛んなやうに見えても、佛の正法の行はれぬ時代は佛教の衰微した時代といはなければならぬといふことを明かにされるので、最初に引かれたのが涅槃經の文であります。此の經文にあります通り、名利を求むる念の強い僧侶は必ず正しい佛教の弘通を妨げ、また國家に多くの累を及ぼすものであります。

寺といふものは世間の人の援助がなければ、僧侶だけの力で維持することの出来るものではありません。然るに寺に住する所の僧侶たる者が裕かな生活をして毎日を安樂に送りたいとか、或は世間に廣く自分の名を知られたいとかいふやうな、所謂名利の念の強い者でありますと、世間の有力者の保護と援助とを得ることにのみ熱中するやうになります。之が爲には其等の有力者の意を迎へなければなりません。それで正しい教へを説くことが出来なくなるのであります。即ち世間に迎合し阿附するために、道に反し理に背いたことをも説かなければならぬことに立到るわけです。

斯ういふ人が『如來の使』たる本分を全うすることの出来る筈はありません。前に引きました勸持品の文に、

我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ所無し。

とありますが、是れだけの自信がなくては世を導き人を教へて、僧たる所の本分を全うすることは出来ませぬ。世間の如何なる有力者でも、其の行ひに誤りがあれば嚴しく之を責めて少しの用捨もせず、之が爲に其の人の保護援助を失つても、或は其の人に迫害を加へらるゝやうなことが

あつても少しも悔まぬといふだけの覺悟があつてこそ『法師』の名を冒すことが出来るのであります。たとひ其の毎日讀誦し講説する所が佛の貴い經典であつても、私意を加へて之を勝手に曲解して、世間の人の意を迎ふることを主にするやうになれば、佛の尊い教へは實際に於て世間に絶えてしまふので、斯ういふ僧侶は『破佛法の因縁』を作るものでありまして、其の罪はまことに重いのであります。

また人の心は兎角に弛み易いものでありまして、如何に厳しく戒められても放逸に傾くことが多いのであります。然るに僧侶の中に世間の意を迎へて佛の御精神に一致せぬことのみを説く者が多くなると、世間の所謂有力者の多くは其の地位勢力に誇つて横暴な事ばかりをする。それが募れば地位も勢力もない者は堪へられなくなるから、多數を糾合して之に反抗するやうになる。斯くして國內の一致が缺けて來れば自然に國力が不足になつて他國の侮りを受け、或は他國の侵掠にあふやうにもなります。孟子のいつたことに、

天の時^{てんとき}は地の利^{ちのり}に如かず、地の利^{ちのり}は人の和^{ひと}に如かず。

とありますが、國を護るのには人の和ほど大切なものはありませぬ。然るに僧侶たる者が所謂

『破國の因縁』となるやうな邪法を説くやうでは、惡比丘といふ名を負はされても避けやうのない次第であります。

また何れの國でも法律制度等が正しく立つて居なければ安らかに治まるものではありません。されば法律制度を立つる人は國民全體の幸福と、其の國の發展とを目的としなければならぬので、華嚴經に、

人は王^{わう}を以て命^{いのち}と爲し、王^{わう}は政法^{せいほう}を以て身^みと爲す。

とあるのも此の趣意に外ならぬのであります。若し一國の重要な地位に居る人が邪法を唱ふる僧侶などに惑はされて之に保護を與ふるやうなことがあれば、之がために佛の正法が全く廢れてしまひます。又邪法を信じた爲に私心のみが強くなつて、國民の幸福をも國力の發展をも殆んど念とせず、我が儘な事ばかりを多くするやうになれば、其の國は必ず衰へます。阿闍世王は提婆達多に惑はされて種々の惡業を積み、其の國民全體が非常な苦境に陥つたのであります。後に至つて其の罪を悔ひて釋尊に歸依し、以前と引き換へて善政を行つたので其の國は著しく盛んになり、釋尊も親しく其の盛んになつた有様を御覽になつて、將來益々盛んになるであらうといふ祝

福の御言葉を御與へになりました。まことに此の仁王經に説かれた訓戒は僧俗共に謹んで服膺しなければならぬものと思はれます。

涅槃經に云く、菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無かれ。惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。惡象の爲に殺されては三趣に至らず。惡友の爲に殺さるれば必ず三趣に至る。

○涅槃經 委しくはば大般涅槃經といふので、四十卷あります。涅槃とは入滅のこと、此の經は釋尊が御入滅に先つてお説きになつたものでありますから、即ち其の最後の御説法であります。此の經は法華經の中に於て説かれたことを敷衍して説いてあるのであります。○惡知識 知識といふのは友人のことで、正しい教へに入るべき縁を與ふる者を善知識といひ、邪説を唱へて人を誤る者を惡知識といふのであります。惡友に惑はされて罪を犯し過を重ねるやうになつた例は夥しくあります。最も恐るべきものは惡友であります。○三趣 前にもありました地獄、餓鬼、畜生の三惡道のことであります。

次に引かれたのは涅槃經の光明遍照高貴德王菩薩品の文であります。實は本文その儘ではなくて、其の大意を取つたものであります。象に殺されても此の肉體が失はれるだけであるから、平生正しい信仰をもつて居さへすれば、たとひ現世の生活はそれで終りを告げても其の正しい信仰は來世まで必ず續きます。ところが惡友に誑かされて邪法を信する者は、地獄とか餓鬼道とか畜生道とかに墮つる原因となるやうな、種々の惡業を續けて行きますから、現世は勿論來世までも永く救はれぬのであります。友を擇むといふことは誰にも極めて大切な事であります。昔の墨子といふ賢人は白い絲を見て涙を流したので、側に居る人が其の理由を問ひますと墨子は『此の絲は染料次第で赤くすることも出来れば黄にすることも出来る。吾々の心も交る人次第で善くもなれば悪くもなる。交る人を擇ぶのに深く意を用ゐなければならぬことを、此の絲を見て痛切に感じた』と答へたといふことであります。

又釋尊が難陀といふ弟子を連れて魚を賣る店の前を通りかゝられた時に、『その店の前にある繩を取つて嗅いで見よ』と仰せられたので、難陀は仰せの通りに其の繩を取つて嗅ぎました。それから『其の繩はどんな匂ひがするか』と御尋ねになつたので『腥い匂ひがします』と答へますと

釋尊は『繩が以前から腥いのではない、魚を縛つたから腥くなつたのである。人も悪友と交はれば必ず心が汚れるものである。よく平生氣をつけなければならぬ』と御諭しになりました。それから次に香を賣る店の前へ來た時に『その香の袋を持つて匂ひを嗅いで見よ』と仰せられたので、難陀は其の袋を手を持つて嗅いで『まことに良い匂ひがします』と申しましたところが、釋尊は『その袋も以前から良い匂ひではなかつたが香を包んで置いたので其の匂ひが移つたのである。人も良友に交つて居れば自然と心が正しくなる。良い友を求むるやうに心掛けなければならぬ』と御諭しになりました。道に志す者は誰も交はる友を擇むことに特に意を用ゐなければならぬのであります。

法華經に云く、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に納衣にして空閑に在り、自ら眞の道を行ずと謂うて人間を輕賤する者有らん。利養に貪著するが故に白衣の爲に法を説いて、世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならん。乃至、常に大衆の中に在りて

我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣婆羅門居士及び餘の比丘衆に向ひて、誹謗して我が惡を説いて、是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂はん。濁劫惡世の中には多く諸々の恐怖有らん。惡鬼其の身に入りて我を罵詈毀辱せん。濁世の惡比丘は佛の方便隨宜所説の法を知らず、惡口して鬻聲し、數々擲出せられん。

○法華經 勸持品の偈の中の語で、所謂末法の世に於て法華經を弘むる妨げをする者のことを説いてあるのであります。○惡世の中の比丘 佛の御入滅になつてから二千年經つた後を末法の世といひます。末法とは法が廢れて無くなつてしまふ世といふ意であります。法が廢れてしまへば人の心が盡く險惡になりますから惡世ともいふのであります。此の時代になると惡比丘のみが多く出ます。○未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ 佛の御心を正しく知ることが出來ぬのみに、知り得たやうに思つて、少しも自ら反省することがないのであります。○我慢の心 慢心のみが強くて、何でも自分に都合の好いことばかりを貫かうとするのであります。○或は阿練若に 多くの僧侶の中には山寺に行ひ澄して居て世間の人の信用を得ながら、實は其の心の甚

しく邪曲なものも居るのであります。阿練若とは人里を離れた、静かな山寺のことです。○納衣にして空閑に在り 人の棄てたやうな布を綴り合せて着るのを納衣といふのでありますが、此處では唯だ質素な服装をして居ることを形容したのであります。空閑とは人もあまり居ないやうな寂しい所のことです。○人間を輕賤する 世間の多くの人を俗人だなどといつて輕んじて居るのであります。○利養に貪著する 外形は世間を離れたやうに裝うて居ながら、實は利益を求めたり名譽を求めたりする念が非常に強いのであります。○白衣の爲に 印度では一般に白い衣服を着て居ます。尤も勞働などをする者は、衣服は何でも擇みませぬから、白衣を常に着て居るといへば先づ中流以上の人であります。出家の人は白い布を田の泥などに染めて着る習はしですから染衣と申します。○六通の羅漢 天眼通とか天耳通とかいふやうな六種の通力を具へた羅漢は世間の人に非常に尊敬されて居たものであります。○乃至 此の間に十二句ばかり略してあるのであります。○我等を毀らんと 我等とは法華經を弘むる人のこととあります。彼の惡比丘等が法華經を弘むる人を罵つて、其の妨げをするのであります。○婆羅門 佛教の興る前に印度に普く行はれて居たのが婆羅門教で、此の教を弘むる人々

の中には随分學者がありました。それで此處には『學者』といふ意味に此の婆羅門といふ語を用ゐてあるのであります。○居士 民間に在つて相當の地位を占め、世間にも信用されて居る人々のこととあります。○我が惡を 法華經を弘むる人のことを惡くいふのであります。○邪見の人 佛の御心持を正しく解し得ぬ人だといつて非難するのであります。○外道の論議を説く 佛教以外の邪説を弘むるものだといつて非難するのであります。佛の眞實の教たる法華經を弘むる人を斯ういつて非難するのは實に顛倒も甚しいものと申さなければなりません。○濁劫 世が末になつて、人の心の濁り果てた時代のこととあります。○諸の恐怖 正しい人が種々様々の迫害を受けることを申すのであります。○惡鬼其の身に入りて 彼の惡比丘等の心に惡魔が宿つて居て、正しい人に迫害を與へさせるものと見なければならぬのであります。○佛の方便隨宜所説の法を知らず 法華經を説かれる前に佛の説かれたのは皆方便の教へであります。それは皆聽く人の性質を能く見て之に適するやうに、宜しきに應じて説かれたものであります。それ故に法華經が弘まる時になれば、其等の教へは皆廢れてしまふのが當然なのであります。此の事を知らないで、法華經を弘むる人の妨げをするのは、全く間違つたこととありま

す。○惡口して鞞磴し 鞞磴とは顔に皺を寄せて之を憎み嫌ふ意を表はすのでありますが、彼の惡比丘等が法華經を弘むる人に對して、言語にも容貌にも憎惡の意を現はすのであります。

○數々擯出せられん 法華經を弘むる人を追ひ拂ふために世間の有力者の助力を求めて、或は流罪等に處分させることが一度ならず、二度も三度もあるのであります。

次に引かれたのは法華經勸持品の偈の中の文でありますが、此の勸持品には末法の世に出て法華經を弘むる者には三種の敵が出来るといふことが説かれてあります。其の第一は『俗衆増上慢』と稱せらるゝものであります。これは在家の人で法華經以外の經を信じて居るのですが、斯ういふ人達が法華經を弘むる人を憎んで、之に種々の迫害を加へるのであります。其の第二は『道門増上慢』と稱せらるゝものであります。これは僧侶で法華經以外の經を奉じて居るのですが、斯ういふ人達が法華經を弘むる人を敵として、之に種々の迫害を加へるのであります。其の第三は『僭聖増上慢』と稱せらるゝものであります。これは同じ僧侶の中でも世間を離れた山寺などに居て、表面は淨らかに行ひ澄まして居るので、非常に徳の高い人のやうに思はれて、所謂有力者の信用を得て居るのであります。此等の者は清淨な行ひをして居るやうに外面をつゝるつ

て、實は名利を求むる念が強いので之を僭聖といふのであります。僭聖とは聖人のやうに外面を装うて居るといふことであります。斯ういふ者が世間の有力者と結托し、其の力を假りて法華經を弘むる者に迫害を加へるのであります。

此の三種の敵の中で、此處には第一の『俗衆増上慢』の部分を略して、第二と第三のとだけが引かれて居ます。『惡世の中の比丘』といふ所から『我慢の心充滿せん』といふ所までは、第二の『道門増上慢』のことで、『或は阿練若に』といふより以下は第三の『僭聖増上慢』の者共のことです。此の第三の者は最も邪智が深く、表面に淨らかな身持ちを装うて世間の信用を博し、世間の有力者の援助を得て法華經を弘むる人に種々の迫害を加へるので、これが三種の中で最も恐るべき敵であります。それで唐の妙樂大師は『第三最も甚し』と申されました。日蓮聖人は此の勸持品の中に擧げてある迫害を盡く體驗せられたので愈々以て『自分は此の法華經を弘むるために佛に依つて此の世に送られたものである』といふ自覺を強められたと申すことであります。石や瓦を打ちつけらるゝことは鎌倉の小町の辻で幾度となく經驗されました。小松原で東條景信に襲撃されたのは『刀杖を加へらるゝ』といふのに正しく當ります。又諸宗の僧等に讒言せ

られたのは『國王大臣娑婆門居士等に向つて誹謗せらるゝ』といふのに正しく當ります。それから伊豆へ流され、また佐渡へ流さるゝといふやうに配流の處分が二度も重なつたのは『數々擯出せられ』といふのに正しく當ります。是れほどに經文の一々が皆よく當つたので、聖人の『法華經の流布に魁する者』といふ御自信は愈々強まるのみであつたのであります。後に佐渡で御書きになつた御消息の中に、

恐らくは天台傳教も法華經の故に日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし。彼は只惡口怨嫉ばかりなり。是は兩度の御勘氣、遠國に流罪せられ、龍口の頸の座、頭の疵等、其外惡口せられ、弟子等を流罪せられ、籠に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出されし、是等の大難には龍樹天台傳教も争でか及び給ふべき。されば如說修行の法華經の行者には三類の強敵打定んで有る可しと知り給へ。——如說修行鈔

とあるのは即ち其の御自信を語られたる、御心の底から出た聲であります。

如說修行といふのは佛の仰せられた通りの修行をするとの意であります。末法の世に出て法華經を弘める爲に此等の數々の大難にあひ、而も少しも之に屈せずして益々法華經の弘通に力を盡

すといふのが即ち眞の如說修行でありまして、聖人は經文の一字一句を皆御一身に實現して居らるゝのであります。聖人は斯る艱苦を冒しながら、其の御努力が決して空に歸することなく、必ず此の法華經の廣宣流布すべき時が到來するといふ確信を持つて居られたので、後に身延で書かれた報恩鈔に、

根深ければ枝しげし、源遠ければ流長し。……日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流るべし。

と斷言せられたのであります。法華經の弘まる時の來ないうちは、如何に日本國中に多くの寺があつても、又いかに僧侶が世間で重んぜられて居ても、佛教の衰微して居る時代と申さなければならぬのであります。

涅槃經に云く、我が涅槃の後無量百歲に、四道の聖人も悉く復涅槃せん。正法滅して後像法の中に於て當に比丘有るべし。持律に似像し少かに經を讀誦し、飲食を貪り嗜みて其の身を長養し、袈裟を着すと雖も猶ほ獵師の細視徐行するが如く、

猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん、我は羅漢を得たりと。外には賢善を現じ内には貪嫉を懐かん。啞法を受くる婆羅門等の如く、實は沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。

文に就て世を見るに誠に以て然なり。惡侶を誡めずんば豈に善事を成さんや。

○無量百歳 百年を幾つも重ねたといふことで、即ち前に申しましたやうに、佛滅より二千年を過ぎての後のことであります。○四道の聖人 凡夫の境界を離れたものを皆聖人といふのであります。小乗の教へを學んで聖人といはれるやうになつた者に四種あります。先づ最初のもは須陀洹といふので、これは『入流』といふ意味であります。先づ佛教を學んで世間を離れた者の仲間入りが出来たといふ程度なのであります。それより上は斯陀含といふので、これは『一來』といふ意味であります。折角世間を離れたけれども、時としては世間の生活に戻りさうな恐れがまだあるのであります。それより上は阿那含といふので、これは『不來』といふ意味であります。モウ以前の凡夫の境界に戻ることは決して無いといふ見込みのついた者であ

ります。その上は阿羅漢で、心の底からスツカリ煩惱がなくなつた者ですから、小乗を學んだ中の最上の地位であります。○正法滅して後像法の中に 佛の御説きになつた所が能く守られ、能く實行されて居る時代を名けて正法の世といふので、これは佛の御入滅後凡そ千年間であり、それから後になりますと、佛敎の教義だけは傳はつて居ても、之を實行する人がなくなり、之を像法の世といひますが、像とは形といふことで、佛敎の形だけが残つて居るといふ意味であります。此の像法の世がまた千年續いて、それから末法の世に入るのであります。此の末法の世に入つてから法華經が弘まれば、世の中が又立て直るといふことが釋尊に依つて豫言されてあるのであります。○持律に似像し 持律といふのは佛の御定めになつた戒律を堅固に守ることであり、似像といふのは形だけは戒律を守つて居るやうに裝うて居るのであります。心の底には煩惱が充ち満ちて居るのであります。○少かに經を讀誦し 口先だけで毎日經を讀んで居るけれども、心では少しも信じて居ないのであります。○其の身を長養し 實は一身の安樂といふことのみを謀つて居るのであります。○袈裟を着すと雖も 袈裟を名けて忍辱衣と申します。出家の人が袈裟を着して居るのは一切の困苦を忍び、世間の人を

救ふために力を盡すといふことを形に現はすものであります。袈裟を着けて居ながら自分の一身を安らかにすることばかり考へて居るのは、世間を欺いて居るものと申さなければなりません。○獵師の細視徐行するが如く、細視といふのは氣をつけて四邊の様子を伺ひながら歩くこと。徐行といふのは足音を忍ばせて行くことで、これは獵師が獲物を覘つて居る時のさまであります。僧侶が自分の後援者として世間の有力な人を一人でも多く得たいと思つて、竊かに種類の計畫をして居るのは此の獵師の通りであります。○猫の鼠を向ふが如し、これも自分の後援者を得ることを計畫して居るさまを形容してあるのであります。斯ういふ僧侶が世間の有力な人に近づくのは、之を教へて正しい信仰に入れるためではなく、唯だ其の人の助力を得て自分の利益を圖るためなのであります。○常に是の言を唱へん、世間の有力者の信用を得るために自分は一切の煩惱を離れた者であるといつて吹聴して居るのであります。○外には賢善を現じ、悟つた人のやうな様子をして世間の人を欺いて居るのであります。○内には貪嫉を懐かん心の中では名譽とか利益とかいふものばかりを求めて居るのであります。又他の僧侶が有力者の歸依を得たことを聞くと、之に對して嫉妬心を起して其の妨げをすることに頻りに工夫を凝すのであります。○啞法を受くる婆羅門等、啞法とは所謂無言の行で、婆羅門の修行の一つであります。何もいはないから心に何の苦悶もないのかと思ふと決してさうではなく、強いて其の苦悶を靜めるために無言の行をして居たものが多かつたさうであります。○實は沙門に非ずして、出家の人を沙門と申しますが、沙門といふのは『勤息』といふ意味であります。勤とは勤めて法を求むること。息とは煩惱を除くことであります。法を求むる熱心もなく、唯だ名利を求むる煩惱のみが多くては沙門といふ名を冒すことは出来ない筈であります。次には涅槃經如來性品の文が引かれてあるのであります。此の文は末世に於ける僧侶の生活の淺ましい有様を、まことに活けるが如くに描き出してあります。『飲食を貪り嗜みて其の身を長養し』とあります通り、末世になりますと一生を安樂に過すことを目的にして出家する者が多くなるので、これは實に佛に對して相濟まぬ次第と申さなければなりません。苟くも出家する者は法師となる覺悟でなければならぬので、法師とは佛の正法を弘めて、世を導き人を教ゆることを任務とするものであります。既に頭を剃り袈裟を着ながら、法師たる所の覺悟もなく、唯だ安穩に毎日を送つて衣食に不自由をせぬのを目的とするのは己を欺き又人を欺くもので、まことに大

立正安國論

なる罪を犯すところの所行と申すべきであります。傳教大師の御作りになつた『山家學生式』といふものの中には其の御弟子を養成せらるゝ方針を説かれてありますが、その中に、

國寶とは何物ぞ。寶とは道心なり。道心有るの人を名けて國寶と爲す。……乃ち道心有るの佛子を西には菩薩と稱し、東には君子と號す。惡事を己に向へ好事を他に與へ、己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり。

とあります。道心とは佛の説かれた道を必ず實行して、世のため人のために力を盡さういふ決心であります。道心のある人ならば、己を忘れて他を利するといふことが必ず出來ます。此の決心がつかなくては出家したかひは無いわけであります。

此の道心がなくて名利の念のみ強い者は、出家とは名ばかりで、どうしたら華やかな生活が出來やうか、どうしたら自分の寺が繁昌するであらうか、どうしたら自分の名聲が高くなるであらうかといふ事のみをいつも考へて、有力な後援者を求むることにのみ汲々として居ます。それは獵師が獲物を探したり、猫が鼠を窺つたりするのと少しも變らぬ態度で、實に淺ましいものであります。随つて嫉妬の念のみが強くなり自分よりも勢力のある僧侶が他にあると、其の人を陥れ

て其の勢力を奪ふために、出來るだけの手段を講ずるので、口には煩惱を離れることを説いて居ながら、其の心は煩惱のみで充されて居るのであります。斯ういふ僧侶の間に見苦しい争ひの演じられた例は決して少くありません。例へば叡山の延曆寺と近江の三井寺とは共に天台宗で、而も本末の關係になつて居るのでありますから、互ひに相扶けて法華經の弘通に努むべき筈であります。然るに此の兩寺は互ひに勢力を争つて隣敵のやうになり、互ひに兵を蓄へて戦ひあふといふまでになりました。僧侶たる者が斯ういふことでは、正しい佛敎が世間に滅びてしまふのも更に不思議な事ではありません。

併し吾が國ばかりで無く、印度でも昔から斯ういふ淺ましい僧侶が多く出たものと見えて、龍樹菩薩の著はされた大智度論の中には四種の僧が區別してあります。

其の一は啞羊僧。其の二は無羞僧。その三は有羞僧。其の四は眞實僧。

であります。第一の啞羊僧といふのは羊がたゞ草を食つて其の身を養つて居るやうに、たゞ一身の安全のみを圖つて、法を弘むるために少しも力を盡さず、全く無意味に一生を送る所の僧であります。第二の無羞僧といふのは名利の欲を果すために出來るだけの手段方法を講じて、少しも

それを恥ぢぬ僧であります。第三の有羞僧といふのは名利に囚はるゝのは恥かしいといふことを知つて、日々の行ひを慎しんでは居るけれども、法を弘むるために努力するといふだけの奮發心のない僧であります。第四の眞實僧といふのは佛の正法を弘むるために全く一身を犠牲として努力して居る僧で、斯ういふ人ばかりが眞に佛弟子と稱せらるべきものであります。此の龍樹菩薩は釋尊の御入滅後七百年の頃に中印度に出た人でありますが、その頃既に種々の弊害があつたものと見えて、此の四種の僧を説いて嚴しい訓戒を與へて居ます。何れの時代、何れの國でも僧たる者は常に深く自ら戒しめて、其の僧たる所の本分を全うするやうに努めなければならぬ筈であります。

客猶ほ憤りて曰く、明王は天地に因りて化を成し、聖人は理非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の歸する所なり。惡侶に於ては明王信ず可からず。聖人に非ずんば賢哲も仰ぐ可からず。今賢聖の尊重するを以て則ち龍象の輕からざるを知る。何ぞ妄言を吐て強ちに誹謗を成す。誰人を以てか惡比丘と謂ふや。委細に聞か

んと欲す。

○天地に依りて化を成し 天地の理に基いて世の中を治むるのであります。斯ういふやうな明君が歸依する僧侶は、必ず立派に學徳の具はつた人でなければならぬと思はれるのであります。○賢哲も仰ぐ可からず 世間で賢人とか哲人とかいはれて居る人が歸依するのは、必ず立派な僧侶でなければならぬといふのであります。○龍象 立派な僧侶のことをいふのであります。空を翔るものゝ中では龍が最も不思議な働きをするものであるし、地を歩く獸の中では象が最も力の強いものでありますから、佛の教へを世に弘むるのに殊に力のある人を龍象に比するのであります。

此より第四段の問答に入りまして、日蓮聖人は客の問に答へて法然上人の選擇集に嚴正なる批判を加へらるゝことになるのであります。凡て誤つたる信仰をもつて居る者に對して、其の誤りを指摘して之に反省を促し、之を正しい信仰に導き入るゝやうに力を盡すのを折伏といふので、聖人は四宗に對して折伏を加へられました。其の四宗といふのは念佛宗と禪宗と眞言宗と律宗とであります。吾が國に佛敎が傳はつて以來日蓮聖人の出られた頃までに、十宗の教義が世間に弘

まつて居たことは前に申す通りであります。其の中で實際宗教として多くの人の心を支配する力のあつたのは以上の四宗でありましたから、聖人は此の四宗に對して折伏を加へられました。法然上人に對して批判を加へらるゝのも其の折伏の一であります。何故折伏を加へなければならなかつたのか。其の理由を明かにして置かなければならぬと存じます。

聖人は當時に勢力のあつた四宗を挫いて、自分の勢力を張らうといふやうなお考へで折伏をされたではありません。其の折伏は全く普く世間の人を救はうといふ大慈悲心に出たものであります。聖人は法華經の力に依らなければ末法の世は救はれぬといふ確信をもつて居られたのです。此の法華經の弘通に妨げとなるものは、先づ之を取り除くために力を盡さなければならぬので、其の妨げが除かれなければ法華經の弘まるべき道は開かれませぬ。而して當時に於て法華經弘通の道を塞いで居たものが即ち四宗でありました。先づ念佛宗（即ち淨土宗）に於ては、末法の世に入つては大乗の經典などを研究して安心が得らるゝものではない。萬事を思ひ捨て、専ら阿彌陀佛を頼む者のみが救はるゝのであると説くのであります。されば此の宗は法華經の弘まるべき道を塞いで居るものと申さなければなりません。次に禪宗に於ては教外別傳といふことを主

張するのであります。佛と成る道は經典などの中に示されて居るものではない。經典などを離れて直接に佛の御心を悟らなければならぬといふのであります。されば此の宗も法華經の弘通を妨ぐるものと申さなければなりません。次に眞言宗に於ては釋尊のお説きになつた教へを一切力のない者と斷定し、大日如來の説かれた教へを信じなければ救はれぬといふことを主張するのであります。されば此の宗も法華經弘通の道を塞いで居るものと申すべきであります。また律宗の主張する所では、末法の世の人には大乗の經典に説き示されたる深遠な教義などを信解すべき力はない。それ故に専ら佛の御定めになつた戒律を守つて、日常の行ひに過失のないやうに努むるより外はないといふのであります。されば此の宗も亦法華經の弘通を妨ぐるものと申さなければならぬのであります。

斯ういふわけでありますから日蓮聖人が四宗を敵とせられたのではなく、四宗が法華經を敵として居るのであります。此の敵を撃退することは法華經弘通の任に當る者の身に負うたる、當然の務めであります。『法華折伏破權門理』といふことを天台大師も仰せられました。法華經を弘むる者は權門、即ち方便の經を弘むる者に折伏を加へなければならぬので、折伏をしなければ法

華經は決して弘まらぬのであります。日蓮聖人が四宗に折伏を加へられましたのは四宗を信ずる者を排斥しようといふのではなく、四宗を信じて居る者をして、盡く法華經を信ぜしめて、盡く佛の大慈悲に浴せしめようといふ御趣意なのであります。少しも彼等を憎むのではなく、彼等が佛の御本意を明かに辨へぬのを見て深く之を哀愍せられ、いかにもして彼等の蒙を啓いてやりたといふ御心で、之に折伏を加へらるゝのであります。それは稚い兒が毒な物を食べようとするのを、其の母親が叱つて止めるのと同じ心持なので、其の訓戒の厳しいのは即ち其の慈愛の深いことを現はして居るのであります。

さて此の四宗の中で殊に勢力のあつたのが淨土宗でありまして、前にも申しました通り、當時は各宗の人が皆之に倣つて阿彌陀佛の名號を唱ふるといふやうな有様でありました。それで日蓮聖人は先づ第一に此の淨土宗に對して折伏を加へられたのであります。聖人は釋尊が末法の世の者を救ふために此の法華經を説き遺されたる御恩に深く感激されまして、此の御恩に報ずるためには如何なる困苦を冒すことも敢て辭せぬといふ御覺悟で、開目鈔の中には、

三佛の未來に法華經を弘めて未來の一切の佛子に與へんと思しめす御心の中を推するに、父母

の一子の大苦に値ふを見るよりも強盛に見えたるを、法然いたはしとも思はで、末法には法華經の門を堅く閉ぢて人を入れじとせき、狂兒をたばらかして寶をすてさするやうに法華經を抛てさせける心こそ無慚に見え候へ。

とある。此の誠心があつてこそ初めて眞に折伏を行することが出来るのであります。人に勝つのを誇りとするやうな輕薄な念が少しでも交つてはならぬのであります。

主人曰く、後鳥羽院の御宇に法然といふもの有り選擇集を作れり。則ち一代の聖教を破し遍く十方の衆生を迷はす。其の選擇に云く、道綽禪師聖道淨土の二門を立て、聖道を捨て、正しく淨土に歸するの文。初に聖道門とは之に就て二ありと。乃至、之に准じて之を思ふに、應に密大及以實大を存すべし。然らば則ち今の眞言佛心天台華嚴三論法相地論攝論、此等八家の意正しく此に在るなり。曇鸞法師の往生論の註に云く謹んで龍樹菩薩の十住毘婆娑を案するに云く、菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道有り。一には難行道、二には易行道なりと。此の中の難行道とは即ち是れ

聖道門なり。易行道とは即ち是れ淨土門なり。淨土宗の學者先づ須らく此の旨を知るべし。設ひ先より聖道門を學べる人と雖も、若し淨土門に於て其の志有らん者は須らく聖道門を棄て、淨土に歸すべし。

○後鳥羽院の御宇 法然上人が選擇集を作つたのは後鳥羽天皇の建久九年三月のことで、關白藤原兼實の求めに應じて淨土宗の教義の概要を述べたのであります。それは此の立正安國論の書かれた時より六十一年前のことでありました。○法然 名を源空といひ、法然とは其の房の名であります。美作の人でありますが十五歳の時に叡山に登つて天台宗の教義を學び、其の後諸宗の教義を研究し、一切經を五度も讀んだといふことであります。然るに四十三歳の時、即ち承安五年の春に至り唐の善導の書いた觀無量壽經疏を讀んで、多年の疑ひが初めて解けたといふので、此より建曆二年の正月に八十歳で亡くなるまで、三十八年間熱心に念佛を唱へました。此の人が吾が國に於ける淨土宗の開祖であります。○選擇集 委しくいへば選擇本願念佛集といふのであります。全體が十六段に分れて居ますが、一段毎に淨土三部經（無量壽經、觀

無量壽經及び阿彌陀經）の中の言葉か、若くは支那の曇鸞、道綽、善導といふやうな人々の言葉を引き、之に自身の意見を付け加へまして、淨土宗の教義がまことに徹底的に説明されてあります。○道綽禪師 支那の陳の時代に生れて十四歳の時に出家し、初めは深く涅槃經を信じて居たのですが、四十八歳の時に玄中寺にある曇鸞法師の碑文を見て大に感じ、此より念佛を信するやうになりました。唐の太宗の貞觀十九年（吾が孝徳天皇の御宇）に八十四歳で亡くなるまで三十七年間淨土宗を弘めることに力を盡しました。其の著はしたものに『安樂集』といふのがありまして、今此處に引いてあるのも安樂集の中の語であります。○聖道淨土の二門 法華經とか華嚴經とかいふやうな經典を讀んで佛の御心の在る所を知り、之に依つて修行を重ねて悟りを得やうとするのを聖道門といひ、専ら阿彌陀佛を信じて極樂淨土へ往生することを期するのを淨土門といふので、佛教の信仰を大別すると此の二種になるといふのが道綽の考へであります。○聖道を捨て、正しく淨土に歸する 末法の世になると世間が非常に複雑になり、なか／＼經典を委しく研究して悟りを得るなどいふことの出来るものではないから、阿彌陀佛の御慈悲に繼つて極樂淨土に往生することを期するより外はないといふのであります。

○之に就て二あり 聖道門の中に二種あつて、小乗と大乘とであります。小乗といふのは唯だ自己一身の迷ひを除き苦を脱れることを主とした教へであり、大乘は唯だ自己を救ふだけでなく、他の人をも救ふべき道を教へたものであります。それ故に苟くも佛教を信する以上は大乘を信じなければならぬのであります。○乃至 此の間に、末法の世に入つては小乗でも大乘でも、凡て經典を研究して悟るといふやうなことでは役に立たないから、淨土門に歸するより外はないといふ、道綽の説を略してあるのであります。○之に準じて之を思ふに 此處から後が法然上人の附け加へた言葉で、その中に曇鸞法師の説が引いてあるのであります。

○當に密大及以實大を存すべし 密大といふのは大乘の中の密教のこと。實大といふのは大乘の中の實大乘のことであります。密教といふのは眞言宗のことで、眞言宗の方で主張する所に依りますと、眞言宗は大日如來の説かれた所に基いて立てた宗旨であるから密教である、他の宗は皆釋迦如來の説かれた所に依つて立てた宗旨であるから顯教であるといふのであります。密とは深いこと、顯とは浅いことであります。釋迦如來といふ佛は大日如來が假に此の娑婆世界に出現されたものに過ぎぬから、その説かれたことは大日如來が直接に與へられた教へより

浅いものであると斷定して、自分の宗のみが密教であるといつて居るわけであります。それから實大乘といふのは法華經のことであります。法華經を説かれる以前の教へは皆方便の教へで、法華經のみが眞實の教へであるといふことを、釋尊が御自身に仰せられました。それで法華經以前のを盡く權大乘、法華經のみを實大乘といふので、權とは即ち方便のことであります。而して此の法華經に依つて立てられた宗旨が即ち天台宗であります。道綽は此の眞言宗や天台宗のことを少しもいつて居ないけれども、法然上人の考へによると、淨土門以外のものを盡く聖道門といふのならば、眞言宗や天台宗も聖道門の中に入るものと見て宜いといふのであります。○佛心 禪宗のことを佛心宗といふのであります。禪宗では自己の心中に佛があるといふことを悟るのが主でありますから、之を佛心宗と稱するわけであります。○華嚴三論法相 奈良朝の末までに吾が國には六宗が傳はりましたが、その中で此の三宗は何れも大乘の宗であります。○地論攝論 此の二宗は支那に弘まつたものであります。地論宗は華嚴宗が盛んになると共に衰へてしまひ、攝論宗は法相宗が盛んになると共に衰へてしまつたので、二宗共に吾が國へは傳はりませんでした。○正しく此に在り 何れも聖道門といふ中に入るべきもの

であります。

○曇鸞法師 初めて支那に淨土宗を弘めた人で、印度から來た菩提流支といふ人にあつて教へを受けてから淨土宗に歸依し、東魏の興和四年（吾が欽明天皇の御宇）に六十七歳で亡くなるまで念佛を勧むることに力を盡しました。○往生論の註 往生論といふのは印度の世親菩薩の作で、阿彌陀佛を念じて極樂に往生することを勧めたものであります、曇鸞が此の書の註釋を作りました。○龍樹菩薩 佛滅後七百年の頃に南天竺に出て、大乘佛教を弘むるのに最も功のあつた人であります。密教の方で龍猛といふのも此の人のことであります。○十住毘婆娑 元來此の十住毘婆娑論といふのは華嚴經に基いて書かれたので十七卷ありますが、その中の『易行品』といふのが淨土宗で重んじられて居るので、此處に引かれたのも其の中の文であります。○阿毘跋致 不退轉と譯すので、佛に成るまで信仰を持ち続けることを申すのであります。阿惟越致といふのも同じ意味であります。○難行道 經典等を研究して悟りを得たいと望んでも、到底其の望みは達しられないのでありますから、之を難行道といふのであります。○易行道 阿彌陀佛は一心になつて自分の名を十たび唱へた者は必ず救つてやるといふ誓ひを立

てられたのでありますから、阿彌陀佛のお慈悲に依つて救はれることを求むるならば其の願ひは必ず叶ひます。それ故に之を易行道といふのであります。○此の旨を知るべし 淨土門でなければ救はれぬといふことを知つて信心を怠るなといふのであります。

此より法然上人の著はした選擇集の文を引いて、此の淨土宗の教義に徹底的の批判を加へらるのであります。少しく遡つて此の教義の由來を考へて見ませう。此の阿彌陀佛の徳を稱へ、極樂淨土の莊嚴なるさまを説かれたのは無量壽經と觀無量壽經と阿彌陀經との三部であります。之を稱して淨土の三部經と申すのであります。此等は何れも釋尊のお説きになつたものでありますから、何れも『佛説』といふ二字が冠せられてあります。併しながら此等は何れも方便の經といふ中に屬すべきものであります。尤も此等の經は法華經と時を同じうして説かれたものであります。法華經が靈鷲山で説かれたのは八年間であると申しますが、釋尊は八年間絶えず法華經のみを説いて居られたのではなく、法華經を説き初められた時から、之を説き終られた時までが八ヶ年であつたのであります。此の八年間には折々靈鷲山以外の所へも御巡教になりました。それで此等三部の經典は何れも此の八年間に説かれたものには相違ないのであります。

但し此の三部の經典が法華經を説かれたのと同じ八年間に説かれたものであるから、其の内容に於ても同等のものだと考へてはならぬので、今までに再三引用した。

我が所説り經典無量千萬億にして、已に説き今説き當に説かん、而も其の中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり。

とあるのを無視しては、佛意を明かにすることの出来るものではない。此の靈鷲に於ける説法より以前の四十餘年間は『已に説き』といふ中に含まれ、靈鷲山に於ける八ヶ年間は盡く『今説き』といふ中に含まれ、それより御入滅までの間は『當に説かん』といふうちに含まれるのであるから、たとひ法華經と同時に説かれたことでも、其の内容は到底法華經に及ばぬといふことを、釋尊御自身に明言して居らるゝので、後世に至つて之を疑つては濟まないであります。

併しながら此の阿彌陀佛の信仰といふものは、此處にあります通り、佛滅後七百年代に於て現に龍樹菩薩が説いて居られます。また支那に於ては東魏の曇鸞法師が初めて念佛を勧めたのであります。唐代に入つて道綽とか善導とかいふ有力者が出たので、阿彌陀佛の信仰といふものが非常な勢力を有するやうになりました。吾が國は奈良朝から平安朝へかけて支那との交通が頻繁

でありましたので、此の阿彌陀佛の信仰といふものも自然と傳はつて参りました。殊に叡山に於ては佛教各宗の教義が盡く研究せられ、支那から新しく傳はつたことは何でも先づ此の叡山で研究さるゝといふ状態でありましたので、阿彌陀佛の信仰に就ても、叡山では之を研究する人が少くなかつたのであります。その結果として朱雀天皇の天慶元年に至り、叡山から空也上人が出て、京都の巷に立つて往來の人に念佛を勧めました。此の人が吾が國に於ける念佛の魁をした人であります。

其の後叡山の慧心僧都は念佛を勧むるために大に力を盡しまして、往生要集といふ書を著はしましたが、此の書は非常な影響を世間に與へました。此の書の出來たのは華山天皇の永觀三年で、彼の空也上人が念佛を唱へ初めた時から四十七年後のことです。それより百二十二年を経て鳥羽天皇の永久五年に至り、良忍上人が融通念佛を唱へ、また阿彌陀佛の信仰を勧むる上に大なる力を加へました。斯ういふ經過を経て法然上人が出現したのであります。上人の選擇集の出來たのは彼の空也上人が京都の街に立つて念佛を勧めた時から數へて、二百六十年の後であります。此等の人々は阿彌陀佛の信仰を勧むるといふ點に於ては固より一致して居るのであり

ますが、法然上人の主張には上人獨特の點のあつたことを注意しなければなりません。

法然上人以前の人々は阿彌陀佛の功德に勝れるものはないといふことを説きましても、他の佛菩薩等を阿彌陀佛と共に信することを必ずしも禁じませんでした。然るに法然上人に至つては『專修念佛』といふことを主張したのであります。即ち信仰といふものは純一でなければならぬといふ立場から、専ら阿彌陀佛のみに頼つて一切他の佛菩薩等を尊信してはならぬ、又専ら淨土の三部經のみを讀誦し、他の經論等を讀誦することを止めなければならぬといふのであります。是れほどに心が決定して、初めて其の信仰が力強いものになるのであります。阿彌陀佛の信仰を勧むる説としてはまことに徹底的のものと申すべきであります。此の主張は彼の曇鸞とか道綽とか善導とかいふ人々の意見と正しく一致して居るのであります。空也以下の人々の功勞も没することは出来ませぬけれども、淨土宗としては支那に出た三人の系統を直接に繼いだものが即ち法然上人なのであります。

此の淨土宗が非常な勢を以て弘まつたのは、勿論法然その人の力に依るのであります。また一には其の時勢の然らしめた所であることも認められなければなりません。上人が淨土宗を弘む

るために起つたのは高倉天皇の安元元年で、平清盛が太政大臣として政權を握つて居た時でありました。それから上人が亡くなつたのは順徳天皇の建暦二年で、鎌倉の將軍は實朝でありましたが、北條義時が執權として實際に政權を握つて居たのであります。此の間に於ては戦亂が打續いて、平家も亡び又源義仲も亡びました。斯ういふ時代に於て多くの人が人生の無常を觀するのには固より當然の事であります。武士は常に戰場に立つのでありますから、親子兄弟夫婦が生き別れ死に別れの悲しみにはあはなければなりません。又農民や商人は直接にさういふ目には値ひませぬけれども、さういふ悲しい有様を毎日目撃するのであります。また農民が丹誠して耕して居た田地が戦争のために踏み荒されたり、商人が建て上げた店を戦火のために焼き拂はれたりすることも絶えず起ります。此等の出来事は皆人々に人生の無常を觀せしむるのに充分なる力があつたのであります。

尙ほ又戦争以外に於て世間の變遷を見ても無常を觀ぜざるを得ませんでした。先づ藤原氏といふものは奈良朝から平安朝へかけて非常な勢力でありまして、何事も思ふまゝに出来たのであります。此の全盛の状態はいつ迄も續くであらうと思はれて居りましたところが、白河法皇が院中

に於て政治をお執りになるやうになつてから、さしも久しく打續いた藤原氏の勢力は地に墮ちてしまひました。此の院中の政治といふものも餘り久しく續かないで平氏の全盛時代となりました。平氏は政權と兵權とを共に一手に握つて居たので、其の勢力は藤原氏以上でありましたが、清盛が死ぬと同時に其の勢力は全く失はれ、終に一族が盡く滅亡してしまひました。清盛が太政大臣になつた時から平氏の滅亡までは僅かに十八年でありました。此の平氏に代つて興つたのが源氏であります。源氏の盛んであつたのも實に僅かの間で、頼朝が死ぬと同時に實權は北條氏の手に移つて、頼家や實朝はたゞ名義上の將軍に過ぎませんでした。幕府が鎌倉に開かれてから頼朝の死んだ時までには僅かに十五ヶ年でありました。此等の事實も人々に人生の無常を觀ぜしむる材料としては充分に有力なものであります。

斯ういふ時代に於て淨土宗が説き弘められたので、人生の榮枯盛衰は絶えず移つて行くので、人生はまことに夢のやうなものであるといふ説は、凡ての人に非常な感銘を與へました。又來世の生命は永遠なものであつて、阿彌陀佛を信じさへすれば來世の生命は永く平和であり安穩であるといふ説は何人の心をも惹き着けずには居ませんでした。又奈良朝から平安朝へかけて榮えた

佛教は次第に貴族的なものになつてしまひまして、地位あり身分ある人々のみが寺院に歡迎せられ、貧賤な者は世間に見棄てられて居るのみならず、僧侶なども全く相手になつてくれぬといふやうな有様でありましたが、法然上人を始め淨土宗を弘むる人々は全く之に反して、世間の逆境に在る者を主として勞はり慰め、往生極樂といふ大なる希望を與ふることに力を盡したのであります。此の宗が忽ちにして日本全國を動かすやうな大勢力を得るまでになつたのは少しも不思議なことではありません。併しながら現世を夢幻の如くに見て、來世に於ける往生極樂を理想とするやうな信仰が國家の健全なる發展の基礎となり得ぬのは勿論のことです。此の日本國が八萬の國に超えたることを確信し、正しい信仰を確立することに依つて此の國の永遠の發展を謀られた日蓮聖人が、此の淨土宗に對して先づ第一に折伏を加へられたのは固より當然の次第であります。

さて此の選擇集には先づ道綽禪師の著はした安樂集の文が引いてありますが、道綽は佛教の全體を聖道門と淨土門とに分け、末法の世に入つて聖道門に依つて成佛を求めようとしても、到底その望みは達せられぬといつたのであります。其の理由としては、

其の聖道しやうだうの一種しゆは今時こんじ證しやうし難がたし。一には大聖だいしやうを去まること遙遠えうえんなるに由よる。二には理深りしん解微げみなるに由よる。

とあります。證するとは悟ること、大乘の經典を學んでも到底悟れるものではないといふのであります。大聖とは即ち釋尊のことで、釋尊より數千年の後に生れた者が、唯だ其の遺された經典だけを讀んで釋尊の御本意を知ることがはむづかしい。又大乗の經典は理深で、まことに深い理が其の中に説かれて居る。併しながら末法の世に生れた者は解微で、其の理解力が甚だ微弱であるから、其の深遠なる理を解して、正しい悟りを得るといふことは到底望まれぬ。それ故に阿彌陀佛の御力に頼つて往生極樂を期するより外はないと申すのであります。

尤も聖道門の中に大乘の教へと小乗の教へと二種があつて、大乘が小乗よりも勝れて居るといふことは道綽禪師も認めて居るのであります。小乗を學んだのみでは眞の悟りは得られぬのは釋尊の屢々仰せられた所であるから、之を疑ふことは出来ぬ。併し大乘の教理は非常に深遠であるから末法の世の者には之を解する力がない。さうして見れば大小乗共に頼りにはならぬので、頼りになるものは唯だ阿彌陀佛の御力のみであるといふことになるのであります。

此の道綽の聖道門と申した中に含まれて居るのは、華嚴とか般若とかいふ大乘經を學んで、非常に長い歲月を費して修行を重ねることなので、法華經や大日經の中に説かれてある修行に就ては何の批判をも加へて居ないのであります。然るに法然上人は『之に準じて之を思ふに應に密大及以實大を存すべし』と斷定してしまひました。末法の世に生れた者は深遠な教理を解する力がないといふのであるから、『密大』即ち大日經の教理も、また『實大』即ち法華經の教理も解せらるべき筈はない。それであるから淨土宗以外の一切の大乘教は皆末法の世に生れた者の頼りにはならぬといふのであります。これは法然上人の勝手な推論なのであります。此の一事に依つても、法然といふ人がいつも私の心を挾んで物事を斷定して居た人であるといふことがよくわかります。それであるから凡ての經論を精讀しながら、佛の御本意を正しく解することが出来ずに終つたものと思はれます。それで日蓮聖人は守護國家論の中に、

總じて選擇集せんたくしふの十六段だんに亘わたつて無量むりやうの謗法ぼうぽうを作なす根源こんげんは、偏ひとへに此この四字じより起おこる。といつて居らるゝのであります。四字とは即ち『准之思之』の四字のことです。

また此の道綽の語の次に、法然上人は曇鸞法師の語を引いて居りますが、曇鸞の説では聖道門

は難行道で、淨土門は易行道だといふのであります。曇鸞は婆羅門教から佛教の中の大乗の教へまでを凡て五種に分けて、何れも末法の世に生れた者の頼りにはならぬといひ、是の如き等の事目に觸れて皆是なり。譬へば陸路の歩行は則ち苦なるが如し。易行道とは但だ信佛の因縁を以て、淨土に生ぜんと願へば、佛の願力に乗じて便ち彼の清淨の土に往生することを得。佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る。正定は即ち是れ阿毘跋致なり。譬へば水路乗船は則ち樂しきが如し。

と申しました。正定の聚といふのは『信心の決定して動かぬ人々』といふことで、阿彌陀佛は誰でも誠心を籠めて自分の名を十度唱へたものは必ず極樂淨土に生れる力を與へてやるといふことを誓はれたので、此の誓ひを信じて阿彌陀佛の名を唱ふるのが即ち佛の願力に乗じて淨土に生るゝことを期するといふのであります。

此等の語を引用して後、法然上人は『たとひ以前に聖道門を學んだ人でも、末法の世は淨土門に依らなければ救はれぬといふことに氣がついたなら速かに淨土門に歸すべきである』といつて居るが、此の一語は非常に力があつたものと思はれます。上人は十五歳の時から四十三歳までの

間に諸の宗義を一々研究し、一切經を五度も讀んだ末に、其等を盡く棄て、淨土門に歸したのであります。それで自分の實行したことを人に勧めたのでありますから、能く人を動かすことも出來た筈であります。實行ほど貴いものはありません。日蓮聖人が法華經の行者を以て自ら許し、また其の弟子檀那に皆法華經の行者たることを期せよと教へられたのも、實行を貴ばれたからであります。常に法華經を讀誦して淨土門の攻撃をして居ながら、其の實行に於て淨土門の人々及びぬやうでは、まことに恥かしい次第ではありませぬか。お互ひに深く自ら反省すべきであります。

又云く、善導和尚正雜二行を立て、雜行を捨て、正行に歸するの文。第一に讀誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小乘顯密の諸經に於て受持讀誦するを、悉く讀誦雜行と名く。第三に禮拜雜行とは上の彌陀を禮拜するを除いて已外、一切の諸佛菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜恭敬するを、悉く禮拜雜行と名く。私に云く、此の文を見るに、須らく雜を捨て、專を修すべし。豈

に百即百生の專修正行を捨て、堅く千中無一の雜修雜行に執せんや。行者能く之を思量せよ。

○善導和尙 支那の隋の時代に生れ、十歳の時に出家し、二十九歳の時に道綽の教へを受けて淨土宗に歸依し、最も熱心に念佛を勤めて著述も多くなりましたが、唐の永隆二年（吾が天武天皇の御宇）に其の寺の庭にある柳の木に上つて、庭へ飛び下りて死にました。此の世を厭うて早く淨土へ往生することを望んだ爲めと思はれます。時に六十九歳でありました。此處に引かれたのは其の著した觀無量壽經疏の中の文であります。○正雜二行 阿彌陀佛のみを頼つて淨土に往生することを期するのを正行といひ、其の他の佛神等を信ずるのを盡く雜行といつて排斥するのであります。○雜行を捨て、正行に歸する 専ら阿彌陀佛を頼むといふ精神でなければ救はれないから、雜行を捨てなければならぬといふのであります。○讀誦雜行 淨土三部經以外の經典を讀むことを一切讀誦雜行といつて排斥するのであります。○觀經等 觀無量壽經のことを略して觀經といふのであります。○受持讀誦する 受とは信ずること。持とは其

の信を永く持ち続けること。讀とは經文を見ながら讀むこと。誦とは經文を見ずに暗誦することとあります。○彌陀 阿彌陀佛のことを略して彌陀といふのであります。阿彌陀とは無量壽といひ、また無量光といふ意であります。○諸の世天等 諸國で祭られて居る神々のことを盡く申すのであります。○私に云く 法然上人が自分の私見を附け加へていふとの意であります。併し此處の文は善導の書いた『往生禮讚』の中の語をそのままに引いてあるのであります。○百即百生 阿彌陀佛は自分の名を十度唱へた者は必ず救ふといふ願を立てられたのであるから、百人が阿彌陀佛に頼れば百人共に必ず淨土に往生することが出来るといふのであります。○專修正行 一切他の信仰を止めて阿彌陀佛のみを信ずることとあります。○千中無一 聖門道などに入つた者は千人の中に一人たりとも救はるゝことは無いといふのであります。○執せんや 今まで聖道門で信心をして居たなどいつて之に執着してはならぬ、さういふ役に立たぬものは速かに捨て、しまへといふのであります。

次に選撰集には善導和尙の觀無量壽經疏の中の文が引かれてありますが、善導は五種の正行と五種の雜行の區別を説いて居るので、其の中の第一と第三とだけが此處に出て居るのであります。

す。今此の五種を一々擧げて見ると、第一には讀誦正行で、これは所謂淨土三部經のみを常に讀誦することであり、それから讀誦雜行といふのは淨土三部經以外の經論等を讀むことで、これは正しい信仰を勵む妨げとなるから慎まなければならぬと戒めてあります。第二には觀察正行で、これは阿彌陀佛の尊いことや、極樂淨土の莊嚴のさまを考へて信仰心を養ふことであり、それから觀察雜行といふのは阿彌陀佛や極樂淨土以外のことを彼此と考へるので、これも正しい信仰の妨げとなるといふので排斥されるのであります。第三には禮拜正行で、一心に唯だ阿彌陀佛を禮拜することであり、また禮拜雜行といふのは阿彌陀佛以外の佛菩薩を禮拜すること、本尊といふものは必ず一つでなければならぬのに、種々の佛菩薩を禮拜するのは正しい信仰の妨げになるのであるから之を禁ずるのであります。第四に稱名正行といふのは常に阿彌陀佛の名號のみを唱ふるであります。また稱名雜行といふのは阿彌陀佛以外の佛菩薩の名等を唱ふることで、これも正しい信仰を亂すものとして禁ぜらるゝのであります。第五に讚歎供養正行といふのは、たゞ阿彌陀佛のみを讚歎し、又種々の物を以て之に供養すること。讚歎供養雜行といふのは阿彌陀佛以外の佛菩薩を讚歎し供養することであり、讚歎供養は即ち歸依し感謝する

意を現はすものでありますから、阿彌陀佛を絶対に信ずる以上は、他の佛菩薩等を讚歎供養する念の起らう筈はないのであります。

以上五種の正行といふものが立てられてありますが、眞に正行と稱せらるべきものは第四の稱名正行で、其の他は助行と名けられてあるのであります。即ち淨土門の信者は常に南無阿彌陀佛と唱ふることを怠らなければ宜いので、其の他の事は必ずしも常に之を行ぜずとも、正行の助けとして、然るべき時に之を行すれば宜いと定められて居ます。稱名を特に重んずるのは所謂彌陀の四十八願中の第十八願に基くものであります。此の四十八願といふのは無量壽經に出て居るので、阿彌陀佛が法藏比丘として菩薩行を勵んで居られた時に四十八條の願を立てられたといふのであります。其の第十八條には、

設たひ我佛わたぼくを得たらんに、十方ぼくの衆生しゆじやう、心こころを至いたし信樂しんがくして我が國くにに生なれんことを欲ねがうて乃至なほ十念じゅうねんせん。若もし生うま

とあります。十念といふのは佛の名を十たび唱ふること、阿彌陀佛の名を一心になつて十たび唱ふる者には皆極樂淨土に生るべき力を與へてやらう。それが出来ぬやうな事なら自分は佛には

なるまいと誓はれたのであります。之に基いて阿彌陀佛の名號を唱ふることが正行として最も重んぜられて居るわけであります。

また『百即百生』とか『千中無一』とかいふ語は、善導の作つた往生禮讚の文に依つたものであります。善導は正行の貴いことを委しく説いた後で、

余比日自ら諸方の道俗を見聞するに、解行同じからず、專雜異なり。但だ意を專にして作せば十即十生。雜を修して至心ならざれば千中無一。

といひ、尙ほ、

行住坐臥必ず心を勵まし己を剋して、晝夜廢すること無く、畢命を期と爲すべし。

といつて奨勵してあります。往生極樂を求むるための信仰は吾々の従ふべきものではありませぬが、信仰の大切なことを力説して居るのはまことに貴ぶべきことであります。涅槃經の中にも、

放逸は涅槃に赴く道にあらず。

と戒めてありますが、如何に多くの教へを學んでも、一心に之を信じ、また之を實行する決心がなければ、其の學んだことは殆んど何の役にも立ちませぬ。お互ひに此の事をよく思慮すべきで

あります。

又云く、貞元入藏錄の中に、始め大般若六百卷より法常住經に終るまで、顯密の大乘經惣じて六百三十七部、二千八百八十三卷なり。皆須らく讀誦大乘の一句に攝すべし。當に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も、隨自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉ぢざる者は唯だ是れ念佛の一門なり。

○貞元入藏錄 唐の徳宗の貞元元年（吾が桓武天皇の御宇）に編纂された一切經の目錄であります。佛教が漸く支那に弘まると共に、經典がだん／＼に漢譯されて來たのであります。唐代に於ては佛教の信仰の篤い天子が続いて出たので、其の保護の下に經典の漢譯が盛んに行はれました。それで唐より以前の譯を舊譯といひ、唐になつてからの譯を新譯といふ區別も出來たのであります。此等一切の譯本を盡く擧げたのが此の貞元入藏錄といふのであります。○讀誦大乘の一句に攝す 此の六百三十七部といふ經典の何れを讀むにしても、要するに皆大乘の

經典を読むことなのであるが、經典を読んで研究などをして居ては到底救はれぬのでありますから、末法の世に入つては皆役に立たぬことなのであります。○隨他の前 佛の教へには方便の教へと眞實の教へと二種がありまして、最初には方便の教へを説いて聽く者の機根を調へられ、後に至つて眞實の教へを説かれるのであります。方便の教へといふものは聽く人の性質に應じ程度に應じて、それ〴〵之に適するやうに説かれるのでありますから、之を他に隨つて説くものといはれるので、他とは即ち聽く人のことであります。○定散の門を開く 定とは決定した心といふことで、佛の教へを固く信じて少しも心が外へ向くといふことのないものであります。散とは散亂した心といふことで、信心に専ではなく、折々は心が外へ向くのであります。定心ならば勿論救はれるのでありますが、たとひ散心でも決して排斥すべきものではありません。最初は折々心が外へ向いても、なほ久しく信心を續けて居れば結局は定心になるのでありますから、散心の状態から入つても宜いといふことが許されてありますので、定散二つの門が開かれてあるといふのであります。○隨自の後 佛の眞實の教へといふのは、其の自ら信じて居られる所を其のまゝに説かれるのでありますから、佛の御自身の心に隨つて説くといふ

意味で、之を隨自と申すのであります。法華經が即ち隨自の教へなのであります。念佛門の人々は之を否定して、念佛を勧めらるゝのが即ち隨自の教へだと主張して居るのであります。○定散の門を閉づ 定心でも散心でも兎に角經典を研究してから悟るといふやうなことでは間に合はぬ、念佛でなければ救はれぬといふのであります。

此の段に於て法然上人は、釋尊が阿彌陀佛の徳を稱へて、往生極樂を願ふことを勧められたのが隨自意の説、即ち眞實の教へであつて、其の他は盡く隨他意即ち方便の教へであると斷定して居るのであります。これは法華經の文と全然兩立せぬ説であります。前にも申した通り法華經の方便品には、
正直に方便を捨て但だ無上道を説く。

とあるのでありますから、此の法華經が方便の教へであらう筈は斷じてありませぬ。殊に此の語の前には、

今我喜びて畏無し。

とありまして、釋尊は此の法華經を説くべき時節の到來したことを深く満足に感じられたと仰せ

られたのであります。此の經が方便の教へであつて、此より外に眞實の教へがあるといふのは、如何にしても信ぜられぬことでもあります。然るに法然上人のやうに、阿彌陀佛を念ずることを勧められたのが釋尊の眞實の教へであると見れば、法華經は方便の教への中に入らなければならぬこととなります。

そこで吾々は佛語に従つて法華經を眞實の教へと定むべきでせうか。或は法然上人に従つて法華經を方便の教への中へ入れようか。此の疑ひを解かなければならぬことになるのであります。勿論法然上人は御自身の考へのみで説かれたのではなく、曇鸞等三人の高僧の説に基いて説かれたのであります。如何に學徳の高い人でも佛に對比すべき人はあり得ないことでもあります。佛の智慧は絶対のものであります。無量義經に於て多くの菩薩が佛を讚した語にも、

清淨無邊にして思議し難し。

とあります。即ち何人も測ることの出来ないほどの智慧を具へて居らるゝといふことでもあります。されば吾々は如何に優れた人の意見でも、佛語と一致せぬものには従はぬことにしなければならぬと存するのであります。

又云く、念佛の行者必ず三心を具足すべきの文。觀無量壽經に云く。同經の疏に云く、問うて云く、若し解行の不同、邪雜の人等有らんに、外邪異見の難を防がん。或は行くこと一分二分にして群賊等喚び回すとは、即ち別解別行の惡人等に喩ふと。私に云く、又此の中に一切の別解別行異學異見等と言ふは、是れ聖道門を指すなり。

○三心 至誠心と深心と回向發願心との三つであります。至誠心といふのは至誠を以て淨土に往生することを願ふ心であります。深心といふのは深く淨土を願うて、一切他のことを願ひぬ心であります。回向發願心といふのは此の世に於て積む所の一切の功德は、唯だ淨土に往生することのみ役立つものであると信ずる心であります。此の三心が揃つて居れば、必ず往生の願が達せらるゝものと教へられて居るのであります。○觀無量壽經に云く、此の經文が略してあります。經文には『若し衆生有りて彼の國に生ぜん願せん者は、三種の心を發せば即ち往生す。何等をか三と爲す。一には至誠心、二には深心、三には回向發願心なり。三心を具す

る者は必ず彼の國に生ず』とあります。○問うて云く、善導の書いた觀無量壽經疏の中に、此の回向發願心に就いての説明があつて、次に深心といふことの説明をするために問答を設けて、眞實の心を以て彌陀の誓願を信じなければならぬと勸めて居るのであります。○解行の不同、佛の御心を正しく解することも出來ず、また念佛の修行に一心にならぬ者も隨分あるのであります。○邪雜の人、心が迷つて居るために雜行の方に傾く人が多いので、此等の人のために譬喩を説くといふのでありますが、これが有名な二河白道の喩であります。或る人が西の方へ向つて行くと左右に火の河と水の河があつて、其の中間に五寸ばかりの廣さの細い道がある。此の道を通らなければ西の方へは進んで行かれない。こゝで一足踏み外せば左右の何れかの河へ落ちてしまつて前へは進めない。其の人が一心になつて細い道を進んで行くと、うしろの方に惡人が居て『その道を行くと必ず足を踏み外して、何れかの河へ落ちて死んでしまふ。そんな危い所へ行かないで、早く歸つて來い』といふ。併し其の人は此等の言葉に迷はされずに細い道を何處までも進んで行つたので目的の地に達することが出來た。是れが譬喩の大意であります。西の方へ行くとといふのは淨土に往生するのを望むこと。細い道といふのは信心の

こと。火の河といふのは瞋恚の念のこと、水の河といふのは貪欲の念のことで、信心が弛むと何れかの迷ひが起るのであります。惡人といふのは念佛をやめて他の信仰をするやうに勸める人々のことであります。○別解別行の惡人等、念佛以外の信仰をもつて居る人のことを別解別行の人といふので、これは阿彌陀佛の御慈悲の妨げをするものであるから、之を人と呼ぶのであります。○私に云く、此より下は法然上人の附け加へた言葉であります。○是れ聖道を指す、天台宗とか華嚴宗とかいふのは皆盡く聖道門といふ中へ入るので、それらに世間の人を救ふつもりで居るのではあります。末法の世は念佛でなければ救はれぬといふことに心がつかないで、却つて之を妨げるのであるから、皆惡見の者といはなければならぬと法然は斷定したのであります。

此の段に引かれた二河白道の喩の中に、諸宗の學徳高き人々を群賊に比したのは、後に至つて日蓮聖人の批評して居られます通り、まことに不法なる惡言であります。西へ向つて行くのに至て狭い一筋の路があるのみで、一足踏み外せば火の河か水の河へ落ちてしまふといふ譬喩は、吾々にもまことに適切な訓戒と思はれます。信心を貫いて行くのは甚だ困難なことであります。

て、誰でも始終自ら戒めて居なければならぬことであります。日蓮聖人も常に弟子檀那の人々に此の事に就て教戒を與へて居られます。例へば松野氏に御與へになつた御書の中には、(前に一度引きましたが)

魚の子は多けれども魚となるは少く、菴羅樹の花は多く咲けども菓になるは少し。人もまた此の如し。菩提心を發す人は多けれども、退せずして實の道に入る者は少し。都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたばらかされ、事にふれて移りやすきものなり。鎧を着たる兵者は多けれども戦に恐れをなさざるは少きが如し。

とあります。又同じく上野氏への御書に魚の龍となることの稀なのを以て佛と成る者の稀なのに譬へられたのがあります。即ち、

唐土に龍門と申す瀧あり。たかき事十丈水の下ること悍兵が矢を射落すよりも疾し。此の瀧に多くの鮒あつまりて登らんと申す。鮒と申す魚の登りぬれば龍となり候。百に一、千に一、萬に一、十年二十年に一も登る事なし。或は急き瀬にかゝり、或は驚鷹鷲鼻にくらはれ、或は十町の瀧の左右に漁人どもつらなり居て、或は網をかけ或は汲み取り、或は射て取るものもあ

り。魚の龍となること此の如し。

とあり、之に續いて平氏の者が非常な苦勞をして、やうやく殿上人となつた實例を引かれまして、

佛になる道これに劣るべからず。魚の龍門を登り、地下の者の殿上へまゐるが如し。

とあり、更に信心が弛んで墮落した者の例を引かれて、

彼は人の上とこそ見しかども、今は我等の身にかゝれり。願はくば我が弟子大願を起せ。……同じくばかりにも法華經の故に命をすてよ。

と御勵ましになりました。不惜身命といふことを誰も口にはいひますが、眞に有らゆる艱難に屈せずして信心を貫くことは難かしいものであります。貫かなければ切角信心しても何のかひもありません。お互ひに日々勵ましあひ戒めあつて、此等の御訓戒に背かぬやうにいたしたいものであります。

又最後結句の文に云く、夫れ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に且

らく聖道門を闡あきらいて選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雜二行の中に、且らく諸々の雜行を抛つて選んで應に正行に歸すべし。

○生死を離れんと欲せば 人生には種々の變化が絶えずあつて、片時も安穩でないので、之を生死の苦といふのであります。生死を離れるといふのは永く心の安穩を得ることでありませぬ。

○二種の勝法 佛教は凡ての教への中で最も勝れたものでありますから勝法といふのでありますが、此の勝法の中に聖道門と浄土門とがあつて、末法の世に於ては浄土門のみが萬人の歸依すべきものであるといふのであります。

以上で選擇集の本文の引用が終るのであります。此の選擇集は全體が十六段に分れて居るのでありますが、此處に引かれたのが其の末段で、法然上人が専修念佛を唱ふる趣意がこれで概括的に示されて居ります。即ち先づ聖道門を捨て、浄土門に歸して阿彌陀佛を頼まなければならぬ。又阿彌陀佛を頼むと決心した以上は一切他の佛菩薩等を頼んではならぬと申すのであります。吾が國に佛教が渡來してから凡て十宗の教義が弘まつたのであります。法然上人の見る所

に依れば、此の中で浄土宗以外の九宗は皆聖道門であります。又同じく阿彌陀佛を信するにしても、空也とか慧心僧都とか良忍とかいふ人々の信仰は皆雜行であります。浄土門に入つて正行を勵むといふのは法然上人の門に歸するより外はないわけでありませぬ。此の法然上人の浄土宗が非常な勢を以て弘まつた有様は、日蓮聖人が撰時鈔の中に、

されば法華眞言等をすて、一向に念佛せば十即十生、百即百生とすゝめければ、叡山東寺園城七寺等、始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞道理かと思えければ、眞眞座主落ちさせ給ひて法然が弟子となる。其の上設ひ法然が弟子とならぬ人々も、彌陀念佛は佗佛に似るべくもなく口ずさみとし、心よせに思ひければ、日本國皆一同に法然房の弟子と見えけり。此の五十年が間一天四海一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となりぬれば、日本國一人もなく謗法の者となりぬ。

とあるに依つてほゞ之を推すべきであります。

此の浄土宗と當時の世間の事情との關係は前に大略申しましたが、此の宗に歸依すれば唯だ朝夕に念佛を唱ふるのみで、難行苦行などは少しもせずとも、必ず來世には浄土に往生することが

出来るといふことが、殊に強い感銘を多くの人に與へたやうであります。例へば熊谷直實は或る事情から世を厭うて出家の志を起し、法然上人に面會して、極樂へ往生するには、どれだけの修行をしなければならぬかと尋ねました。之に對して法然上人が『たゞ暇のある時に彌陀の名號を唱ふれば宜いのである』と答へられたのを聞いて、熊谷は頻りに涙を拭うて居ました。法然上人が不思議に思つて『何故涙を流すのであるか』と尋ねると熊谷は、『自分は幾度か戰場に立つたのであるが、戰場で大将の御感に入るやうな働きをするには、命を投げ出してかゝらなければなりません。然るに極樂に往生するといふやうな大きな望みを遂げるのに、何の難かしいこともなく、たゞ暇のある時に佛の御名號を唱へて居れば宜いと承つて、あまりの有難さに涙が出て止まりませぬ』と答へたといふことであります。兎に角法然その人の努力も非常なものでありましたらうが、念佛の弘まるべき種々の事情も揃つて居つたので、僅か五十年ばかりの間に日本全國を風靡するほどの大勢力となつたものと見えます。随つてこれが法華經の弘通に最も大なる妨げとなるものでありましたので、日蓮聖人は先づ第一に此の宗に對して折伏を加へられたのであります。

之に就て之を見るに、曇鸞道綽善導の謬釋を引いて聖道淨土、難行易行の旨を建て、法華眞言惣じて一代の大乗六百三十七部、二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道難行雜行等に攝し、或は捨、或は閉、或は閣、或は拋、此の四字を以て多く一切を迷はし、剩へ三國の聖僧十方の佛弟子を以て皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の淨土三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心、法華經第二の若人不信毀謗此經、乃至、其人命終入阿鼻獄の誠文に迷ふ者なり。

○謬釋 此等の人々は自己の私見を以て佛説を解釋したので、これは尽く誤れる解釋なのであります。○一代の大乗 釋尊が八十歳で御入滅になるまでの御一代の間に説かれた大乘の教へを申すのであります。○聖道難行雜行等に攝し攝するとは收むるといふことであります。淨土門以外のものは盡く聖道門であるが、それ等は難行であり難行であるから末法の世の役に立たぬと盡く之を排斥してしまつたのであります。○或は捨或は閉或は閣或は拋 聖道門を捨て

て淨土門を取れ、聖道門を閉ぢて淨土門に入れ、聖道門をさし開いて淨土門に依れ、雜行を抛て正行に歸依せよといふのが法然上人の主張する所であります。○三國の聖僧 佛教は印度と支那と吾が國との三國に弘まつたので、これは聖僧ともいはるゝやうな人々の力に依るものであります。○唯除五逆誹謗正法の誓文 無量壽經に阿彌陀如來の四十八願が擧げてありますが、其の第十八願に何人でも一心になつて自分の名を十たび唱へた者は、必ず淨土に往生するといふ願を叶へてやるといふことがありまして、其の次に『唯だ五逆と誹謗正法とを除く』とあります。五逆といふのは父を殺すのと母を殺すのと阿羅漢を殺すのと、佛身より血を出すのと、和合僧を破るのとであります。此の中で和合僧を破るといふのは、心を協せて佛教を弘むることに力を盡して居る僧侶に仲違ひをさせて、其の妨げをすることでありまして、此の五つの罪は何れも大罪と考へられて居るのであります。それから誹謗正法といふのは佛の正法を譏つて其の流通を妨ぐることであります。此の五逆罪を犯した者と正法を誹謗した者とは、如何に阿彌陀如來に頼つても到底救はれぬと定められて居るわけであります。今此の道綽等の三人が凡ての大乗經は役に立たぬなど、申すのは正しく誹謗正法の罪を犯したものでありますから、斯う

いふ者は阿彌陀如來を頼んでも其の效がないと斷定されなければなりません。自分が救はれぬ者でありながら人を救ふことの出來ぬのは勿論のことです。○一代五時の肝心 天台大師が釋尊御一代の御說法を五つの時期に大別されましたが、其の第五の法華經といふものが最も大切なので、他は法華經を説く準備として説かれたものに過ぎぬのであります。○法華經第二 此處に引かれたのは法華經第二卷譬諭品の偈の文であります。○若人不信誹謗此經 此處の偈の文には『若し人信ぜずして此の經を誹謗せば則ち一切世間の佛種を斷ぜん』とあります。佛種を斷ずるといふのは佛に成る者が無くなつてしまふこととあります。此の法華經を誹謗するものがあると、之に惑はされて法華經を信する者がなくなつてしまつて、邪法のみが世に勢力を得るから、菩薩行を勵んで佛に成るといふやうな者はなくなるといふのであります。○其人命終入阿鼻獄 前の文から十四句ばかり置いて『其の人命終して阿鼻獄に入らん』とあります。阿鼻獄とは無間地獄のことです。法華經の弘まる妨げをする者は非常に大きな罪を作るものでありますから、死んで後には必ず無間地獄に墜つるであらうと申してあるのであります。

此に至つて日蓮聖人が選擇集に加へられたる批判には、最も重要な個條が二つあります。其の一は阿彌陀佛の誓願に背いて居るといふこと。其の二は法華經の中の戒めを犯して居るといふこととあります。先づ第一に誓願といはれたのは阿彌陀佛の立てられた四十八願の中の第十八の願のこととあります。此の第十八の願は前に申した通り、『若し阿彌陀佛の名號を十たび唱へたものは、必ず淨土に往生するといふ願ひを叶へてやらう』といふので、淨土宗に於て此の願を四十八願中の最も重要なものと認めて居ることは、唱名正行を特に重んじて居ることに依つて明かであります。然るに此の願には『若し生れずんば正覺を取らじ』とある次に、
唯だ五逆と正法を誹謗せんをば除く。

といふことが附け加へてあるので、此等の罪を犯した者は、いかに阿彌陀佛に頼つても決して救はれぬのであります。それは此の無量壽經を讀んで見れば、固より當然の事と思はれます。初め阿彌陀佛が法藏比丘として世自在王佛に事へ、菩薩道の修行をなさつた時に、其の志を述べられた語に、

布施、調意、戒忍、精進、是の如き三昧と智慧とを上れたりと爲ん。吾誓ふ、佛を得んに普く

此の願を行じて、一切恐懼の爲に大安を作さん。假使佛有して、百千億萬無量の大聖數恒沙の如くならんに、一切斯等の諸佛を供養せんよりは、道を求めて堅正にして劫かざらんには如かじ。

と仰せられました。布施とは一切の人に恵みを施すこと。調意とは自己の心中の一切の煩惱を除くこと。戒忍とは佛の與へられた戒律を守つて、如何なる場合にも瞋恚の念を起さぬこと。精進とは一心を打込んで修行を勵むこと。此等の事に専ら力を注いで智慧を磨いて行くのが即ち菩薩行と申すものゝ全體であります。それから一切恐懼の爲に大安を作すといふのは即ち一切衆生を救護するために力を盡すこととあります。凡夫はいつも種々の煩惱に動かされて其の心が甚しく不安でありますから、之を教へて其の煩惱を除かせ、其の心を安穩ならしむるやうにしてやるのが、菩薩の志とする所であります。『道を求めて堅正』といふのは即ち此等の事に力を盡して怠らぬこととあります。法藏比丘は此等の努力を重ねることが佛に供養するよりも大切であると思つて、之を勵んで怠らなかつたので、その結果として阿彌陀如來といふ佛になられたと申すのであります。

然るに五逆罪を犯すのと、正法を誹謗するのとは正しく此の佛の御志と相反することでありま
す。それ故に此等の罪を犯したものは決して救はぬと仰せられたのであります。殊に正法を誹謗
するといふことは何にも比べられぬ大罪であります。佛の數は限りなくあつて、其の與へられた
る教へは種々無量でありますが、一として衆生の惑を去り、衆生の苦を除かうといふ大慈悲心か
ら出ないものはありませぬ。それを誹謗して、衆生の之に歸依することを妨ぐるのは、即ち佛の
大慈悲を遮るものであります。佛が斷じて斯様なものを救はぬと仰せられたのは當然の事であり
ます。彼の淨土門の人々が諸佛に歸依することを一切禁じ、また諸佛の貴い教へを世に弘むるた
めに力を盡した人々を群賊に譬へて之を罵るといふのは正しく誹謗正法の大罪を犯して居るもの
と申さねばなりません。彼の人々が常に無量壽經を讀誦して居ながら、此の點に心がつかぬとい
ふのは實に愚の至といふより外はないことでもあります。

次に擧げられたのは法華經譬諭品の文であります。此の譬諭品に於て釋尊は所謂三界火宅の
譬を説かれました。『長者は其の子が今焼け落ちやうとする家の中に遊んで居て、其の生命を失は
うとするのを見れば、有らゆる手段を盡して之を救ひ出すのである。自分が一切衆生の迷ひを除

いてやらうとして心を盡すのも其の通りである』との意を述べられ、

今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ我が子なり。而も今此の處は諸
の患難多し。唯だ我一人のみ能く救護を爲す。

と仰せられました。一切衆生を盡く吾が子と思し召され、一人の力を以て盡く之を救護しようと
せられるのは實に洪大無邊なる御慈悲と申さなければなりません。少しなりとも此の御心持を察
したならば、此の佛の御教への普く世に弘まるやうに力を添へようといふ念を起さなければなら
ぬ筈であります。然るに之を誹謗して其の世間に流布することを妨げようとするのは、まことに
大なる罪を犯す者と申すべきであります。

世間に佛の貴い教へに歸依する念を起す者があつても、有らゆる困苦を冒してなりとも其の信
心を貫かうとまで決心する者は甚だ稀でありまして、多くの人は兎角逡巡し躊躇して其の心を決
し兼ねて居るのであります。然るに佛の正法を誹謗して『そんなものを信じても役に立たぬ』と
いふ者があると、之に誘はれて多くの人は皆信心を勵まうといふ志を捨て、しまふのでありま
す。それ故に誹謗の罪を説いて、

則ち一切世間の佛種を斷ぜん。

と申してあるわけでありませぬ。人は誰でも生れながらにして貴い佛性を具へて居るものでありませぬが、佛の正法を信じなければ、その具へて居る佛性は少しも其の光りを發することなく、皆種々の罪を重ねて居るばかりでありますから、切角佛性を具へて居るかひは無いのであります。世間が佛に歸依することを知らないで罪を重ねる者ばかりで充されてしまへば、全く惡魔の世界になつてしまいます。佛の正法を誹謗するのは此の如き結果を生むのでありますから、無間地獄に墮つるほどの大罪であると斷じられたのも尤もな事であります。現世に於て斯様な罪を犯して居りながら、來世に至つて淨土に生れることを祈つても、其の願ひの叶はう筈はありません。抑々因果の關係は三世を一貫して少しも亂れず、善惡の業は各その報を生むといふことは佛敎の全體に亘つての敎へでありまして、何れの宗に屬するものでも之を認めなければならぬのであります。

是に代末代に及び、人聖人に非ず。各冥衢に容つて並に直道を忘る。悲しい哉

腫脹を樹たず、痛ましい哉徒らに邪信を催す。故に上は國王より下は土民に至るまで、皆經は淨土三部の外の經無く、佛は彌陀三尊の外の佛無しと謂へり。仍て傳教義眞慈覺智證等、或は萬里の波濤を涉つて渡す所の聖敎、或は一朝の山川を廻つて崇むる所の佛像、若は高山の巔に華界を建て、以て安置し、若は深谷の底に蓮宮を起して以て崇重す。釋迦藥師の光を並ぶるや威を現當に施し、虛空地藏の化を爲すや益を生後に被らしむ。故に國主は群郷を寄せて以て燈燭を明かにし、地頭は田園を充て、以て供養に備ふ。而るに法然の選擇に依て即ち教主を忘れて西土の佛馱を貴び、付屬を抛つて東方の如來を閣き、唯だ四卷三部の經典を專にして、空しく一代五時の妙典を抛つ。是を以て彌陀の堂に非れば皆供物の志を止め、念佛の者に非れば早く施僧の懷を忘る。故に佛堂零落して瓦松の煙老い、僧坊荒廢して庭草の露深し。然りと雖も各護惜の心を捨て、並に建立の思を廢す。是を以

て住持の聖僧は行て歸らず、守護の善神は去て來ること無し。是れ偏に法然の選擇に依るなり。

○冥衢に容つて 暗い路に迷ひ入つたやうに邪道に惑はされて居るのであります。○瞳矇を樹たず 瞳矇とは眼の瞳に曇りが出來て物の見分けがつかなくなつたことですが、その時には針で刺して其の曇りを除かなければなりません。それが出來ないといふのは邪法を打破る者の無いのに喩へたのであります。○彌陀三尊 觀世音菩薩と勢至菩薩とは阿彌陀如來の化導を助くるために力を盡すものと考へられて居ますので、之を併せて尊んで彌陀三尊と申すのであります。○傳教 名は最澄といふので傳教大師と申すのは其の諡であります。十九歳の時から叡山に登つて深い研究を積み二十二歳の時に叡山の頂に一乘止觀院を建てられたのが吾が國に於ける天台宗の始めであります。桓武天皇の御信用が非常に厚かつたので叡山は益々榮えました。が、延暦二十三年の秋三十八歳で支那に留學し、翌年歸朝せられてから朝野の尊信彌々加はり、嵯峨天皇の弘仁十三年六月に五十六歳で入寂せられました。其の翌年勅命に依つて一乘止

觀院が延曆寺と改稱せられました。○義眞 傳教大師の弟子で大師と共に支那に留學しましたが、大師の亡き後は能く叡山を守つて居て、大師の遺志たる戒壇建立のことも勅許になり、また勅命に依つて天台宗第一代の座主に任ぜられました。淳和天皇の天長十年七月に入寂、壽は五十五でありました。○慈覺 名は圓仁といふので慈覺大師といふのは諡であります。傳教大師の弟子で、仁明天皇の承和二年から十年間支那に留學し、歸朝後に天台宗第三代の座主に任ぜられました。清和天皇の貞觀六年に入寂、壽は七十一でありました。○智證 名は圓珍といふので智證といふのは諡であります。義眞の弟子で、文德天皇の仁壽三年から六年間支那に留學し、歸朝後に天台宗第五代の座主に任ぜられました。宇多天皇の寛平四年に入寂、壽は七十八でありました。○萬里の波濤を涉つて 支那に留學したことを申すのであります。○聖教 經典のことです。其の頃はまだ吾が國に渡つた經典もあまり多くなかつたので、支那に留學した人々は大に苦心して經典を持つて歸つたものであります。○一朝の山川を廻つて 支那の各地を旅行して佛像などを讓られて歸つたのであります。○華界 堂塔のことを申すのであります。○蓮宮 同じく堂塔のことです。○釋迦藥師の光を並ぶる 釋迦如來の像は